

福岡市早良区

四箇周辺遺跡調査報告書

(5)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集

1983

福岡市教育委員会

福岡市早良区

四箇周辺遺跡調査報告書

(5)

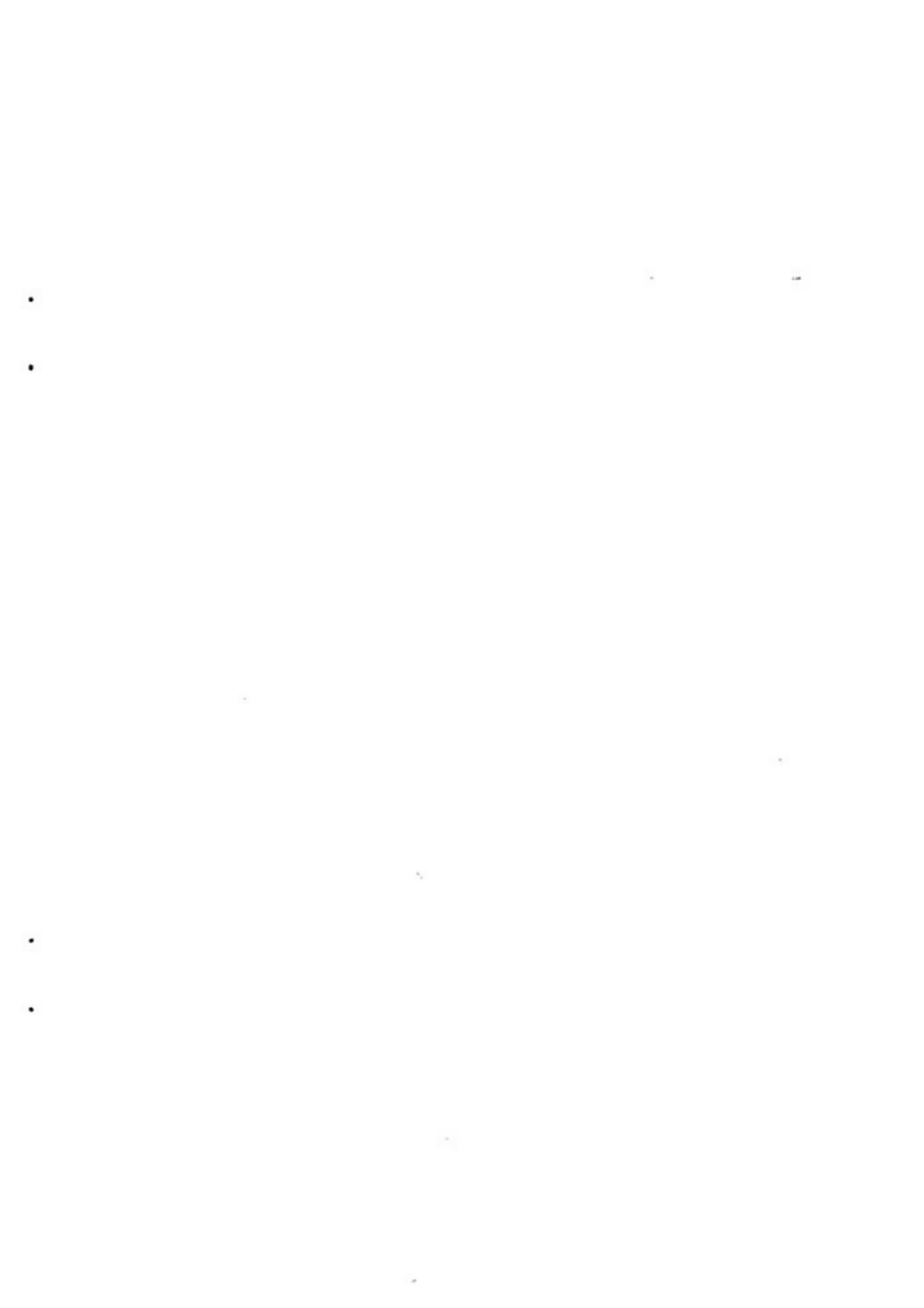
福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集

1983

8217

福岡市教育委員会







## 序 文

早良平野の中央付近に四箇田圃地の高層ビルが聳えています。四箇田圃地は住宅都市整備公団の前身である日本住宅公団が建設したものです。福岡市は公団の御理解と御協力を得、昭和49年から52年にかけて埋蔵文化財の発掘調査を行いました。その結果は膨大かつ貴重な成果として関係各方面の注目をあつめているところであります。とりわけ、狩猟、漁撈を生業とした縄文時代後期の集落跡や、稲作農耕を始めた弥生時代の水田跡、そしてそれぞれに伴う豊富な遺物には目を見張らせるものがあります。

これらの成果を踏まえ、本市は51年度より国庫補助事業として、四箇田圃地跡の発掘調査を行なっています。昭和57年度も1ヶ所の調査を行ない、縄文時代後期の人々の生活の址を検出し、本市の縄文時代の研究に貴重な資料を追加できる事ができました。本書が学術研究や学校、社会教育の分野において役立てていただければ幸いです。

調査に際し、有益な御助言をいただいた先生方をはじめ、参加御協力願った作業員のみなさまに、末尾ながら心より感謝申し上げる次第です。

昭和58年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 津 茂 美

## 例 言

1. 本書は四箇周辺地域における宅地造成等の開発事業に先行して埋蔵文化財の事前調査を行ない国庫補助を受けて昭和57年度に実施した四箇周辺地域内緊急調査の報告書である。
2. 事業は福岡市教育会文化部文化課埋蔵文化財第二係が行なった。発掘調査・資料整理・報告書の作成は、二宮忠司と補助員の渡辺和子が担当し、事務は岡嶋洋一が担当した。地形図は山崎龍雄が行なった。
3. 本書の執筆は、二宮、渡辺が分担して行なった。
4. 挿図は二宮、渡辺が主に行なったが、一部渡辺の指導のもとに尾崎京子、斉藤美紀枝、真名子順子が行なった。
5. 遺構・遺物の写真撮影は二宮、渡辺が行なった。
6. 本書の編集は二宮、渡辺が行なった。
7. 発掘調査によって出土した遺物・図面・写真は次年度の関連と四箇東遺跡との関連によって再度考察する必要があるため四箇遺跡調査事務所に収蔵・保管している。
8. 本書に掲載した地図は建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図N1-52-10-11-4ふくおかせいなんぶ(福岡11号-4)を複製したものである。
9. 挿図番号と図版番号は同一である。図版の内、土器に関しては縮尺不統一、石器はそれぞれ縮尺を記入した。

## 本文目次

I	はじめに	1
	1. 発掘調査に至るまで	1
	2. 発掘調査の組織と構成	1
	3. 立地と環境	2
II	発掘調査の概要	4
III	調査の記録	5
	1. L-11c 地点の調査	5
	1) 層序	5
	2) 縄文時代以降の遺構	5
	3) 縄文時代後期	7
	a) 包含層	7
	b) 遺構	7
	2. 出土遺物	10
	1) 土器	10
	2) 石器	52
IV	まとめ	91

## 挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 四箇周辺の遺跡分布図…………… (縮尺 1/25,000) ……………	1
Fig. 2 四箇周辺緊急調査地点位置図…………… (縮尺 1/2,500) ……………	3
Fig. 3 L-11C 地点位置図…………… (縮尺 1/600) ……………	4
Fig. 4 L-11C 地点土層断面図…………… (縮尺 1/60) ……………	6
Fig. 5 縄文後期遺物出土状態…………… (縮尺 1/120) ……………	9
Fig. 6 縄文後期遺物出土状態…………… (縮尺 1/120) ……………	9
Fig. 7 縄文後期遺物出土状態…………… (縮尺 1/120) ……………	9
Fig. 8 精製土器実測図—1…………… (縮尺 1/3) ……………	11
Fig. 9 精製土器実測図—2…………… (縮尺 1/3) ……………	12
Fig. 10 精製土器実測図—3…………… (縮尺 1/3) ……………	13
Fig. 11 精製土器実測図—4…………… (縮尺 1/3) ……………	15
Fig. 12 精製土器実測図—5…………… (縮尺 1/3) ……………	16
Fig. 13 精製土器実測図—6…………… (縮尺 1/3) ……………	17
Fig. 14 精製土器実測図—7…………… (縮尺 1/3) ……………	20
Fig. 15 精製土器実測図—8…………… (縮尺 1/3) ……………	21
Fig. 16 精製土器実測図—9…………… (縮尺 1/3) ……………	22
Fig. 17 精製土器実測図—10…………… (縮尺 1/3) ……………	23
Fig. 18 精製土器実測図—11…………… (縮尺 1/3) ……………	25
Fig. 19 精製土器実測図—12…………… (縮尺 1/3) ……………	26
Fig. 20 高坏形土器・脚合付土器実測図…………… (縮尺 1/3) ……………	27
Fig. 21 半精製鉢形土器実測図…………… (縮尺 1/3) ……………	30
Fig. 22 半精製鉢形土器実測図—1…………… (縮尺 1/3) ……………	31
Fig. 23 半精製鉢形土器実測図—2…………… (縮尺 1/3) ……………	32
Fig. 24 半精製鉢形土器実測図—3…………… (縮尺 1/3) ……………	33
Fig. 25 半精製鉢形土器実測図—4…………… (縮尺 1/3) ……………	34
Fig. 26 粗製土器実測図—1…………… (縮尺 1/3) ……………	37
Fig. 27 粗製土器実測図—2…………… (縮尺 1/3) ……………	38
Fig. 28 粗製土器実測図—3…………… (縮尺 1/3) ……………	39
Fig. 29 粗製土器実測図—4…………… (縮尺 1/3) ……………	40
Fig. 30 粗製土器実測図—5…………… (縮尺 1/3) ……………	41

Fig. 31	粗製土器実測図—6	(縮尺 1/3)	42
Fig. 32	粗製土器実測図—7	(縮尺 1/3・1/4)	43
Fig. 33	粗製土器実測図—8	(縮尺 1/3)	44
Fig. 34	底部実測図—1	(縮尺 1/3)	47
Fig. 35	底部実測図—2	(縮尺 1/3)	48
Fig. 36	底部実測図—3	(縮尺 1/3)	49
Fig. 37	土偶・土製品実測図	(縮尺 1/2)	51
Fig. 38	石鎌実測図—1	(縮尺 3/4)	53
Fig. 39	石鎌実測図—2	(縮尺 3/4)	54
Fig. 40	楔形石器, 石錐, 尖頭器実測図	(縮尺 3/4)	57
Fig. 41	つまみ型石器実測図	(縮尺 3/4)	58
Fig. 42	サイド・ブレイド実測図—1	(縮尺 3/4)	60
Fig. 43	サイド・ブレイド実測図—2	(縮尺 3/4)	61
Fig. 44	刃器実測図—1	(縮尺 3/4)	64
Fig. 45	刃器実測図—2	(縮尺 3/4)	65
Fig. 46	刃器実測図—3	(縮尺 3/4)	66
Fig. 47	刃器実測図—4	(縮尺 3/4)	67
Fig. 48	刃器実測図—5	(縮尺 3/4)	68
Fig. 49	刃器実測図—6	(縮尺 3/4)	69
Fig. 50	刃器実測図—7	(縮尺 3/4)	70
Fig. 51	剥片実測図	(縮尺 3/4)	73
Fig. 52	石匙, 削器, 搔器実測図—1	(縮尺 3/5)	76
Fig. 53	削器, 搔器実測図—2	(縮尺 3/5)	77
Fig. 54	削器, 搔器実測図—3	(縮尺 3/4)	78
Fig. 55	サヌカイト製剥片石器実測図	(縮尺 3/4)	79
Fig. 56	打製石斧, 打製石庖丁実測図	(縮尺 1/3)	82
Fig. 57	磨製石斧実測図—1	(縮尺 1/3)	83
Fig. 58	磨製石斧実測図—2	(縮尺 1/3)	84
Fig. 59	磨石, 石製円盤実測図	(縮尺 1/3)	86
Fig. 60	石皿実測図—1	(縮尺 1/6)	87
Fig. 61	石皿実測図—2	(縮尺 1/6)	88
Fig. 62	十字型石器, 磨製石器, 石錘, 勾玉実測図	(縮尺 1/1・2/3・1/3)	90

## 図 版 目 次

- |   |   |
|---|---|
| PL. 1 1) L-11c 地点全景<br>PL. 2 1) L-11c 地点全景<br>PL. 3 1) 中央部の凹地と遺物出土状況<br>PL. 4 遺物出土状態-1<br>PL. 5 遺物出土状態-2<br>PL. 6 遺物出土状態-3<br>PL. 7 遺物出土状態-4<br>PL. 8 精製土器<br>PL. 9 精製土器<br>PL. 10 精製土器各種文様<br>PL. 11 高坏形土器・土製品<br>PL. 12 土 偶<br>PL. 13 半精製・粗製土器<br>PL. 14 粗製土器<br>PL. 15 粗製土器<br>PL. 16 底部圧痕<br>PL. 17 石鉄 (2/3)<br>PL. 18 楔形石器, つまみ型石器等 (2/3)<br>PL. 19 サイド・ブレード, 刃器 (2/3)<br>PL. 20 刃器-1 (2/3)<br>PL. 21 刃器-2 (2/3)<br>PL. 22 刃器-3 (2/3)<br>PL. 23 削器, 搔器-1 (1/2)<br>PL. 24 削器, 搔器-2 (2/3・1/2)<br>PL. 25 打製石斧 (1/3)<br>PL. 26 磨製石斧 (1/3)<br>PL. 27 磨石, 石製円盤状石器 (1/3)<br>PL. 28 石皿 (1/4)<br>PL. 29 十字型石器, 磨製石器, 勾玉, 石錘 (1/1) | 2) 北西部のピット検出状態と土器出土状態<br>2) 北東部のピット検出状態<br>2) 南側凹地と遺物出土状況 |
|---|---|

## 表 目 次

Tab. 1	Pit 計測一覧表	8
Tab. 2	土器計測表—1	93
Tab. 3	土器計測表—2	94
Tab. 4	土器計測表—3	95
Tab. 5	土器計測表—4	96
Tab. 6	石器計測表—1	97
Tab. 7	石器計測表—2	98
Tab. 8	石器計測表—3	99
Tab. 9	石器計測表—4	100
Tab. 10	石器計測表—5	101
Tab. 11	石器計測表—6	102
Tab. 12	石器計測表—7	103
Tab. 13	石器計測表—8	104

## 付 図 目 次

付図—1	L-11c 地点全体図	(縮尺 1/120)
------	-------------	------------



Fig. 1 四箇周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

# I はじめに

## 1. 発掘調査に至るまで

昭和50年から開始した日本住宅公団(現在は都市整備公団と名称変更)四箇田団地の建設に伴ない四箇周辺地区は急速に宅地化されてきた。これに伴ない四箇周辺地区も昭和51年より国庫補助を受けて緊急調査を開始した。以来7年間調査を行ってきたが、その成果は各報告書に記載してきた。しかし残念なことに四箇丁-11d地点・K11-b地点等の多くの木器・建築材については今年度報告することができなかった。未報告分については来年度の予定である。

四箇周辺遺跡と四箇田団地内遺跡(以下四箇遺跡A~F地点と称する)の遺構・遺物と密接な関連を持つ、と言うより同一遺跡として考えなければならない。同一遺跡の中に3つの低微高地とその間を流れる水路が認められる。微高地には縄文時代前期(管畑・甕式土器を主に出土する遺構)、縄文時代後期後半(西平・三万田式土器を主体に出土する遺構)、弥生時代前期末から中期にかけての遺構、古墳時代初期の遺構があり(Fig. 2)。凹地には、弥生時代中期から、古墳時代初期にかけての杭列・壇状遺構が微高地の裾線に沿ってある。第1・第2微高地の範囲はほぼ明確になりつつあるが、第3微高地の範囲は今未定である。第3微高地には縄文時代後期後半の三万田式土器を主体とする包含層・遺構が調査(四箇東遺跡昭和52年度調査未報告)されているだけである。今回四箇東遺跡の南側(早良区四箇427番地、面積、450㎡)に谷敏昭氏より宅地造成の申請が出されたために試掘調査を行なった結果四箇遺跡と同様に包含層と遺構が認められ、四箇東遺跡のつづきであることが確認された。このため国庫補助事業として6月15日より調査を開始し、8月6日で終了した。

## 2. 発掘調査の組織と構成

四箇遺跡・四箇周辺遺跡の調査を開始してはや10年日をむかえようとしている。この間数多くの人達の努力と協力によって事故もなく調査、整理を完結することができた。関係者は次の通りである。

調査担当 福岡市教育委員会文化課理蔵文化財第二係

事務担当 四嶋 洋一, 事務補助 赤池能恵子, 山見 智子

発掘担当 二宮 忠司, 山崎 龍雄, 調査補助員 渡辺 和子

資料整理 尾崎 京子, 齊藤美紀枝, 真名子順子, 田中 里美, 藤内 光子

## 2 3. 環境と立地

調査棟 光雄, 尾崎 達也, 伊藤みどり, 池 ヲエ, 尾崎 八重, 菊地ミツヨ  
協力者 菊地 栄子, 菊地 キミ, 菫田 洋子, 菫田オリエ, 麻 ツイ, 下郡フミ子  
惣慶とみ子, 谷 ヒサコ, 典略 初子, 松隈ユキノ, 又野 栄子, 真名子千恵子  
真名子ユキエ, 結城千賀子, 鶴山千鶴子, 金子ヨシ子, 正崎由須子, 藤崎テル子  
谷 敏昭他

## 3. 環境と立地

早良平野における発掘調査は過去何年にもわたって行なわれてきた。四箇周辺遺跡の調査報告も今回で5回目であり、そのつど環境と立地の問題をふれてきたので今回はその要点だけを記すことにする。四箇遺跡・四箇周辺遺跡は昭和49年から調査を開始してきたが、この間、周辺に多くの遺跡が分布していることが明らかとなり、また昭和53年から開始した分布調査により早良平野の低湿地にも数多くの遺跡が発見されている。東を背振山から派生した油山山塊、西を同じ背振山から派生した西山・飯蓋・叶岳山塊にかこまれた平野部に室見川河川を持ち、礫形を基盤とした微高地をいくつも形成している。この微高地上に縄文時代前期から生活が営まれていたことを多くの遺跡が物語っている。一方山塊から派生した平野部にも数多くの遺跡が発見されている。山塊部の標には、古墳群がところ狭しと築造され、平野部には縄文時代から古墳時代までの遺構が切合って発見されている。昭和56年度から調査を開始した飯盛地区運動場整備事業内遺跡でも縄文時代後期から古墳時代にかけての生活址が検出されている。特に今年度の調査において旧河川をはさんで須恵器を主体とする住居址、掘立柱建物群と、土師器を主体とする住居址、掘立柱建物群との2つに区分できる点は注目される現象である。一方、低湿地の弥生時代後期から古墳時代にかけての生活遺構を上げてみるとここに注目する事実がある。早良平野において弥生後期～古墳時代初期にかけての住居址は現在発掘例がとぼしい。特に四箇周辺部において須恵器の出土した住居址等の生活址はまったくないと言ってよい。古墳時代の遺構は水路、塚状遺構、杭列等と認められるが土師器の有留式土器と平凡な土器群が最も多く出土しているにすぎない。これは今後の調査例をまつ必要性はあるが、弥生後期から古墳時代にかけて四箇周辺部は水田化され、住居址は高い部分標高でいけば約30m前後に移動したものと考えられる。ただ四箇周辺部よりわずかに高い標高26mにFig. 1の分布図16で見られるごとく灰(伴)塚古墳が1基認められることから一概には言えないかもしれない。

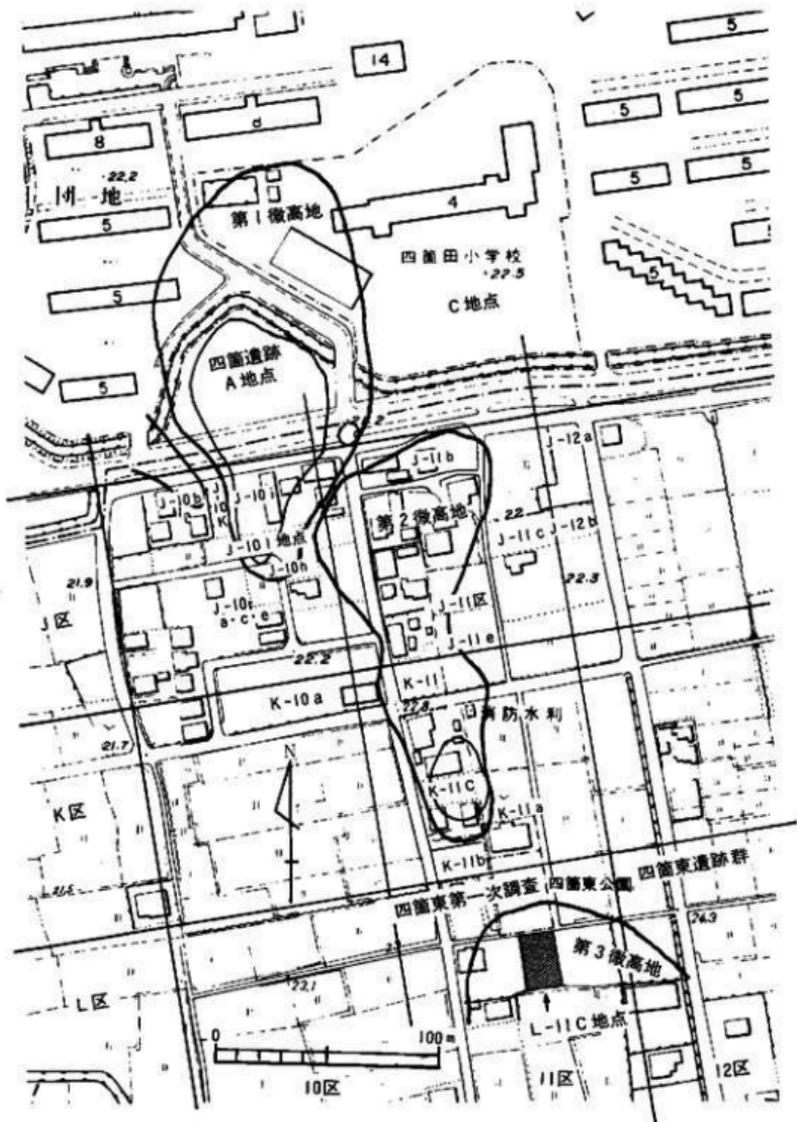


Fig. 2 四箇周辺緊急調査地点位置図 (縮尺 1/2,500)

## I 発掘調査の概要

今年度の発掘調査地点は、L-11c地点の1ヶ所である。四箇東遺跡の南側に位置している。遺構の状態も四箇東遺跡と同様な状態を示すものと思われたが、四箇東遺跡の包含層が南にいくにしたがって浅くなっている状態を示していたので、L-11c地点では遺構の状態が良好に残っているものと思われた。しかし試掘調査の結果、包含層が東遺跡と同様に約40~50cmの厚さで堆積していることが判明した。調査の結果、中央部がわずかに凹み、南地にさがっていく状態で、遺構は柱穴が約42個検出されたが削平が著しくまとまるものは少なかった。

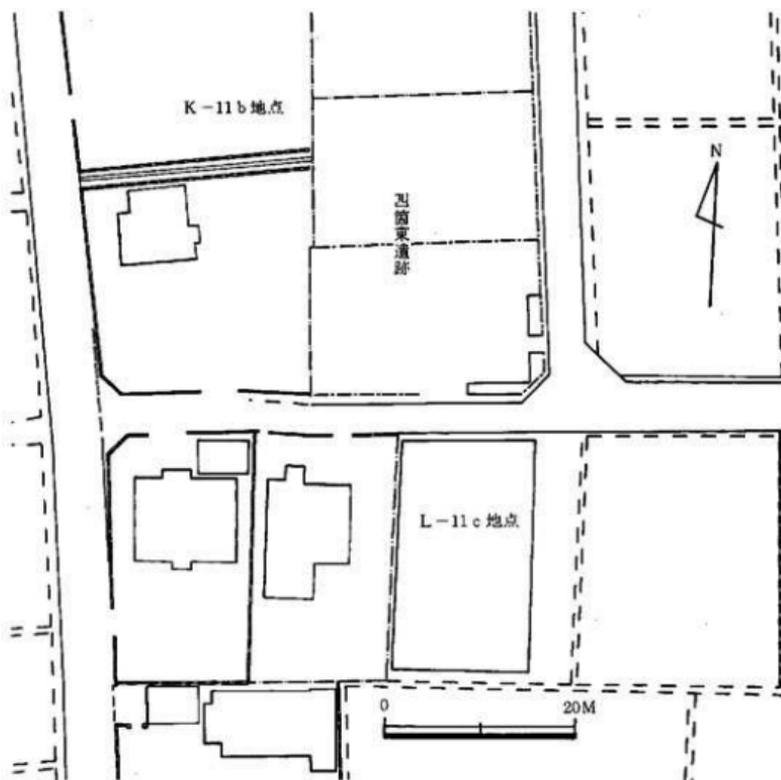


Fig. 3 L-11c地点位置図(縮尺 1/600)

## Ⅲ 調査の記録

### 1. L-11c 地点の調査 (Fig. 3. 4. 5. 6. 7)

Fig. 3 の位置図で明らかのように四箇東遺跡の道路一つはさんだ南側に位置する。四箇東遺跡の調査は、昭和53年度に行なったが、予算等の関係で整理・報告書を終了するにいたっていない。四箇東遺跡は、縄文後期後半、三万田式土器の単純包含層と遺構が検出された。出土遺物も土器・石器とも豊富で特殊遺物の土偶・十字型石器等が出土している。L-11c 地点と四箇東遺跡は同一遺跡である。L-11c 地点も同様の土器・石器が試掘調査で出土していることから中央部に入れた試掘調査トレンチを基準として2m方眼を1マスとしたグリッドを設定した。東西に1~7 (西側を1とする)、南北にa~f (北側をaとする)とした。北側セクションで包含層の厚さが約40cm程であるため10cm掘を一つの単位として遺物を取り上げることにした (Fig. 5~7)。

#### 1) 層序 (Fig. 4)

Fig. 4 に示したように北側・南側・西側の断面図を図示した。標準層序は、I層；耕作土(暗褐色土)、II層；床土(褐色土)、III層；黒色土、IV層；黒褐色粘質土(包含層)、V層；青灰色シルト層、VI層；砂礫層である。部分的に上部砂礫層・黄褐色砂層・黄褐色シルト層が認められる。全体的に東西が高く中央部が凹み、その部分に黒褐色粘質土(包含層)が堆積している。東西部分でも東側が高く遺構も東側に集中している。包含層は、南側より北側部分の方が厚く堆積している。基底は砂礫層であるがこの砂礫層も凸凹があり、部分的に青灰色のシルト層が上部に堆積している。遺構面は上部砂礫層を掘りこんでいる。

III層黒色土は、高台付の龍泉系の青磁碗や夜臼式土器、弥生中期土器が小片であるが包含されている。第IV層は三万田式土器の単純遺構で磨治縄文土器 (Fig. 18-56) や Fig. 18-71 にみられる土器片等があるだけである。

#### 2) 縄文時代以降の遺構 (付図-1, Fig. 4)

南側の1kから7kにかけて東西に1条の溝が検出した。深さ0.3m、幅0.9mを計る浅い溝である。縄文包含層を切り込んでいることと、下駄一点が出土しているところから水田の溝と考えられる。溝の切り込み面はII層からIV層上面までで、堆積土は耕作土 (I層) と同様の暗褐色土である。時期は現代に近い時期と考えられ、おそらくこの地区の圃場整備時の水田溝であろう。

6 層序

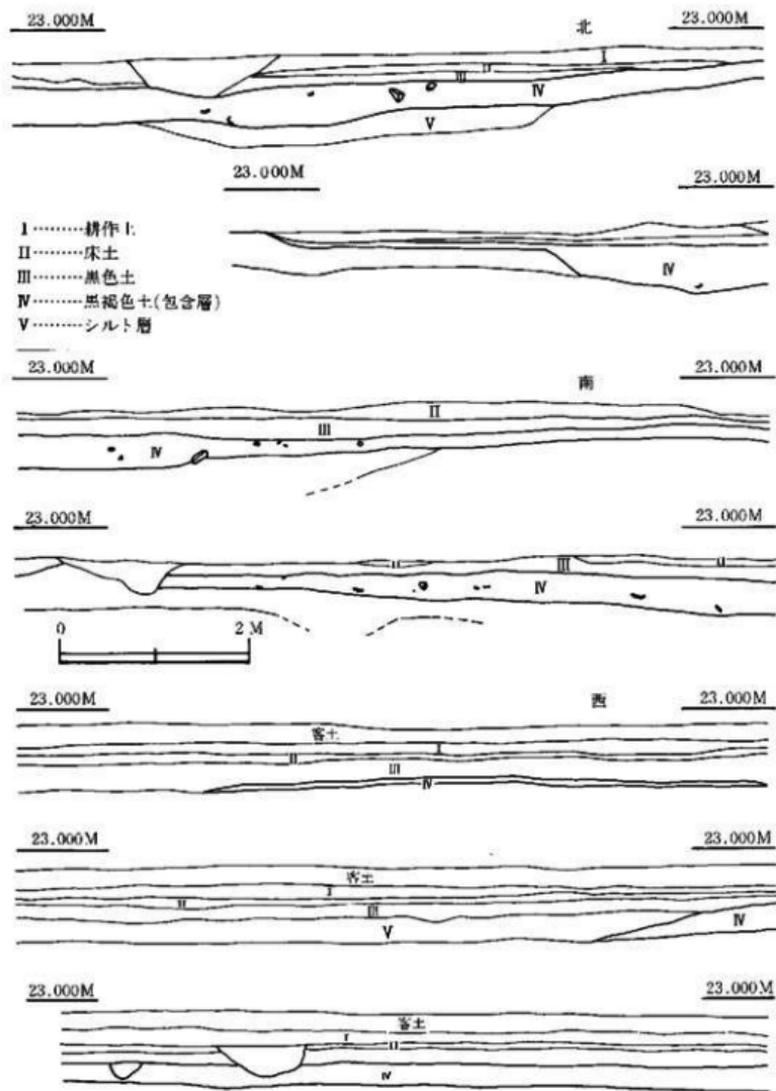


Fig. 4 I-11c 地点土層断面図 (縮尺 1/60)

## 3) 縄文時代後期

## a) 包含層について

四箇東遺跡の南側に位置するL-11c地点も同様に包含層の厚さがあるが、四箇東遺跡の南側部分で一度上がり再び下ってL-11c地点の北側で最大深面となる。四箇東、L-11c地点とも中央部が凹み東西が上がることからこの凹みを境とするならば東西に微高地がつづく。しかし本来の凹みの推積層(砂層と泥炭層、暗黒色土の互層)ではないところから第3微高地の線は従来の範囲でよいと思われる。この包含層は、南側にまだつづき、微高地も東西に認められる。しかし南側、東側、西側の微高地の範囲は不明である。

調査区の中央部がわずかに上がるが、この部分より南北の暗黒褐色土の厚い部分の方が遺物出土量は多く、またこの四箇周辺は湧水面が高く調査中一日中水を上げなければならないくらいであることから凹みの部分に土器が集中していたものと思われる。これら四箇遺跡A地点の三日月状凹地にみられる多量の土器、木器、漆器、種子等の保存状態から考えても湧水面の高いことが上げられるが、これは四箇東遺跡、L-11c地点の皿状の凹地と共通するものと考えられる。つまりこの包含層の意味を考えると湧水地点であること、凹地であること、東側面に柱穴等の遺構が認められることから、水の取口及び土器等の廃棄場所として考え、包含層というより遺構の一つとして考えておく必要があるかもしれない。つまり共同の取水場としての遺構の性格を持たせたいと思っている。

## b) 遺構 (Fig. 5・6・7, 付図-1, Tab. 1)

付図-1, Fig. 5~7に見るごとく遺構は北西・東側微高地に集中している。上部砂礫層及び黄褐色シルト層を掘り込んでいる所から区域外の東側部分に主たる遺構が検出するものと思われる。今回検出したピットの大きさはさまざまで、最大径のものはPit-21の1.7m×1.0mで、柱穴とは考えられない。柱穴と思われるものもあるが、組み合って住居址等の意味をもつものはない。これは北西側で検出したピットも同様である。しかしながら調査区域外の部分とのつながりで何らかの意味をもつピットになる可能性は大きい。ただ、四箇東遺跡、四箇遺跡A地点、四箇周辺遺跡J-10I地点、J-10E地点の調査でも明らかな様に削平が著しいと考えなければならず、その意味からしても柱穴だけの住居址の検出となるであろう。

Fig. 5~7の遺物出土状態は、10cm掘りで主な遺物を取り上げた出土状態である。遺物の出土状態でも浅い凹地部分に遺物が集中していることが明らかである。しかしながら土器の出土状態、石皿の出土状態(PL. 4~5)で見ると凹地の裾部に位置する遺物は移動することなくそのままの状態で破棄されたものと思われる。なお土器の接合資料等は、四箇東遺跡との接合も考えなければならぬので今回はFig. 番号で示すことにとどめた。

Tab. 1 Pit 計測一覧表

Pit 号	形状	大きさ m			出土遺物	備考	時期
		縦 × 横 × 深さ × 径					
1	楕円形	0.5 × 0.3 × 0.17				■層からの切りこみ	時期不明
2	円形	0.22 × 0.38					◇
3	◇	0.11 × 0.38				■層からの切りこみ	◇
4	円形	0.12 × 0.5					縄文後期
5	◇	0.09 × 0.26					◇
6	◇	0.19 × 0.42					◇
7	楕円形	0.3 × 0.21 × 0.13					◇
8	不整円形	0.44 × 0.4 × 0.08					◇
9	◇				精製口縁部片3点 粗製胴部片11点	非常に浅い	◇
10	円形	0.08 × 0.24					◇
11	◇	0.07 × 0.21					◇
12	不整長方形	0.4 × 0.26 × 0.12			精製胴部片1点, 粗製底部1点, 粗製胴部片10点		◇
13	不整円形	0.61 × 0.52 × 0.05			精製口縁5点(丹塗り? 1点含む) 粗製口縁1点, 粗製胴部20点, 半精製片		◇
14	◇	0.41 × 0.36 × 0.09			半精製口縁1点, 粗製4点		◇
15	長方形	0.8 × 0.66 × 0.22					◇
16	円形	0.16 × 0.2					◇
17	不整方形	0.26 × 0.32 × 0.06					◇
18	不整長方形	1.51 × 1.18 × 0.2					◇
19	不整円形	0.3 × 0.26 × 0.06					◇
20	不整円形	0.35 × 0.32 × 0.12					◇
21	不整形	1.7 × 1.0 × 0.1					◇
22	楕円形	0.4 × 0.3 × 0.12					◇
23	不整長方形	0.4 × 0.3 × 0.06			精製2点, 粗製口縁部1点, 粗製底部1点, 粗製胴部片5点		◇
24	不整円形	0.29 × 0.2 × 0.07			精製2点		◇
25	不整円形	0.6 × 0.66 × 0.19					◇
26	不整長方形	0.4 × 0.5 × 0.17					◇
27	不整方形	0.4 × 0.36 × 0.12					◇
28	不整円形	0.4 × 0.36 × 0.13					◇
29	楕円形	0.5 × 0.34 × 0.16					◇
30	◇	0.3 × 0.12 + a × 0.23					◇
31	不整形	1.34 × 1.2 × 0.21			精製口縁1点 粗製2点		◇
32	◇	0.98 × 0.5 + a × 0.17					◇
33	◇	0.58 × 0.68 × 0.17					◇
34	楕円形	0.26 × 0.34 × 0.08					◇
35	◇	1.14 × 0.6 + a × 0.24					◇
36	不整円形	0.08 × 0.2					◇
37	不整長方形	0.56 × 0.36 × 0.11			粗製口縁部片2点 半精製底部1点, 粗製胴部片1点, 半精製胴部2点		◇
38	不整円形	0.05 × 0.29					◇
39	不整楕円形	0.34 × 0.24 × 0.08			粗製胴部片7点		◇
40	不整円形	0.07 × 0.32			半精製胴部1点		◇
41	円形	0.13 × 0.26			粗製胴部片5点, 黒曜石片		◇
42	不整長方形	0.3 × 0.2 × 0.07					◇

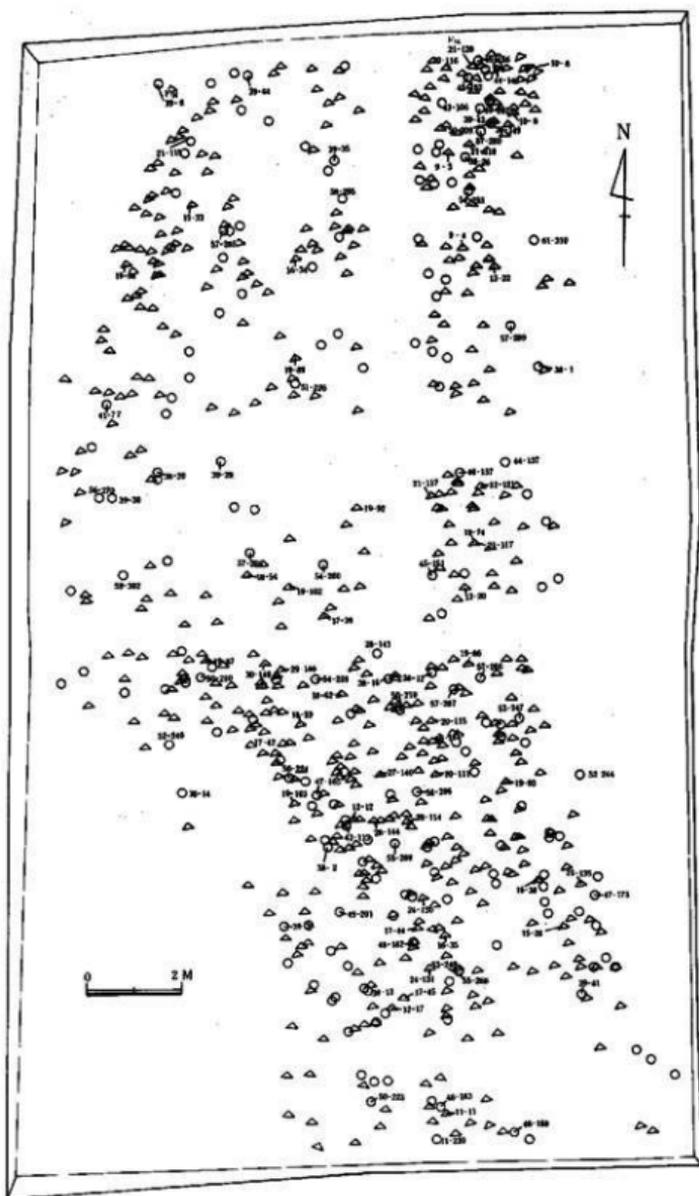


Fig. 5 縄文後期遺物出土状態 (縮尺 1/120)

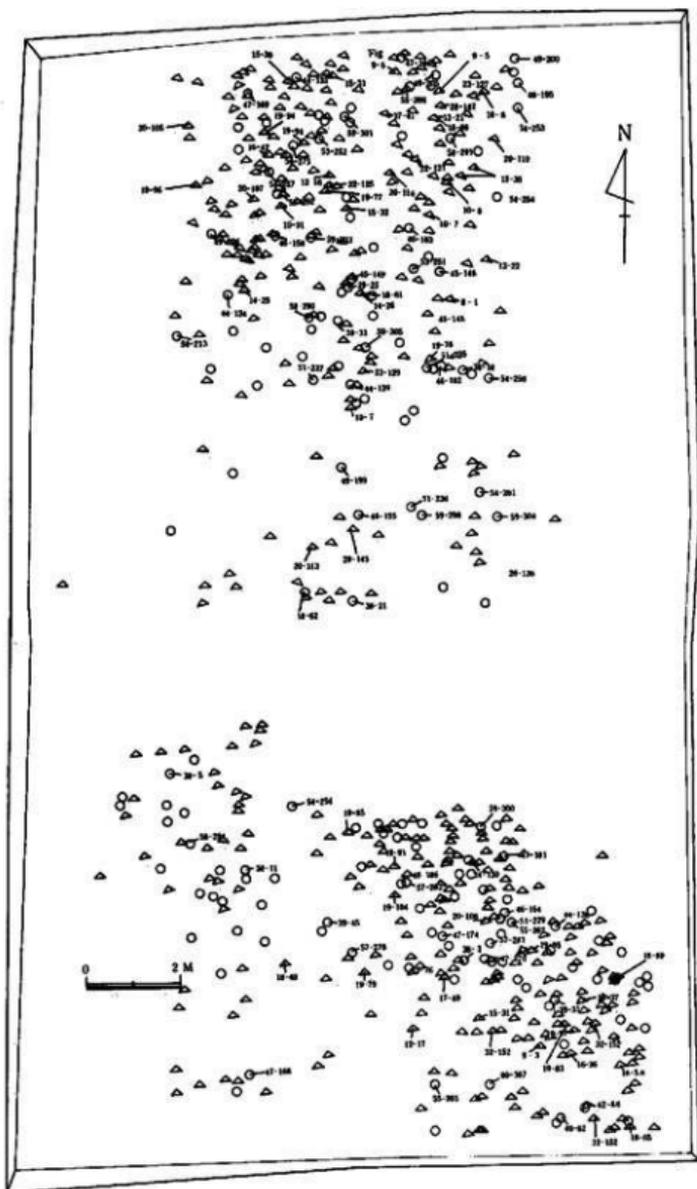


Fig. 6 縄文後期遺物出土状態 (縮尺 1/120)

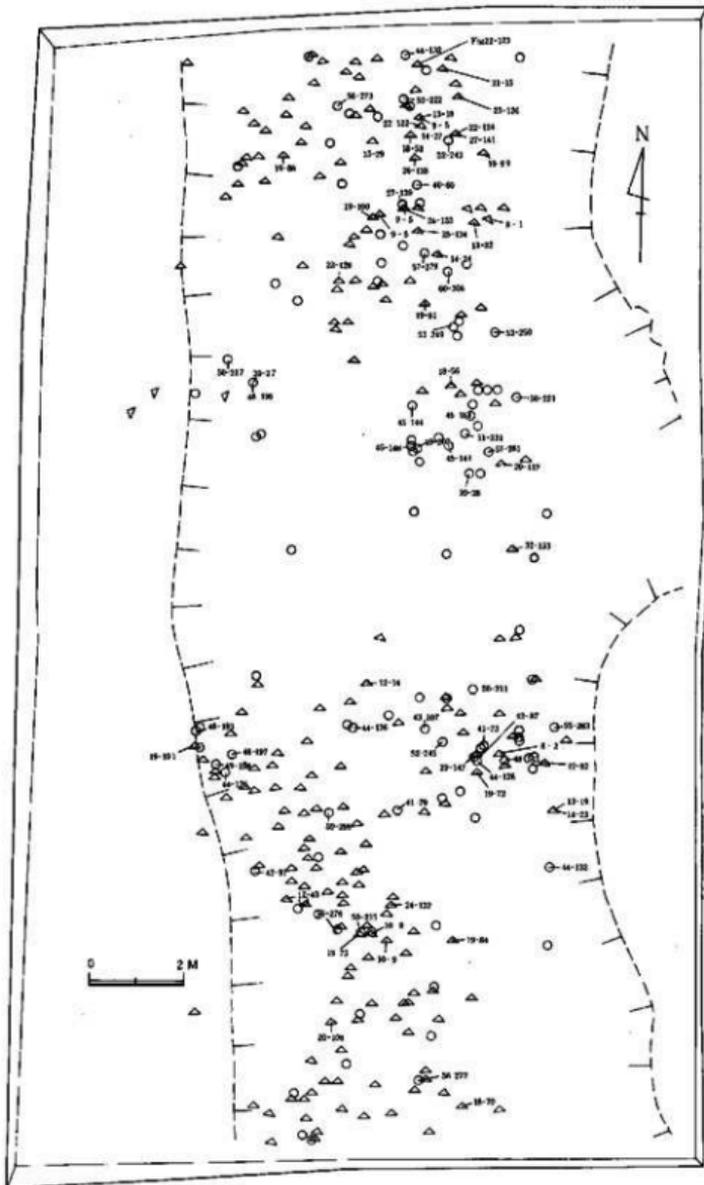


Fig. 7 縄文後期遺物出土状態 (縮尺 1/120)

## 2. 出土遺物

出土遺物はそのほとんどが包含層から出土したものである。Pit 内からも多少出土しているが図示できるものはなかった。包含層からは、約12,000点の土器と石器2,000点が出土した。土器も精製土器、半精製土器、粗製土器、土製品、土偶が出土しているが、割合からみると粗製土器が多い。石器も多量に出土しているが主体は黒曜石である。また特殊遺物も出土している。勾玉、十字型石器、全磨製石器等である。石斧は打製石斧より磨製石斧の割合が多くこれは四箇東遺跡でも同様である。出土遺物全体でも四箇東遺跡と同様である。特に全磨製石器に関してL-11c地点で3点、四箇東遺跡1点、千里シビナ遺跡で2点、対島シタル貝塚の計7点、4遺跡が報告されている。この意味でも資料紹介を兼ねて後期後半三万田式土器を上する遺跡を注目する必要がある。

### 1) 土器

土器は精製土器・粗製土器・高坏形土器・土偶・土製品等が出土した。粗製土器7に対して精製土器3の割合である。しかし粗製土器も2つに大別できる。一応半精製土器（精製土器のように研磨されておらず、粗製土器のように条痕等が残らず、器面をナデだけで仕上げているものである。これを半精製土器とし、粗製土器と区別した。ただしこの名称は便宜上使用しているにすぎず、この土器自体検討を要する土器である。）と粗製土器に区別した。

三万田式土器の概年、型式分類等それぞれ問題点の多い所であるが、ここでは宮内克己氏の型式分類を基準として行なっていくたい。宮内氏は、古文化談叢第8集「三万田式土器の研究」の中で、精製土器の文様・器形等により三万田式土器を3つに大別した。この中で四箇遺跡A地点、四箇東遺跡、四箇周辺遺跡J-10i地点を取り上げ論証している。特に四箇東遺跡の土器群は三万田Ⅲ式が主流を占め、Ⅱ式もわずかながら認められるとしている。今回調査を行なったL-11c地点と四箇東遺跡とは同一遺跡であることから、宮内氏の分類を基準とした。

#### 精製土器

精製土器は、鉢形土器、高坏形土器がある、鉢形土器は、浅鉢形土器と鉢形土器に大別される。今回の調査で三万田Ⅱ式とⅢ式の精製土器が出土している。Ⅱ式はFig. 8～10で波状文と回線文、沈線文、\*字文を主たる文様とする一群、Ⅲ式はFig. 11～17にみられる回線文、沈線文、楕円凹点文、扇状貝匠文を施す一群である。Ⅱ式では鉢形土器を1類、浅鉢形土器を3類に区別した。Ⅲ式では鉢形を4類に、浅鉢形土器を8類に細分した。

高坏形土器には、脚部が2点、坏部が3点出土した。脚台付底部も8個体出土している。

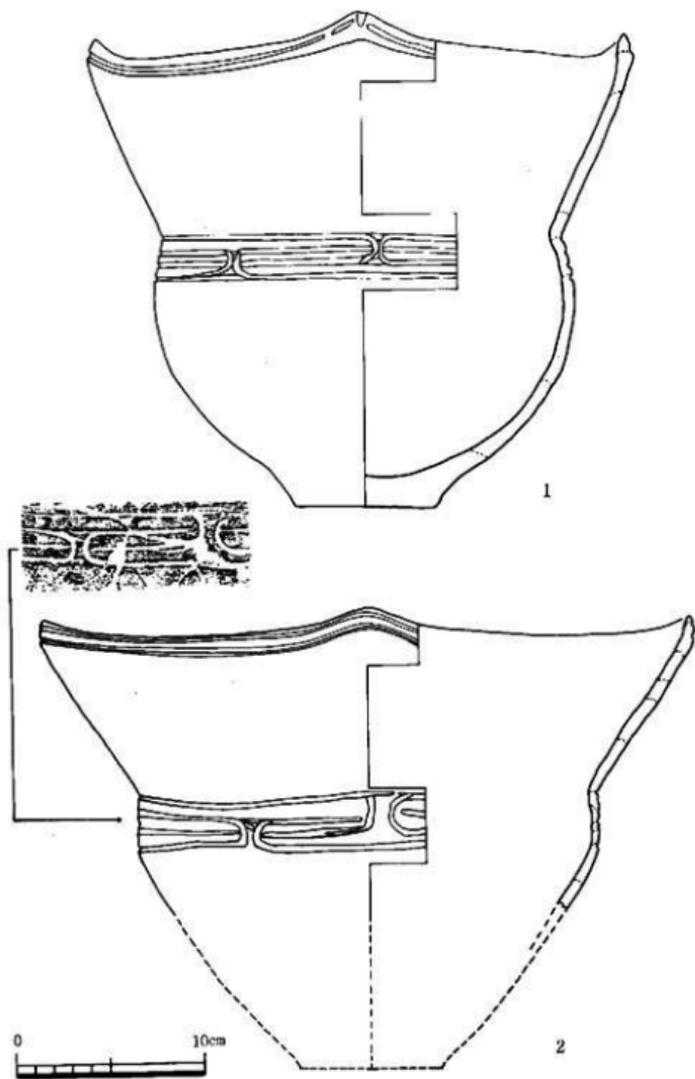


Fig. 8 精製土器実測図一1 (縮尺 1/3)

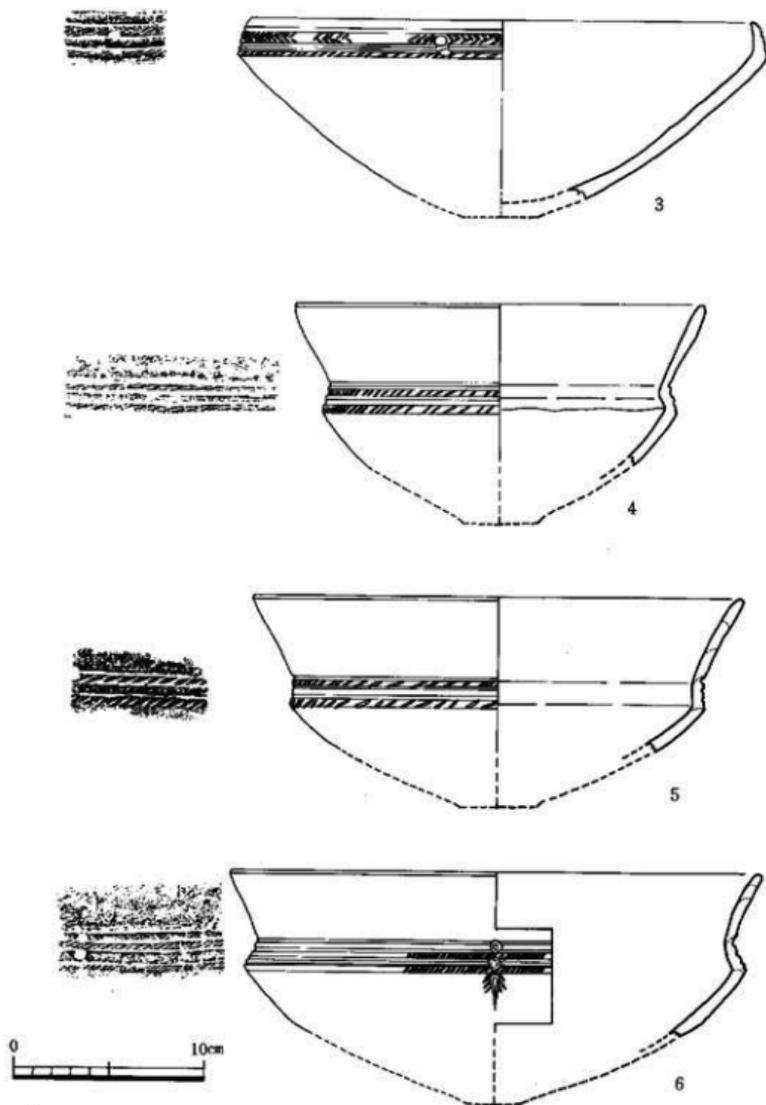
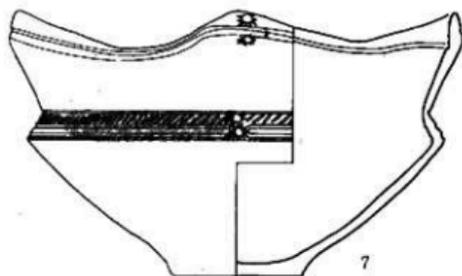
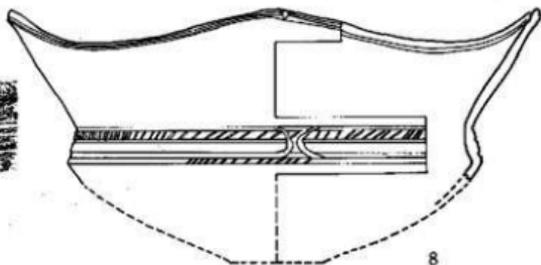


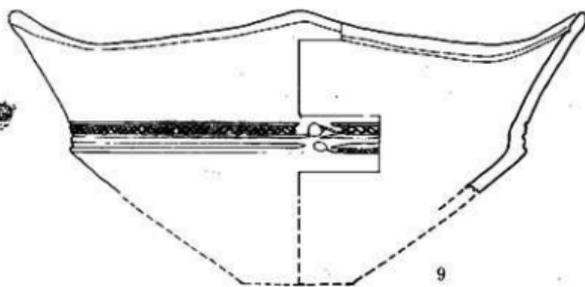
Fig. 9 精製土器実測図—2 (縮尺 1/3)



7



8



9



Fig. 10 精製土器実測図—3 (縮尺 1/3)

## 三万田Ⅱ式 鉢形土器 I類 (Fig. 8-1. 2)

1. 2を三万田Ⅱ式鉢形土器I類とした。口縁部が波状を呈し、1~2条の凹縁文を配し、波頂部に「U」字形の刻目を入れるもの1と刻目を入れないもの2がある。胴部には沈線による2つの×字文を配し流水文の文様を形作る。器形は、最大径が口縁部にあり、断面はゆるやかにく字状に折れ曲がり平底の底部へとつづく。

## 浅鉢形土器 (Fig. 9. 10)

浅鉢形土器は3つに分類した。I類を3, II類を4~6, III類を7~9とした。

## I類 (Fig. 9-3)

平縁で口縁部が内寄し、最大径が頸部にある。口縁部に2条の沈線を入れ、その間と下方に羽状文を施す。中央部に2つの楕円形凹点文を施す。

## II類 (Fig. 9-4~6)

平縁の口縁部で3本~4本の沈線を入れその上下2段に羽状文を施す4・5と、中央部に楕円形凹点2つと長楕円状の凹部1つを設けその周辺部に羽状文を施す6がある。断面は口縁がわずかに外反しながら頸部でしまり、胴部がくの字に屈曲して底部へとつづく形態をとる。

## III類 (Fig. 10-7~9)

波状口縁を基本とする。断面は口縁部がわずかに外反するもの8. 9と口唇部でわずかに内寄する7がある。7の文様形態は口縁部に1条の凹縁を入れ、波頂部に2つの円形凹点を設け周辺に羽状文を入れる。内面にも1条の沈線を施す。胴部には3条の横長沈線を配し中央部に2つの円形凹点を呈す。沈線と凹点部が×字形を呈する。沈線間に羽状文を配する。8の文様形態は口縁部の表裏に各1条の沈線を入れている。波頂部にU字形の刻目を入れる。胴部には3条の横長沈線を入れ、これが中央部で×字形を形作る。沈線内に羽状文を配する。9の文様は胴部に3条の沈線を入れ、中央部に楕円形凹点2個を配する。沈線内に×字の羽状文を入れる。この部分にだけ丹塗りを施している。

## 三万田Ⅲ式 鉢形土器

鉢形土器は4つに分類できる。

## I類 (Fig. 12-10~12, 17)

I類は10~12である。平縁の口縁部を呈し、胴部からわずかに内寄しながら口縁部近くで外反して段を持ち口縁部はわずかに外反するがほぼ直立する。口縁部に1~2条の凹縁文を配し中央部付近で楕円形凹点文を配する。胴部にも沈線、凹縁文を配する。12は3条の沈線と楕円形凹点を施す。17は山形口縁を呈するものでその他の特長は10~12と同様である。

## II類 (Fig. 12-13)

胴部からわずかに外反しながら頸部で一度ふくらみそのまま直立しながら平縁の口縁部とつ

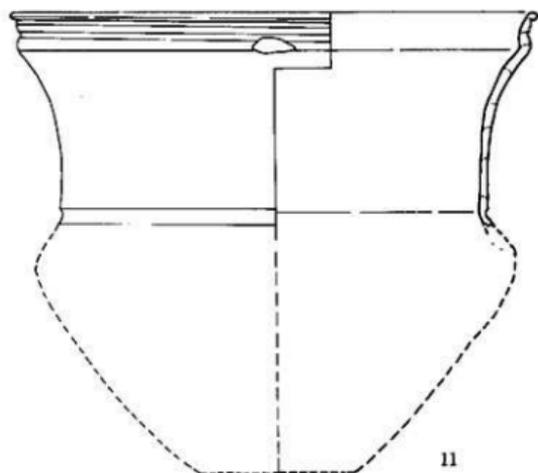
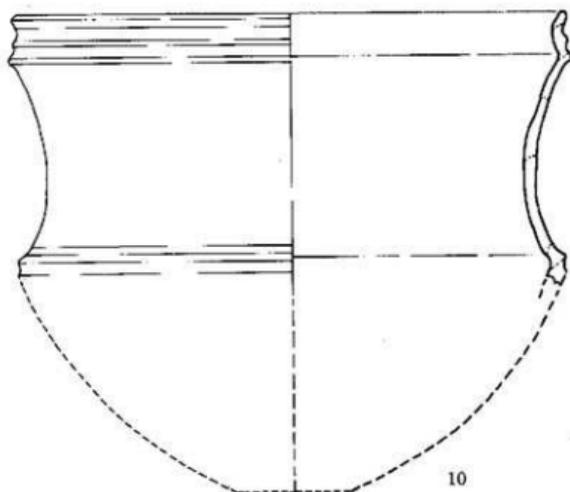


Fig. 11 精製土器実測図-4 (縮尺 1/3)

16 出土遺物

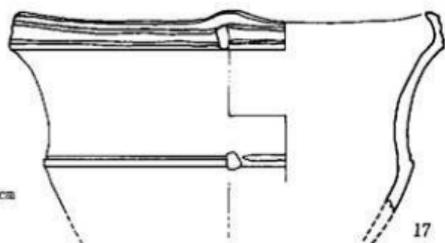
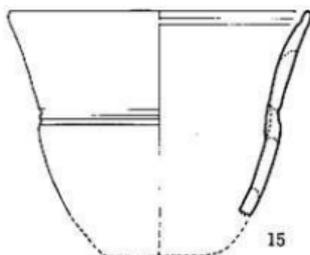
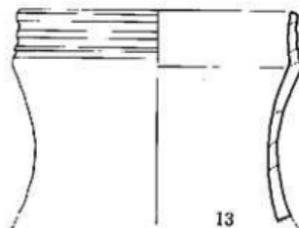
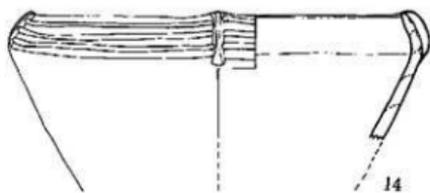
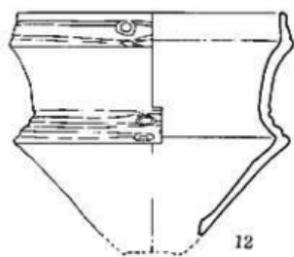


Fig. 12 精製土器実測圖—5 (縮尺 1/3)

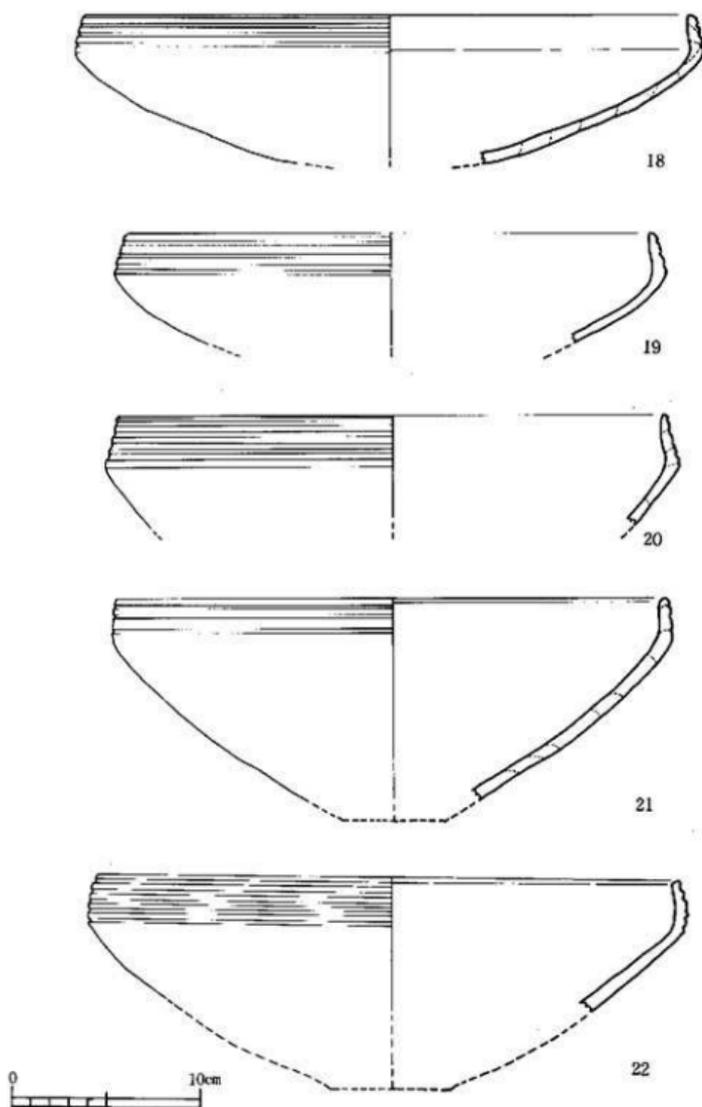


Fig. 13 精製土器実測図-6 (縮尺 1/3)

づく。口縁部に3条の凹線文を入れる形態である。

#### Ⅲ類 (Fig. 12-15, 16)

Ⅲ類は15, 16である。胴部に2条の凹線文を施す。この部分からわずかに外反しながら平縁の口縁部へとつづく。内面に1条の沈線を配する。

#### Ⅳ類 (Fig. 12-14)

口縁部が内傾する。三万田Ⅱ式にみられる「ノ」字状の貼付文と同様に四方に「I」字状の貼付文を配し、3条の横長沈線を巡らしている。この形式からするとむしろⅡ式の浅鉢形土器（四箇遺跡A地点より出土したものに類似している）と考えられる形式である。

三万田Ⅲ式浅鉢形土器、浅鉢形土器は器形・文様形態により8種類に分類した。

#### I類 (Fig. 13-18~22, Fig. 14-23~26)

平縁の口縁部が内湾するか、ほぼ直立し、頸部からややふくらみを持ちながら直線的に底部へとつづく。文様も沈線文が口縁部に2~5本入る形態を主体とする。Fig. 14-23はその中でも特異の中央部に凹点文2個を配し、沈線文を中央部分で×字状に配する。内面には沈線を配さない。底部は平底と上底の2種類ある。

#### Ⅱ類 (Fig. 14-27, Fig. 15-28~30)

器形的にはI類と同様であるが、文様を配さない無文土器をⅡ類とした。最大径は頸部にあり、口縁部は内湾するものが主である。

#### Ⅲ類 (Fig. 15-31~33)

Ⅲ類の特長は頸部に段を有し、口縁部は端部が丸みをもちこの部分だけが外反する平縁口縁である。文様は横長沈線、凹線文を口縁から頸部までに配している。31は中央部に楕円形凹点文を施す。

#### Ⅳ類 (Fig. 16-34~38)

胴部に2~3条の横長沈線や楕円形凹点文を施すので、ここで一度くびれ、頸部から外反しながら口縁部へとつづく。平縁口縁で口唇部は丸みを持ち、内面に1条の沈線を施す。

#### V類 (Fig. 17-40~42)

横長沈線が胴部と口縁部に施されているため、胴部と頸部に段を持つ。底部から直線的に延びた器形は、胴部に段を有し、そりがみに頸部に達し、再度外反しながら口縁部とつづく。口縁部は平縁で端部は丸みを持つ。胴部に2条の沈線と楕円形凹点文を配する。

#### Ⅵ類 (Fig. 17-39)

波状口縁を呈し、胴部に2条の沈線文を施す。内面にも1条の沈線文を口縁部に施す。沈線文の部分に丹塗りを施す。底部から丸みを持ちながら胴部に達し、ここでやや開きぎみにわずかに外反しながら口縁部に達する。口唇部は丸みを持つ。

## Ⅵ類 (Fig. 17-43, 44)

Ⅲ類の範中に入れるべきものかもしれないが、Ⅲ類は頸部で段を持ち、口縁部が外反しながらも直立に近い状態であるがⅥ類は頸部での段がなく一直線に口縁部まで達する形状を示すところから一応区別しておく。口縁部に2～3条の沈線文を配し、平縁口縁で口唇部が丸みを持つ。

## Ⅶ類 (Fig. 17-45)

平縁の口縁部で、頸部から直立するが、口唇部で急激に外反する。胴部中央に2個の凹点文を配し、段違いに沈線文を1条施す。形態的には碗状を呈する器形であろう。宮内氏の形態分類には認められないものである。

宮内氏の三万田式土器の型式設定と今回試案で形式分類を行なったものとを比較してみる。

今回の分類で三万田式土器と設定した型式は宮内氏の形式分類と同じである。ただ宮内氏の型式設定に今回の型式設定を同一にしておく必要がある。

今回出土した土器で三万田Ⅰ式に分類できるものはFig. 18-56の浅鉢形土器1点である。三万田Ⅱ式の鉢形土器は、宮内氏の型式分類、鉢Aが、鉢形Ⅰ類であろう。浅鉢形土器ではⅠ類からⅢ類に分類したが宮内氏の分類ではⅠ類が浅鉢A<sub>1</sub>、Ⅱ類が浅鉢B、Ⅲ類が浅鉢C類となる。三万田Ⅲ式の鉢形土器では宮内氏の分類はない。浅鉢土器ではⅠ類、Ⅱ類が浅鉢A<sub>1</sub>、Ⅲ類が浅鉢A<sub>2</sub>、Ⅳ類が浅鉢B、Ⅴ類が浅鉢Eにあたる。Ⅵ類が浅鉢Cにあたるかもしれない。Ⅶ類は浅鉢A<sub>2</sub>に類似するが、口縁部が直立せず外反する。楕円形凹点文がなく沈線のみ施す。Ⅷ類は宮内氏の分類にはないもので、口縁端部が大きく外反し稜を作る碗状の形態を呈する。これは高環形土器の環部の可能性が高く小さな脚合が付く形状を示すものかもしれない。

注1 宮内克己「三万田式の研究」古文化談叢 8, 1981.

## 参考文献

- 坂本経典他「三万田東原調査概報」西水町教育委員会 1972  
 柳田純孝・渡辺和子「四箇門辺遺跡調査報告書2」福岡市教育委員会 1978  
 二宮忠司・渡辺和子「四箇門辺遺跡調査報告書4」福岡市教育委員会 1981

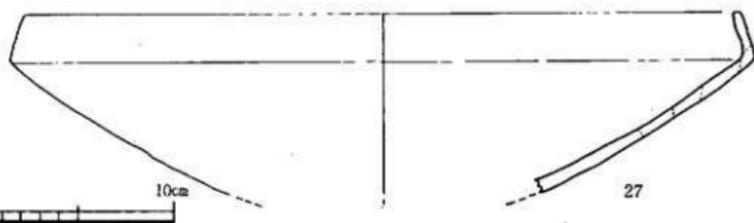
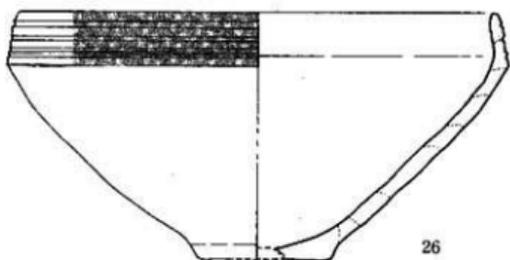
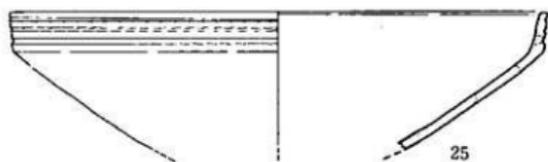
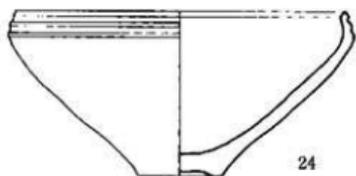
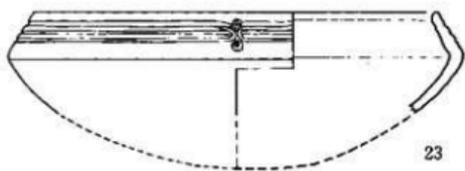


Fig. 14 精製土器実測図-7 (縮尺 1/3)

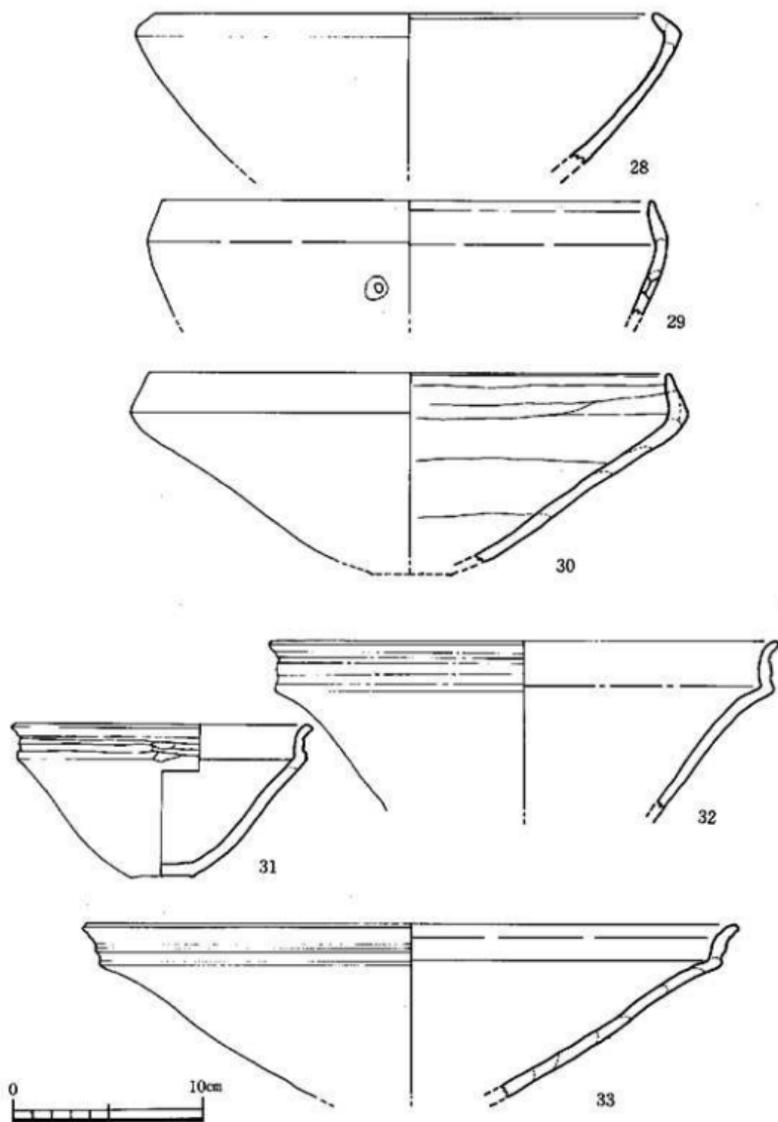


Fig. 15 精製土器実測図一八 (縮尺 1/3)

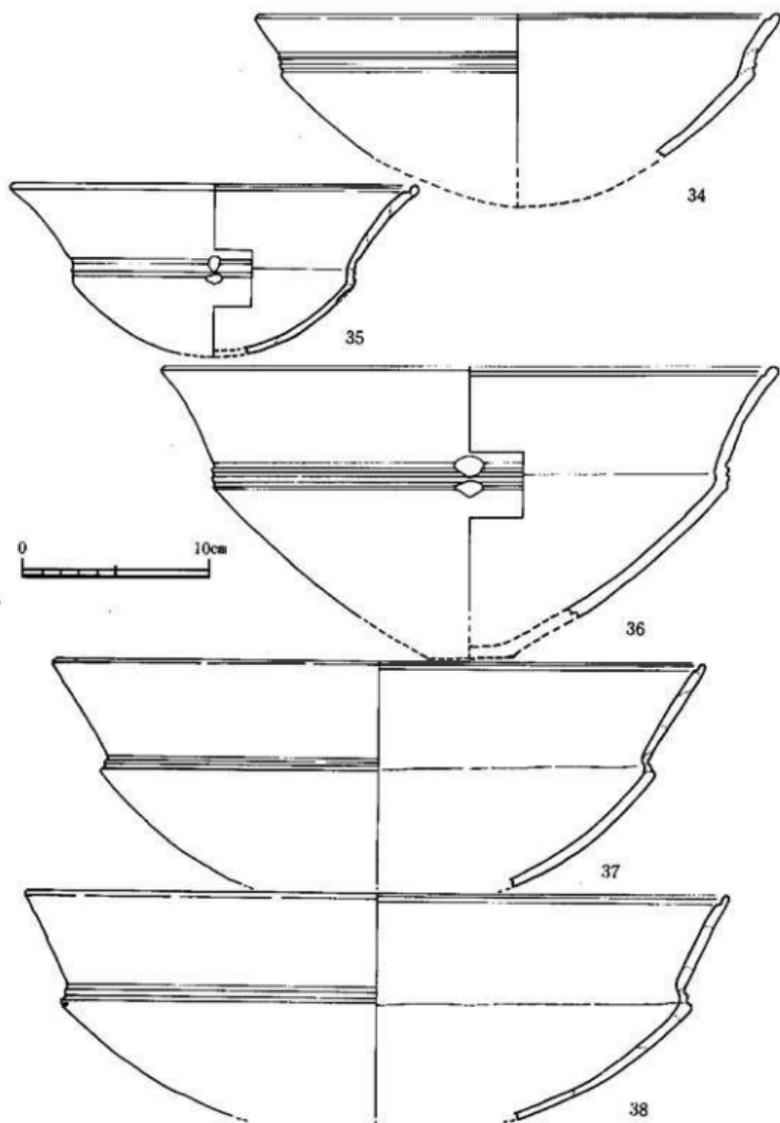


Fig. 16 精製土器実測図—9 (縮尺 1/3)

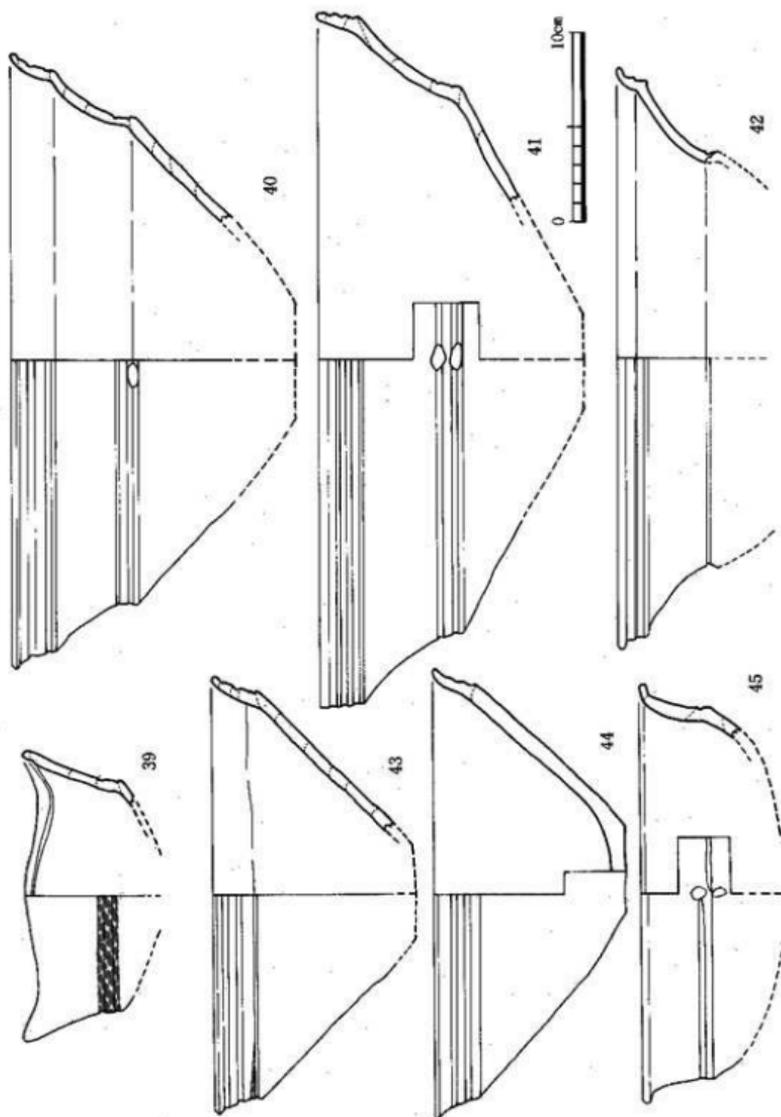


Fig. 17 精製土器実測図一10 (縮尺 1/3)

## 精製土器 (Fig. 18)

精製土器の中で文様のある土器を図示した。特に71の特殊な文様は三万田式土器には認められないものである。56の磨消縄文土器は1点だけで他は三万田Ⅱ式の土器である。

Fig. 18—47は浅鉢形土器Ⅱ類である。中央部に4つの凹点文を配し、横長沈線を4条巡らすが、凹点文の所で上下2本が接する。この上部の沈線間と頸部上端に細い羽状文を配す凹点文、右側には右下がりの羽状文、左側には左下がりの羽状文を配す平縁の口縁である。48は47と同様の浅鉢Ⅱ類である。口縁と頸部間に2本の沈線を配する。中央部に引く横長沈線を境にして上下に羽状文を配する。49は浅鉢Ⅰ類である。中央部に3つの凹点文を配する。これを中心として4条の沈線を巡らすが第1沈線と第4沈線とを接合させ、第2、第3沈線を接合させる文様形態で、凹点文は4ヶ所に配置される形式であろう。50は浅鉢Ⅱ類と思われる。頸部に3条の沈線を巡らし、沈線間に円形状凹点文を配す。下方の沈線間に羽状文の「x」文様を配す。口縁内面にも1条の沈線を施す。51と55は波状口縁を呈する浅鉢Ⅲ類の型式に類似する。波状にそって沈線1条を巡らす。下方に2条の沈線を配し、その間に「x」の羽状文を施す。その後上方沈線から下方沈線に向って2条の沈線を施し、その間に羽状文を配する。文様形態としては新しい型式かもしれない。52は浅鉢Ⅱ類に属し、口頸部に3本の沈線を巡らせ第1間と肩部に細い羽状文を呈す。53は浅鉢Ⅰ類に属し、口頸部に3本の沈線を巡らす。52と同様に第1間と第3沈線から肩の部分に左下がりの羽状文を呈す。わずかに丹塗りの痕跡が認められる。54は浅鉢Ⅱ類か鉢Ⅲ類の口縁部である。口縁部と頸部間に4条の沈線を巡らせ、第1間と第4線と肩部間に右下がりの羽状文を施す。55は53と同様にⅠ類に属し沈線、羽状文も同様の形状を示す。56は浅鉢Ⅰ類に属する。この一点だけ磨消縄文で三万田Ⅰ式に分類できる。三条の沈線を巡らせ第1間に目のつまった縄目文様を残す。この部分に丹塗りの痕跡が認められる。包含層最下層の黄褐色シルト層にはりついた状態で出土した。57は浅鉢Ⅱ類に属する。口縁端部の内外面に各々1条の沈線を巡らせ、断面くの字に屈曲する頸部に3条の沈線を配する。第1間と第3線下に左下がりの羽状文を施す。58は鉢形Ⅲ類に属する形態を示す。頸部と胴部の境に2本の沈線を配し、第2線を中心にして上が右下がり下がが左下がりの羽状文を配す。平縁口縁を呈す。65も同一形態をとる。59は鉢形Ⅱ類に属する。口縁部と頸部、胴部間に4条の沈線が巡る。口縁部間の3条の沈線間には、第1間に左下がりと右下がりの羽状文を入れ「>」型の文様を形成する。第3線下には右下がりの羽状文を施し、胴部では左下がりの羽状文を施す。口縁は平縁口縁である。60は波状口縁を呈する鉢形Ⅰ類であろう。波頂部に楕円形凹点文とこれより下方につづく沈線文を施し、波頂部を出発点として波状口縁にそって2条の沈線を巡らす。その間に左下がりの羽状文を配する。内面にも2条の沈線を巡らせ第2線下に凹点文を施す。61は鉢形土器に属する胴部破片である。上下2条ずつの沈線間に2個の凹点文

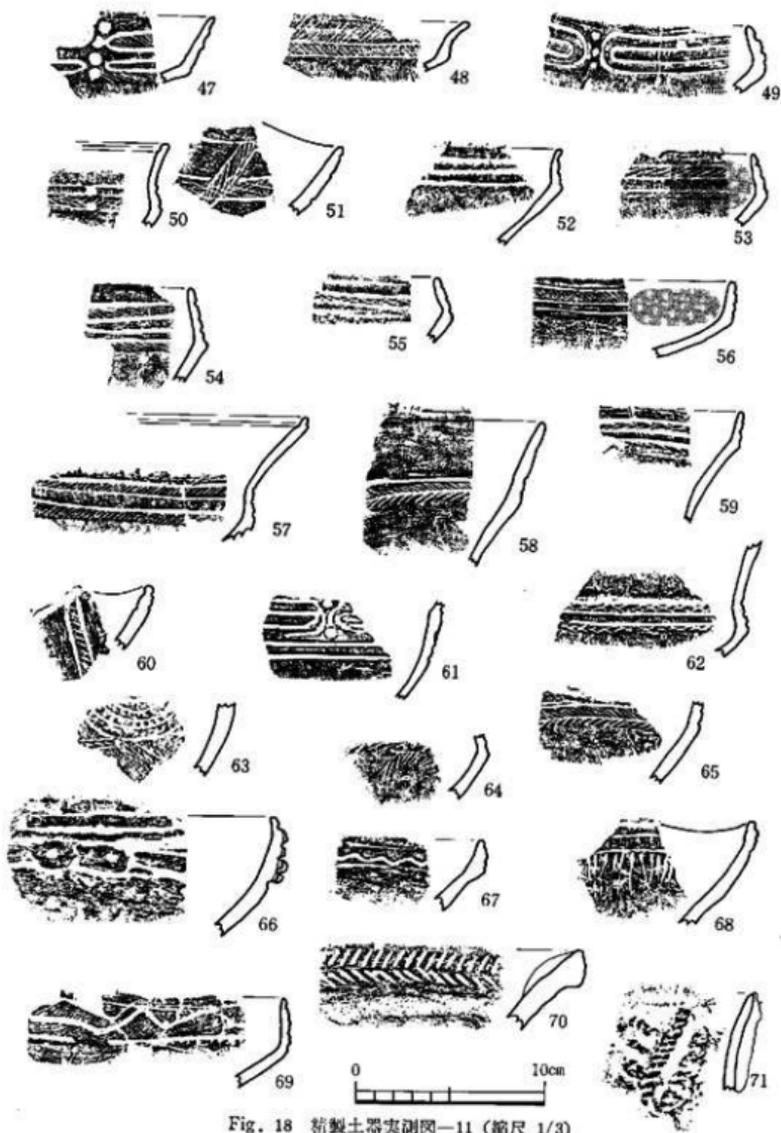


Fig. 18 粘製土器実測図—11 (縮尺 1/3)

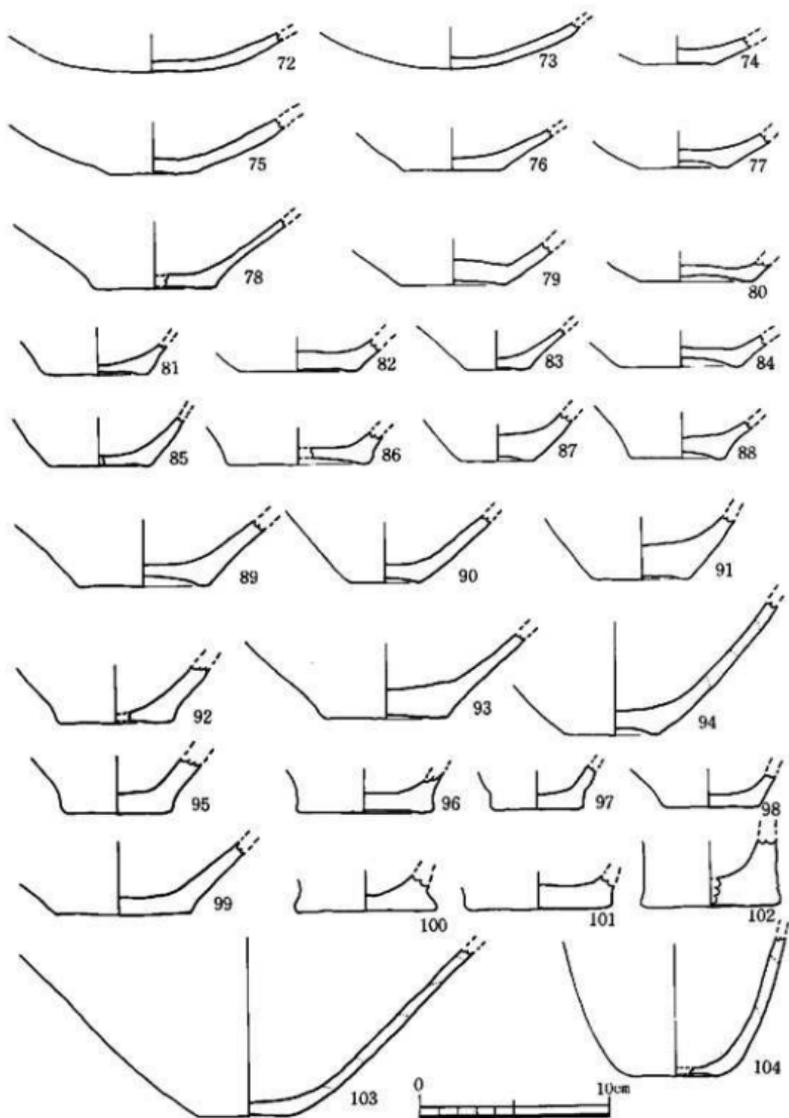


Fig. 19 精製土器尖頭圖-12 (縮尺 1/3)

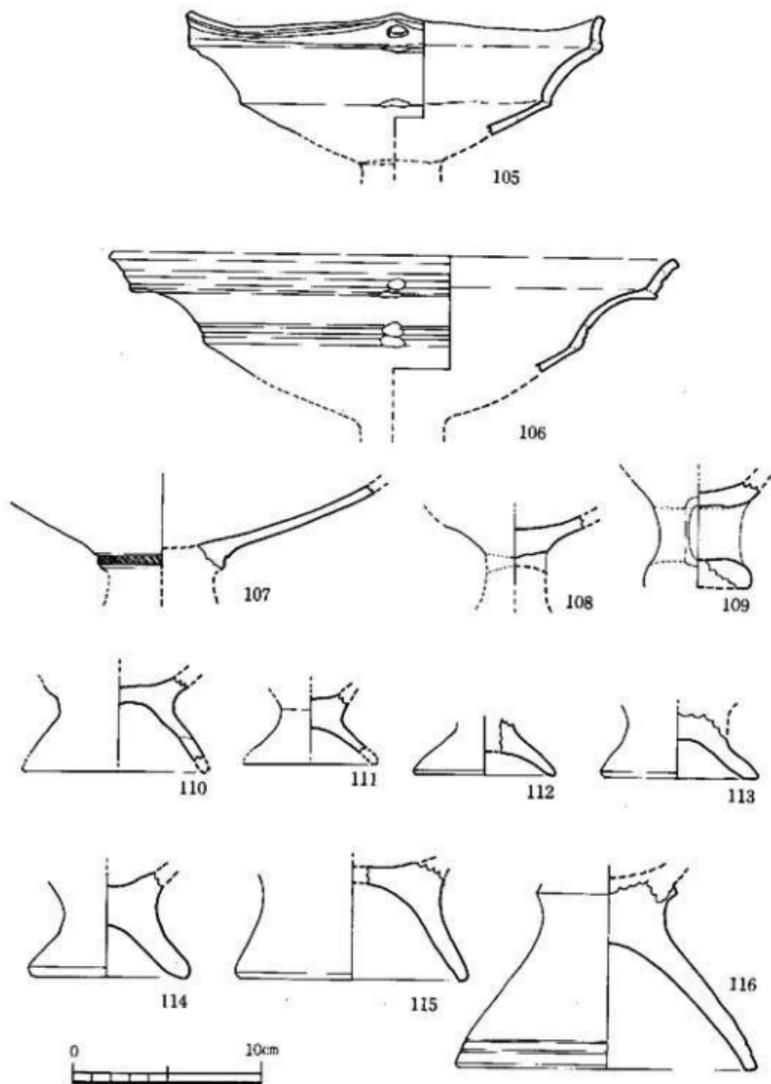


Fig. 20 高坏形土器・脚台付土器実測図 (縮尺 1/3)

を配する。これを中心にして4条の沈線、第1沈線と第4沈線、第2・3沈線を結ぶ対称形の形をとる。62は浅鉢Ⅱ類の胴部である。胴部最大径間と頸部に3条の沈線を巡らせ、第1間と第3線下に左右下がりの「x」字状に羽状文を施す。63は浅鉢形土器の胴部に施文している。4条の沈線を円形に巡らせその間に凹点を連続的に施文し、これに接するように下方に2条の沈線を巡らす。この間に羽状文を配する。64・65は58と同様に鉢形土器に施文される文様である。66は浅鉢のⅠ類であろう。4条の横長沈線を巡らし、2ヶ所に粘土を円形に貼付け中央部に凹点文を1個づつ配する。67は鉢形Ⅲ類の口縁部である。2条の沈線間に波状沈線を1条入れる。68は波状口縁を呈する浅鉢Ⅲ類である。口縁端から3条の横長沈線を施し、第3沈線から縦に沈線をならべる。69は平縁口縁を呈する浅鉢Ⅰ類である。口縁端部と頸部に2条の沈線を巡らす。その間に波状に近い沈線を施すが上の沈線に接続する。上下沈線は接合してx字を形成し下方の沈線は途中で切れる。沈線文間に羽状文を施す。70は鉢形土器の口縁部である。口縁部に「く」の字状の羽状文を配す、内面に楕円貼付文があり、細かな凹点文を施す。71は鉢形土器口縁部に縦横に隆帯をつけ刻目を入れる。内面は条痕を施す。最下層の青灰色シルト層から出土。

#### 高坏形土器 (Fig. 20-105~109)

高坏形土器は、5点出土した。105, 106は坏部, 107, 108は胴部から脚部, 109は脚部である。全貌を知ることできないが2~3種の形態が考えられる。105は浅鉢形土器Ⅳ類に脚部を接合したものである。脚部は欠損しているがおそらく中央部に楕円形の孔を持つ109の脚部に近いものであろう。口縁部は直立し四方が山形に隆起する形態である。口縁部の直立から頸部は内弯きみにしまり胴部最大径で屈曲する。口縁部に2本の凹線文を配し、山形に隆起する所で両方に開く。その部分に上下2個の楕円形凹点文を配する。胴部にも1個の楕円形凹点を配している。106は、形態的には105と同様であるが、口縁が平縁となり、口縁部と胴部最大径に2本の凹線文と2個の楕円形凹点文を配する。107は、口縁部、脚部が欠損しているが、胴部から底部と接合する脚部上端部に2本の凹線文の間に羽状文を施す。108も107と同様に脚部上端部から底部にかけて現存する。脚部上端に楕円形の孔を穿す。109は底部をわずかに残した脚部である。中央部に長い楕円形のスカシを持つ。全体的にいいいな研磨・ナデを施す。

#### 脚台付底部 (Fig. 20-110~116, Fig. 36-200)

110から115までは基本的には同一であろう。底部に脚部を取りつけたものである。ただこの底部がどの鉢形土器に接合するかは不明である。精製土器(111~114, 116, 200)と粗製土器(110, 115)があるので浅鉢・鉢形土器両方にあるものと思われる。110~115までの脚部は文様がない。しかし116は脚部下端に2条の沈線を呈す。沈線の後にも研磨を行なっているため沈線が部分的に消えている。200は底部と脚部との接点に2条の沈線をめぐらす。

### 半精製土器

普通精製土器と粗製土器とに大別するが、分類していく上で精製土器ともつかず粗製土器ともつかないナデ調整による一群がある。従来粗製土器の範中でとらえてきたが、その器形、形態、手法に粗製土器との違いが認められ、むしろ精製土器の研磨手法の前段階に認められるナデ調整と考えられる。これらの一群が多量に出土している所から一応半精製土器とした。しかしながら半精製土器とはいかにも未製品の印象を与える。精製土器、粗製土器自体その形態のみをもって安易に命名されたものであろうし、半精製土器という名称も安易に付けられた名称である。しかしながら別の名称も現在の所持ち合わせていない。今回まで安易に半精製土器という名称を使用する。

半精製土器は、そのほとんどが無文である。形態も浅鉢・鉢・深鉢とあるがそのほとんどが鉢、深鉢を基本とする。胎土も精製土器ほど精製されず、粗製土器ほど他の不純物を混ぜることはない。色調は、暗黒褐色及び黒褐色を呈する。焼成は精製土器ほどではないが一応良好である。Fig. 21～Fig. 25までの19点を図示した。他にも浅鉢形土器等の形態も認められる。

浅鉢形土器 (Fig. 21—117～120) 4つに分類できる。

I類 (117) 上底の底部から胴部まで直線的に延び一度内弯する部分で肩を持つ。断面が、くの字状を呈し外反しながら口縁部に達する。口唇部は丸みを持つ。内外面とも丁寧なナデ調整を行なっている。

II類 (118) I類より胴部の張りがなく、底部から胴部に向かって丸みを持ちながら立上がり、胴部から外反しながら口縁部に達する。口唇部は丸みを持つ。

III類 (119) 胴部がII類より張りをなくす。底部から外反しながら立上がり、口縁部でさらに外反する。口唇部は丸みを持つ。全体にナデ調整を施す。

IV類 (120) 碗形を呈する器形である。平底及び上底から丸みを持ちながら胴部へとつき胴部から内弯しながら口縁部に達するが、口唇部では一段と内弯し丸みを持つ。最大径は頸部にある。内外ともナデ調整を施す。浅鉢形土器の口縁部は波状口縁と平縁口縁がある。

### 鉢形土器

鉢形土器には小型の鉢形土器と大型の深鉢形土器に区別できるが、形態・器形等からすると大きさの相違だけである。ここでは器形、形態等によって区分しているのが鉢形、深鉢形土器の区別は行なわない。鉢形土器は4つに分類できる。

I類 (Fig. 22—121, 124)

平底・上底の底部より直線的に延び口縁部でわずかに外反する。口唇部は丸みを持つ。器面調整は内外面ともにナデ調整を施す。胴部がまったく張らないのが特長であり、典型的な鉢形を呈する。

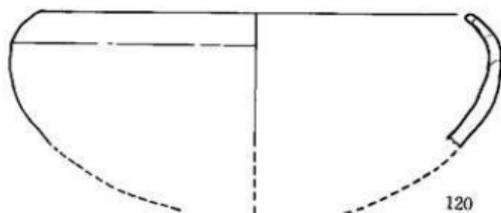
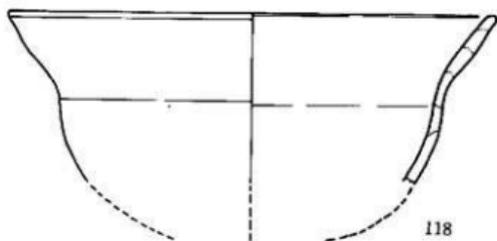
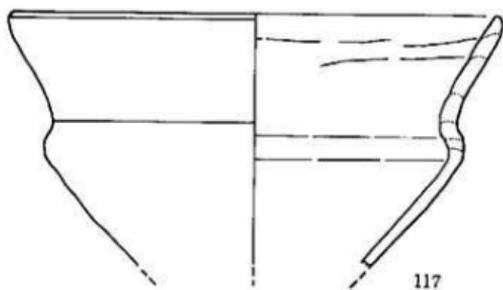


Fig. 21 半精製浅鉢尖測岡 (縮尺 1/3)

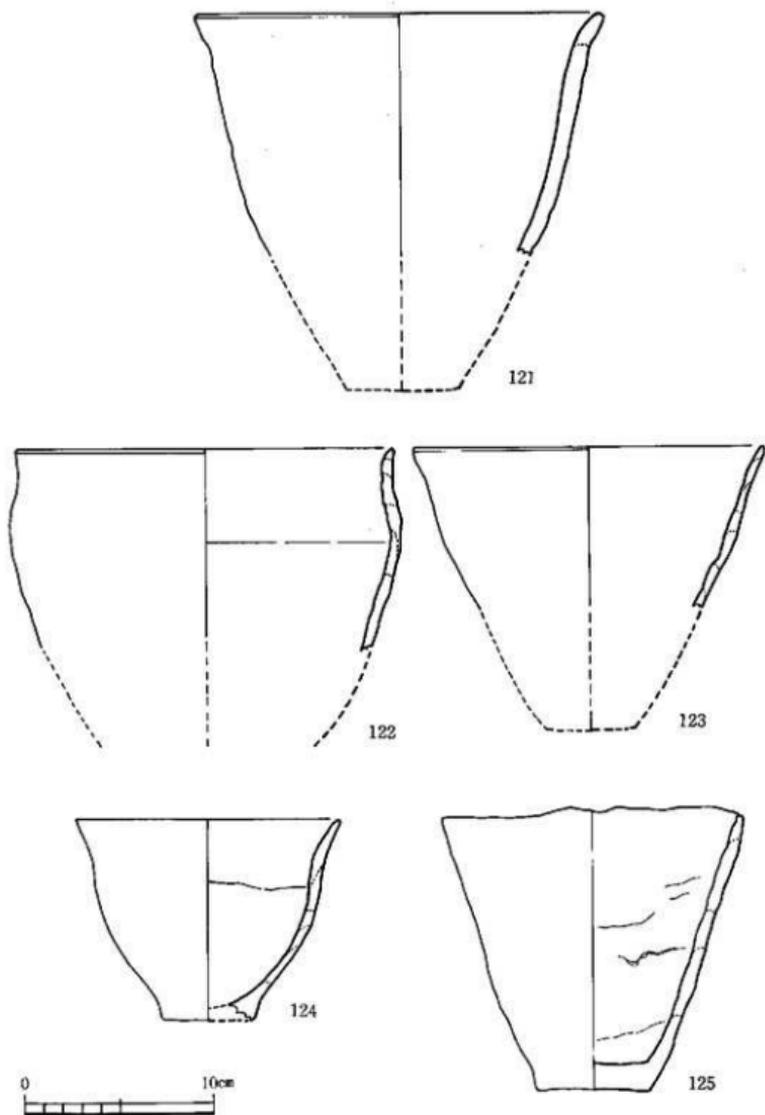


Fig. 22 半精製鉢形土器実測図一1 (縮尺 1/3)

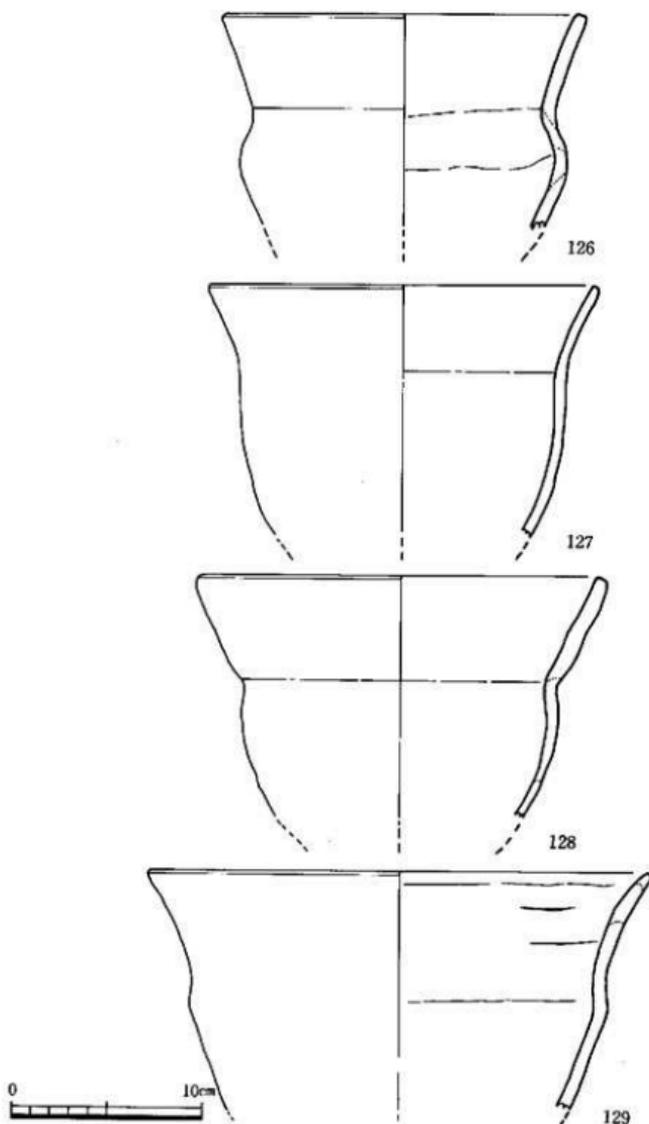


Fig. 23 半精製鉢形土器実測図-2 (縮尺 1/3)

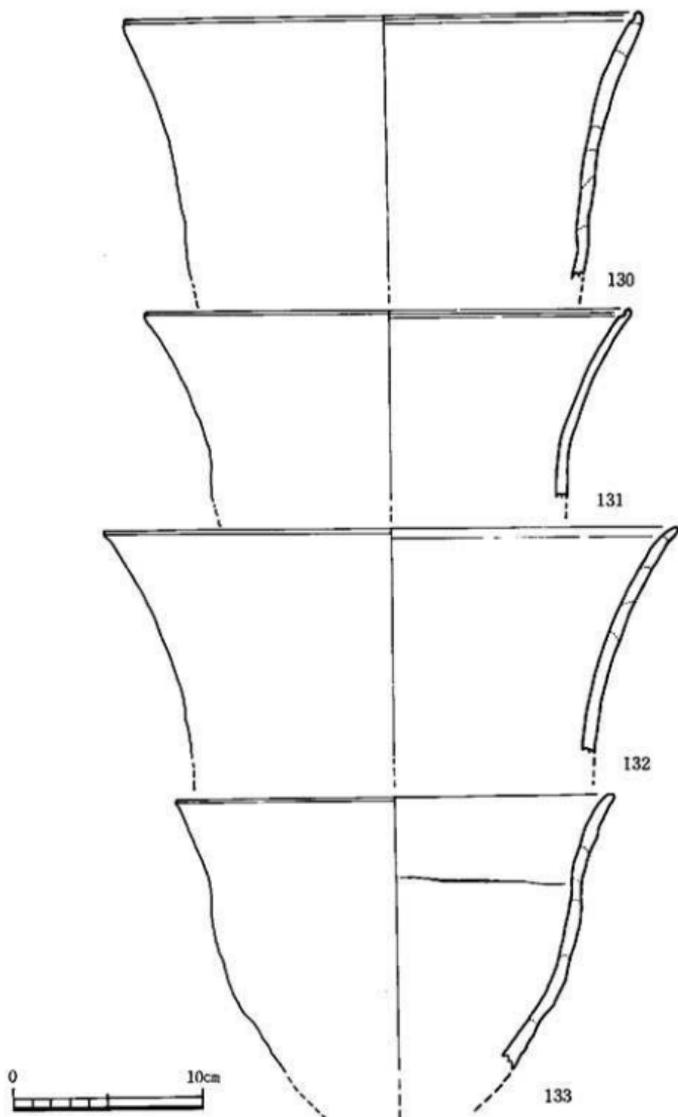


Fig. 24 半精製鉢形土器実測図一3 (縮尺 1/3)

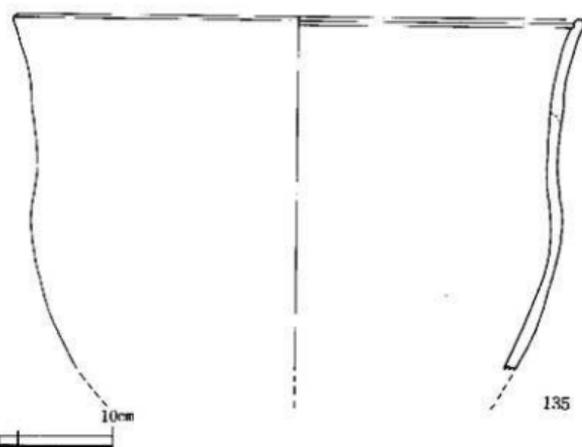
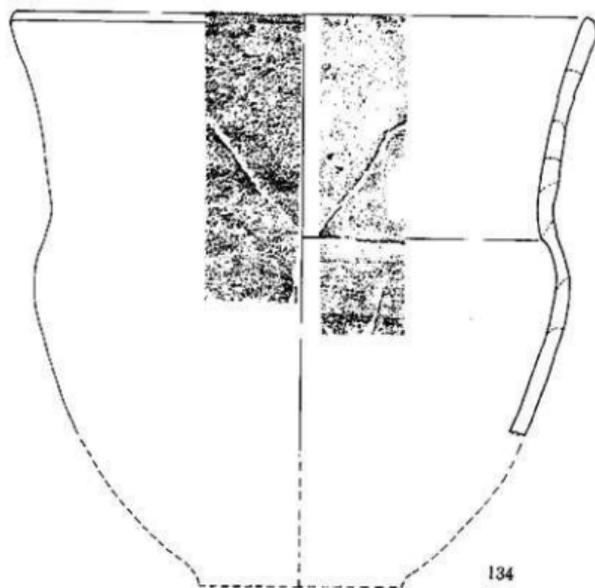


Fig. 25 半楕製鉢形土器実測図-4 (縮尺 1/3)

## Ⅱ類 (Fig. 22—123, 125, Fig. 130—132)

I類とはほぼ同様であるが、底部から直線的に伸び、そのまま口縁部に達する。口縁は平縁が主であるが125の様にわずかに波打つものもある。また口縁部内面に沈線を入れる(130, 131)もある。

## Ⅲ類 (Fig. 22—122)

平底・上底の底部から丸みを持ちながら胴部に達し、この部分から内湾ぎみに直立して口縁部に達し、口唇部でわずかに外反する。最大径は胴部上位にある。器面調整はナデによる。

## Ⅳ類 (Fig. 23—126—129, Fig. 24—133, Fig. 24—134, 135)

鉢形土器の中でこのⅣ類が主体を占める。基本的には平底、上底の底部からやや丸みを持って胴部に達し、次に頸部で一度しまり口縁部に向けて外反していく。器面調整は内外面とも丁寧なナデ仕上げである。頸部のしまり具合により胴部器形が異なるが、頸部から外反して口縁部を形成している点かに区別できる。口縁部は平縁口縁である。

## 粗製土器 (Fig. 26—32)

器形、断面により鉢形土器を2つに分類した。文様形態でも分類する必要があるが紙面の都合上割愛した。浅鉢形土器も多少含まれているが図示できるものはない。土器全体の7割が粗製土器である。その中で約8割が鉢形土器である。また Fig. 27—139のように2個の穿孔を配する土器も少数ではあるが出土している。

## 鉢形土器 (鉢形土器Ⅰ類)

平底・上底の底部から胴部までゆるやかな丸みを持ち、頸部で一度しまり口縁部に向けて外反しながら口唇部に達する。口縁部の開きの強弱によって2種に分類できる。また大小によって鉢形土器、深鉢形土器の区別も可能である。Ⅰa類を鉢形土器、Ⅰb類を深鉢形土器とするⅠa類は Fig. 26—136, 137, Fig. 27—141の3点、Ⅰb類は Fig. 28—142, 144, Fig. 29—145—147, Fig. 32—153がある。

## 鉢形土器Ⅱ類

平底の底部から直線的にはほぼ直行しながら口縁部に達する。口唇端部は丸みをもつものとそうでないものがある。Ⅱ類も鉢形土器をⅡa類、深鉢形土器をⅡb類とする。Ⅱa類は Fig. 26—138, Fig. 27—139, 140で、Ⅱb類は Fig. 28—143, Fig. 30—148, 149, Fig. 31—150, 151, Fig. 32—152である。出土量からⅠ類よりⅡ類の方がやや多い。

文様形態から各土器を見ると、2枚貝条痕、ナデ、ケズリ、小巻貝条痕等により器形の内外面を形作っている。

Fig. 26—136は外面に小巻貝条痕を下方斜めより上方に向けて施文している。口縁端部はナデで面取りする。内面はナデした後、2枚貝条痕を施す。方向は右下方斜めから左上方へ施文す

る。137の外面施文は、一部の板状調整具とナデを加える。内面は横方向のナデを施す。端部はナデにより丸く仕上げている。138の外面は光いナデ仕上げ。内面は鉤状調整具による底部方向からのケズリを施す。口縁端部はナデにより面取りする。Fig. 27—139の外面はユビケズリを底部から口縁部に向けて行なうが、口縁部付近では横位の方向をとる。内面はユビケズリとナデを横方向から施す。口縁端部はナデによる面取り。140の外面は小巻貝条痕を底部から口縁部に向けて施文する。内面は横ナデである。口縁端部は刻目を加えた形跡が残っている。141は内外ともナデ仕上げであるが、内面に一部ユビケズリの後が残っている。Fig. 28—142の外面は横方向による荒いナデを加えている。下方にススが附着している。内面は丁寧な横ナデを加えている。143の外面は小巻貝条痕を底部付近は下方から上方へ、胴部は斜めに下方から上方へ、口縁部は横方向に施文している。内面はナデ仕上げ、口縁端部は丸みの面取りを施す。144は内外面ともナデ仕上げであるが、外面はユビケズリの後ナデを加えている。Fig. 29—145は外面に2枚貝条痕を施文する。胴部中位から下方、胴部から頸部にかけて下方から上方へ斜め方向に施文した後横方向に1回施文する。口縁部は横方向からの施文である。口縁端部はナデにより面取りしている。内面は丁寧なナデ仕上げである。146の外面は斜方向に施文するが、下方から上方に向けて行なっている。口縁部は横位方向の施文を加えている。内面はユビケズリの後、横ナデを加えている。147の外面は横方向にやや丁寧なユビケズリで整形している。内面はナデ仕上げである。口縁端部はナデによる面取りを施す。Fig. 30—148の外面は丁寧なユビケズリの後斜方向に2枚貝条痕を下方から上方に向けて施文する。口縁部付近は横方向から施文している。内面はユビケズリの後丁寧なナデ仕上げ。口縁端部はナデにより面取りする。149の外面は板状調整具により横位方向、斜方向から施文する。口縁部付近は横位方向からの施文である。口縁端部はナデにより面取りされる。内面は2枚貝条痕を行なった後にナデで消し仕上げる。Fig. 31—150の内外面は板状調整具により器面整形を行なっている。外面は右下方から左上方、横方向、左下方から右上方の3種類の方向性を持って施文する。内面はナデの後横方向からの器面整形である。口縁端部は丸く面取りされている。Fig. 32—152の外面はユビケズリにより器面整形している。横方向からの後斜右下方より左上方へユビケズリを加えるが、一ヶ所だけ横方向を底部付近から口縁部まで施している。これは目的意識かデザインを考えてかは不明であるが、人間の意志によって作り出されたものである。内面はヘラケズリの後にナデを加えているが、胴部中央だけナデが荒くヘラケズリがはっきりと認められる。外面底部では底部稜線にそって下方から上方へユビケズリが認められる。口縁端部の内面はナデであるが、外面はケズリのままで放置されている。153の内外面とも小巻貝条痕で器面調整されている。外面の施文方向は横位が基本である。胴部下位では左下方から右上方への斜めに加える方向もある。全面に条痕を加えた後、2～3条の縦方向の条痕を入れる。内面は横方向

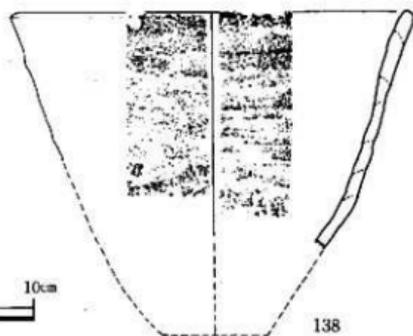
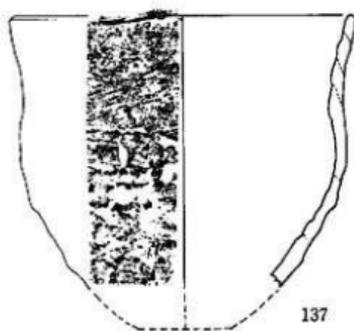
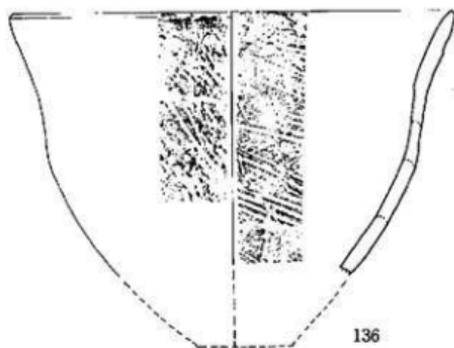


Fig. 26 粗製土器実測図一 (縮尺 1/3)

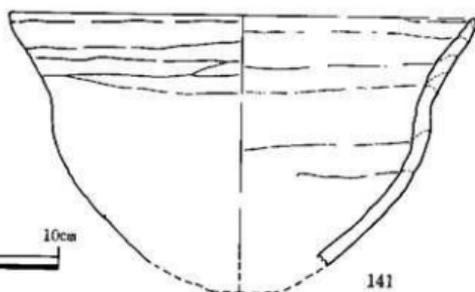
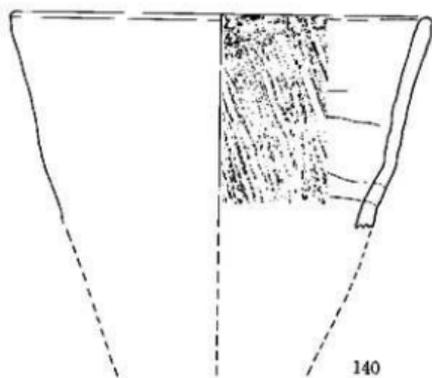
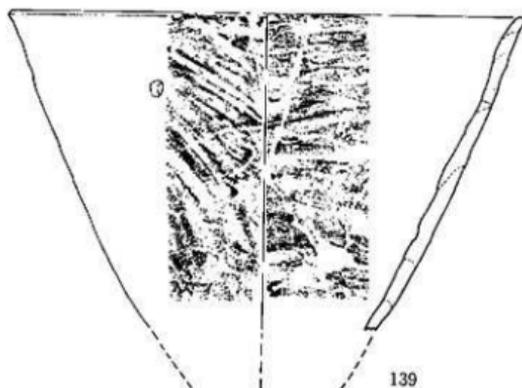


Fig. 27 粗製土器実測圖—2 (縮尺 1/3)

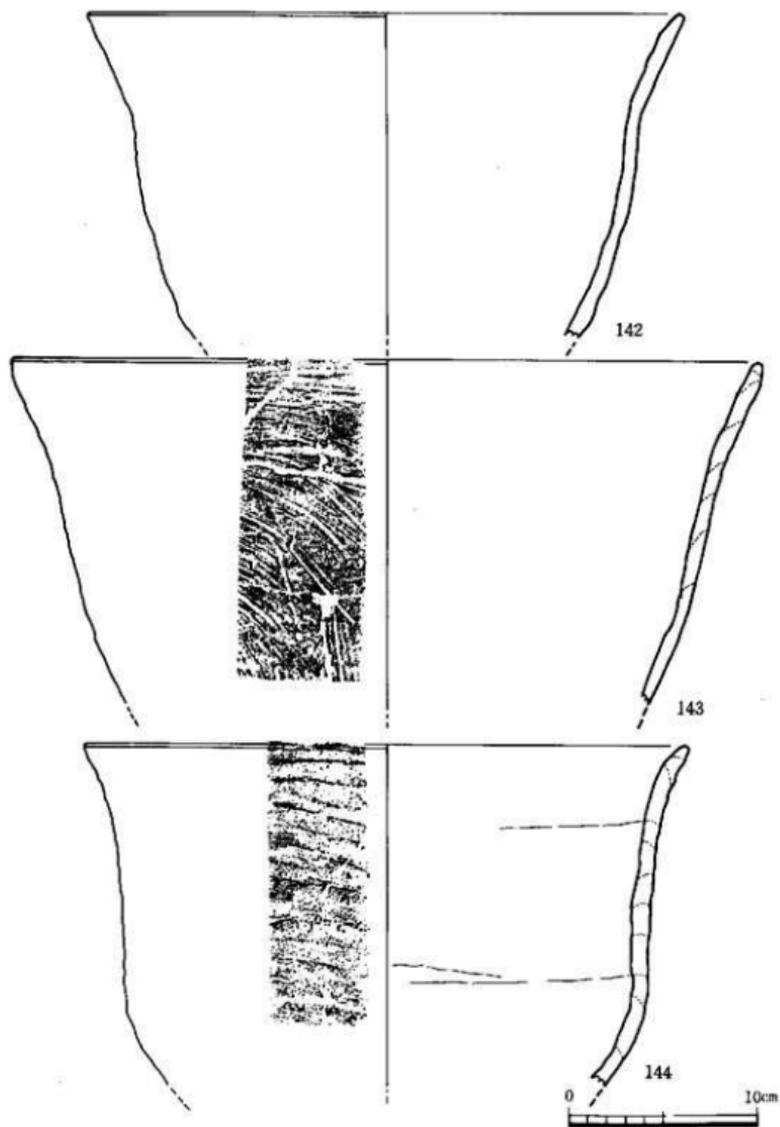


Fig. 28 粗製土器実測図—3 (縮尺 1/3)

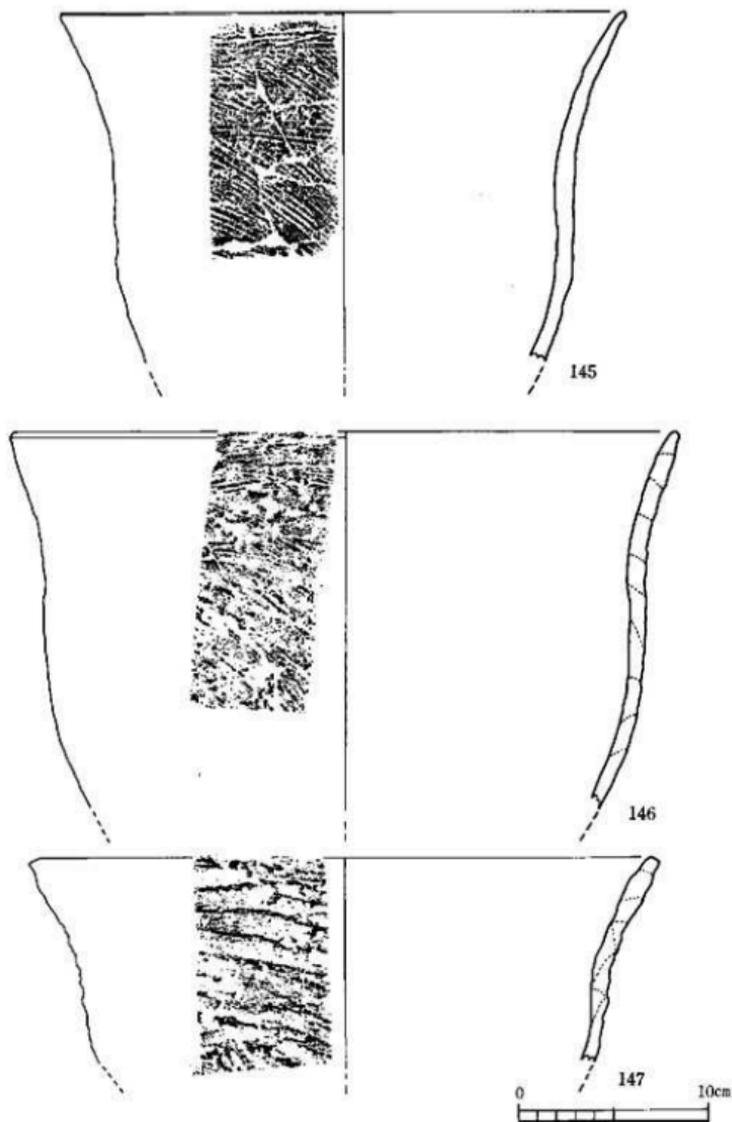


Fig. 29 粗製土器尖測図-4 (縮尺 1/3)

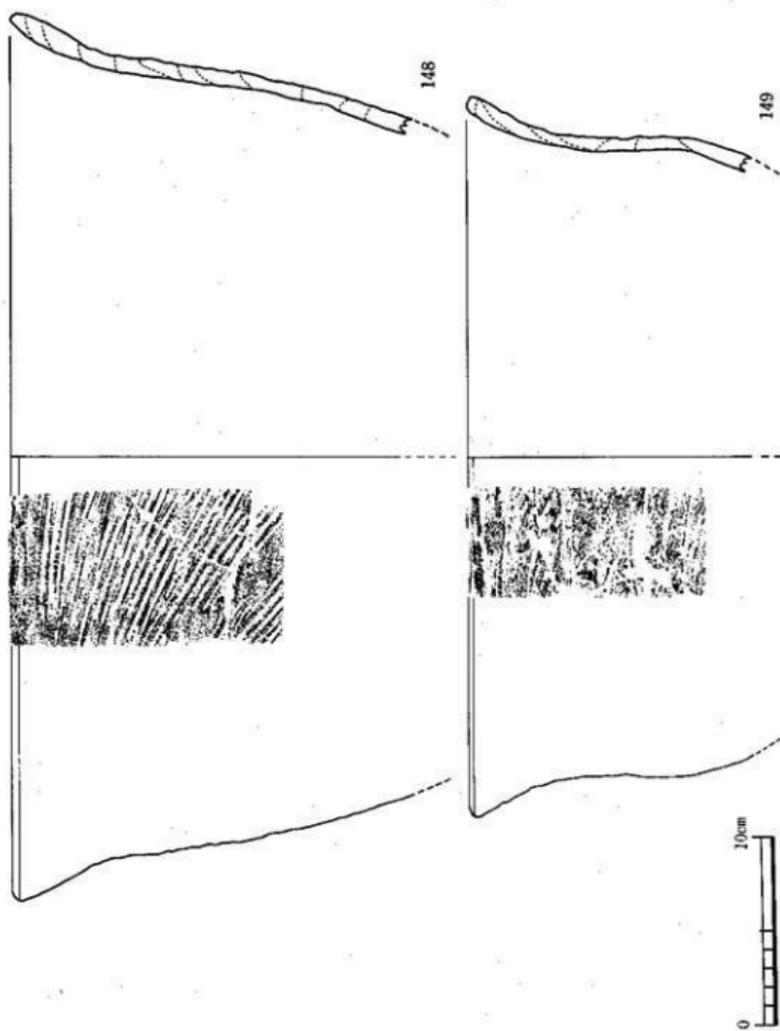


Fig. 30 粗製土器実測図-5 (縮尺 1/3)

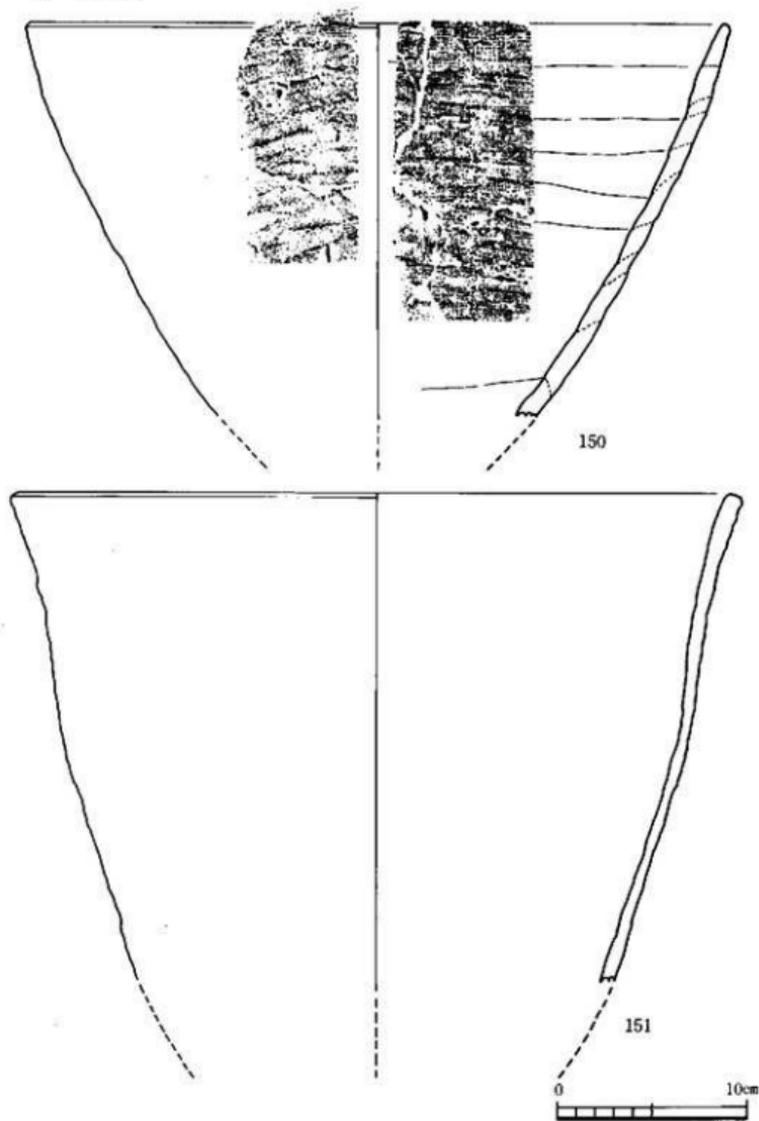


Fig. 31 粗製土器実測図一6 (縮尺 1/3)

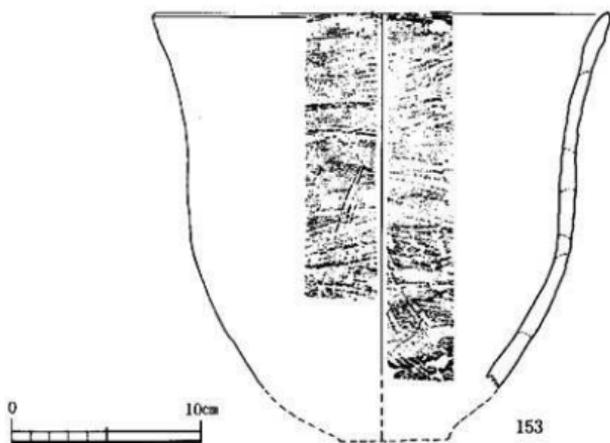
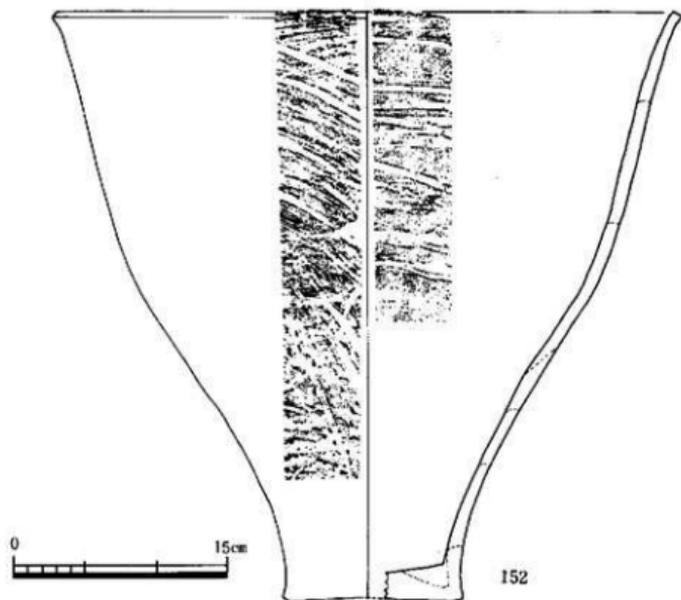


Fig. 32 粗製土器実測図-7 (縮尺 1/3・1/4)

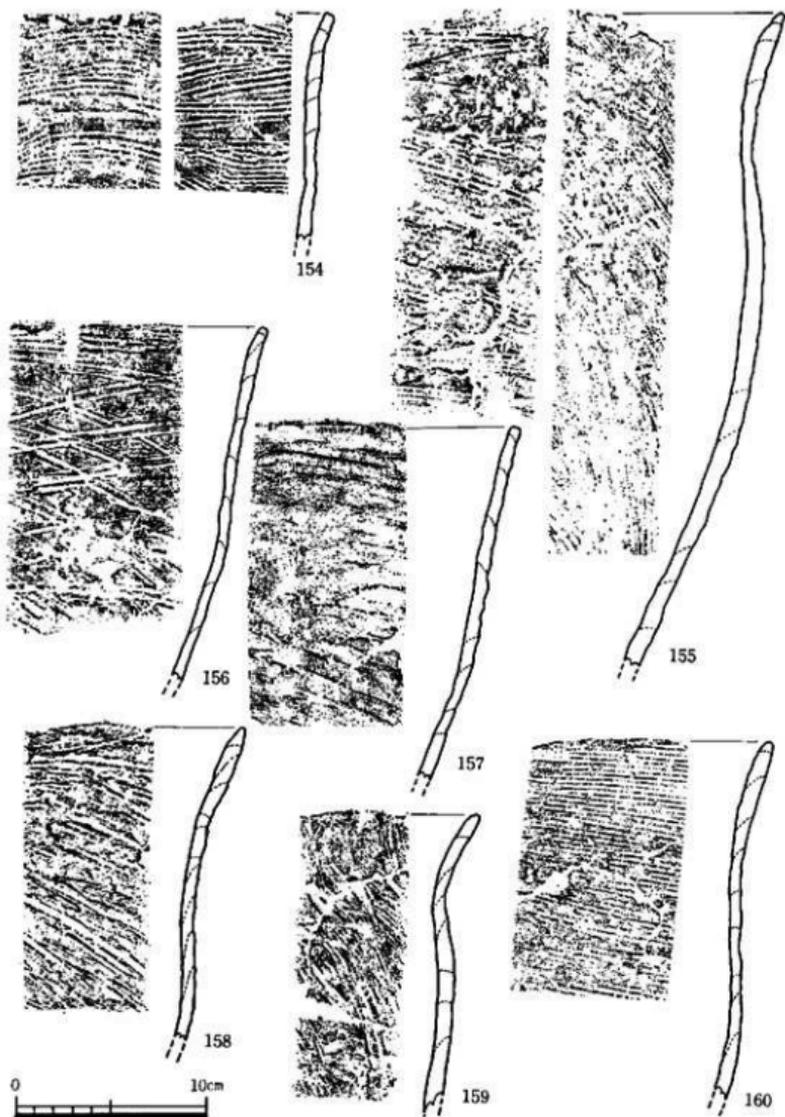


Fig. 33 粗製土器実測圖—8 (縮尺 1/3)

である。口縁部はナデで面取りを行なう。

Fig. 33-154~160までの土器は、断面だけであるが、鉢形土器ではなく深鉢形土器である。形態分類では、I b類が155, 159, 160の3点で、II b類が154, 156~158の4点である。

器形調整の方法は前記した土器群と同様である。154の内外面とも2枚貝条痕を施す。外面は器面によって横方向の施文を行なっている。内面はナデの後に横方向、右下方から左上方へ左下方から右上方へ施文しているが、最終的には横方向からの施文である。口縁端部はナデ調整によって面取りされている。155も164と同様に内外とも2枚貝条痕で施文調整を行なっている。外面は横方向や右下方から左上方への斜めの施文が多い。また底部から胴部下位までは縦方向の施文が主である。内面は荒いナデの後に横方向に施す。口縁端部は内面からのナデ調整で面取りをつくる。156の外面は小巻貝条痕で施文している。胴部中位から口縁部下まで右下方から左上方へ斜めに引き上げる方向と、それとは逆の方向へ引き上げる方向により格子目を形成する。口縁部は横位方向の条痕を施文している。内面も同じ条痕文を施すが部分的にナデも残る。口縁端部はナデ仕上げにより面取りされているが内面からのナデが強いいため口縁部がなお一屈外反する感がある。157の外面はユビケズリにより器面を整え、その後稜を取りのぞくようにナデで仕上げている。ケズリ・ナデの方向は右下方から左上方へ上げる形状を示し、土器を回転させながらケズリ・ナデを加えたものである。内面はナデによる仕上げである。

口縁端部はナデによるが上からの押えにより両端に浅い突起がある。158の外面も156同様に小巻貝による条痕施文である。方向も右下方から左上方の斜めに引き上げる手法で、口縁部付近では横位方向の条痕となる。内面はナデ仕上げしているが丁寧な部分と荒い部分がある。口縁端部の内側がナデ仕上げのため端部は丸くなり押えではない。159の外面は158と同様に小巻貝条痕による施文である。施文方向は右下方から左上方へほぼ直上に引き上げる方向である。口縁部付近はナデによる。内面は荒い横ナデを施す。口縁部内面では丁寧なナデを施す。口縁端部はナデにより面取りをする。160の外面は2枚貝条痕による施文である。全体的に横位方向からの施文である。右下方から左上方へ流れる条痕からすると土器の回転は逆時計まわりの回転があたえられたものである。内面も2枚貝条痕によって施文している。口縁端部はナデによって丸くおさめられている。

以上で粗製土器の施文方法、文様形態、土器の回転による施文方向を解明してきたが、粗製土器といえども文様を意識して形作られていることが明らかになった。施文工具も指、二枚貝、小巻貝条痕、板状調整具、篋状施文具と現在5つの工具がある。これは形態・文様の、粗雑な形状を示す粗製土器とするよりも文様形態を持つ鉢形土器とする考えが成り立つとすれば、精製土器、粗製土器という名称の変更も考える必要がある。

**底部 (Fig. fs, 34~36)**

出土遺物全体を総点検及び総数があったのではなく、P番号だけの報告である。ゆえに土器の総数まで明らかにできなかった。

**精製土器の底部 (Fig. 19)**

精製土器の底部は72~78, 80, 81, 83, 84, 94, 97, 103が浅鉢形土器, 他が鉢形土器の底部である。72, 73は丸底を呈する。74~76が平底である。他は上底である。鉢形土器の平底は95, 97, 98~102で他は上底である。上底の中で底の周辺部が擦りへっているものがほとんどである。種子及び木の實の圧痕が付着しているものは, 81と101である。81は小さな種子状の圧痕がある。101は円形の圧痕である。おそらくドングリ等の木の実であろう。鉢形土器の中で上底とはなるものの非常に肉厚な底部を持つ79, 82, 87, 91, 93, 102がある。これに対し104などは非常に薄い器面を持つ。底部と胴部との接合面は端部にあるものが多く, 器面を丁寧な研磨で仕上げている。

**半精製・粗製土器の底部 (Fig. 34~36)**

半精製土器の底部は Fig. 35—171, 174, 180, 183, 197, 203 である。内外面ともナデ仕上げを施す。上底は180, 197を除いたものである。図示したものはすべて鉢形土器である。図示できなかったが浅鉢形土器の底部も上底の方が多い。180と183に小さな種子の圧痕が認められる。またこの2点の内面にススが付着している。精製土器と同様に底部端部が擦りへっているものが多い。

粗製土器の底部には8割~9割程度何らかの圧痕が認められる。精製土器・半精製土器には約1割しか認められない。これは製作技法の相違か, または製作場所の相違によるものであろうか。圧痕には種々の物がある。小さな種子, 木の実等や木の枝や板状の材, くじらの骨の圧痕等がある。161は内外ともナデで仕上げるが内面は, 二枚貝条痕の後ナデ仕上げである。底部の圧痕は楕円形の1.0×0.5cmの種子痕がある。162の圧痕は木の実と木の枝と思われる圧痕が認められる。162・163は内外面ともナデ仕上げ。163の圧痕はくじらの骨の圧痕が認められる。164, 165, 166, 167は内外面ともナデ仕上げ。166は一部にケズリ痕がある。164の圧痕は小さな種子圧痕。165は木の実及び種子の圧痕。166は木の実の圧痕がある。167は木の実と小さな種子の圧痕がある。168~170にも木の実と思われる圧痕や板状(170)圧痕がある。Fig. 35, 36の粗製土器172, 173, 175~179, 181, 182, 184~196, 199, 201, 202, 204に何らかの圧痕が認められる。特に188の底面にはくじらの骨の圧痕が認められる。板目状圧痕及び木の枝状圧痕のある189, 190, 195の底面に黒曜石剥片が混入している例からして土器製作所にかかわりのあることが明確である。屋外の場所, それも生活址の近くであったことが明らかである。土器の器面整形をみると, 小巻貝条痕を施文しているものは, 169, 170,

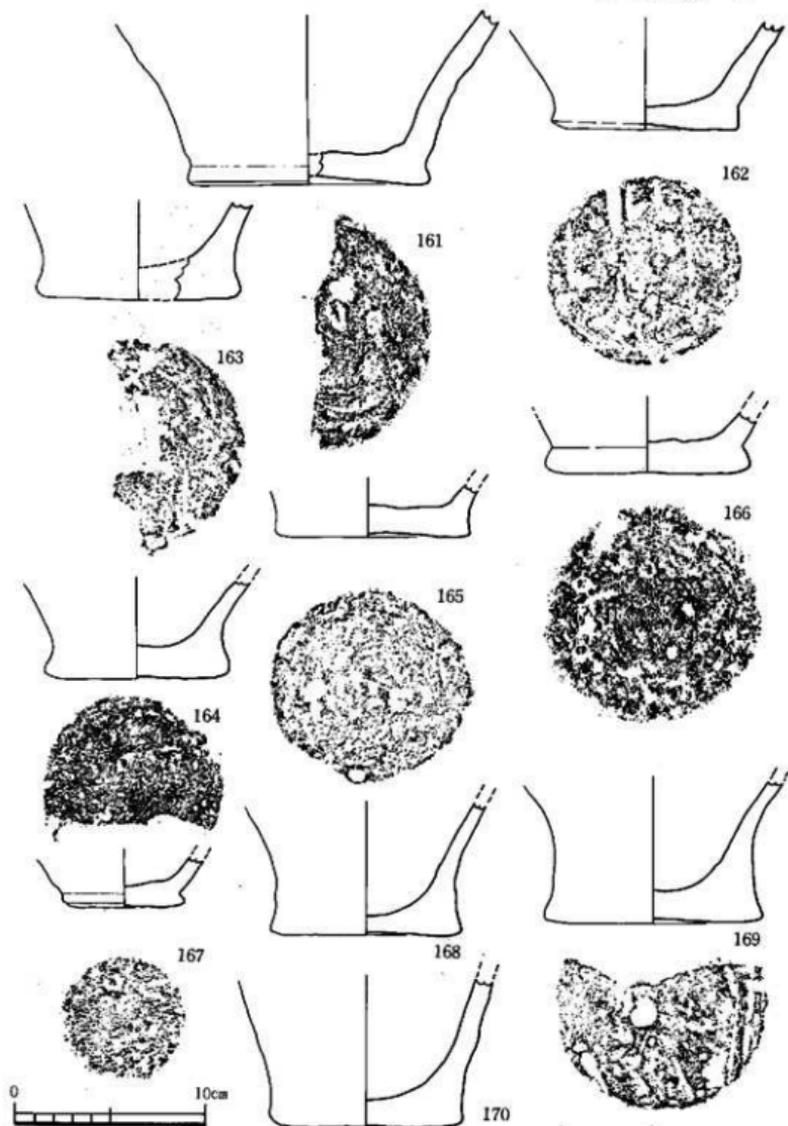


Fig. 34 底部尖湖四一 (縮尺 1/3)

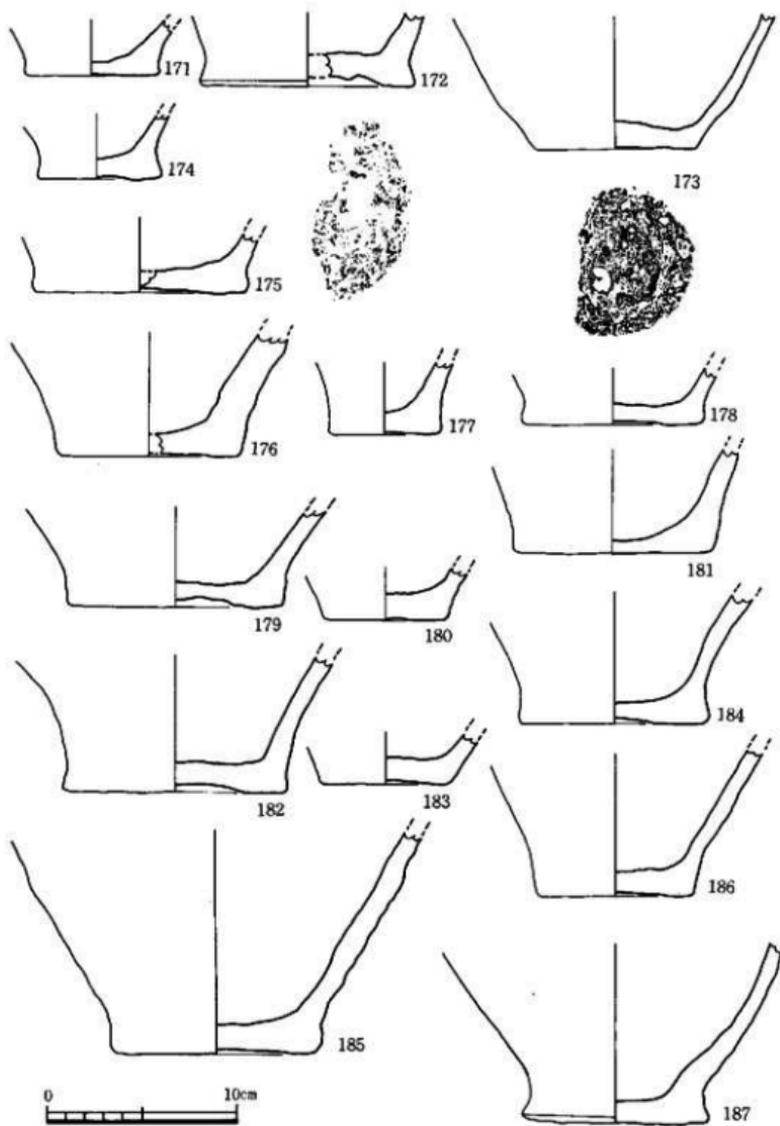


Fig. 35 底部実測図-2 (縮尺 1/3)

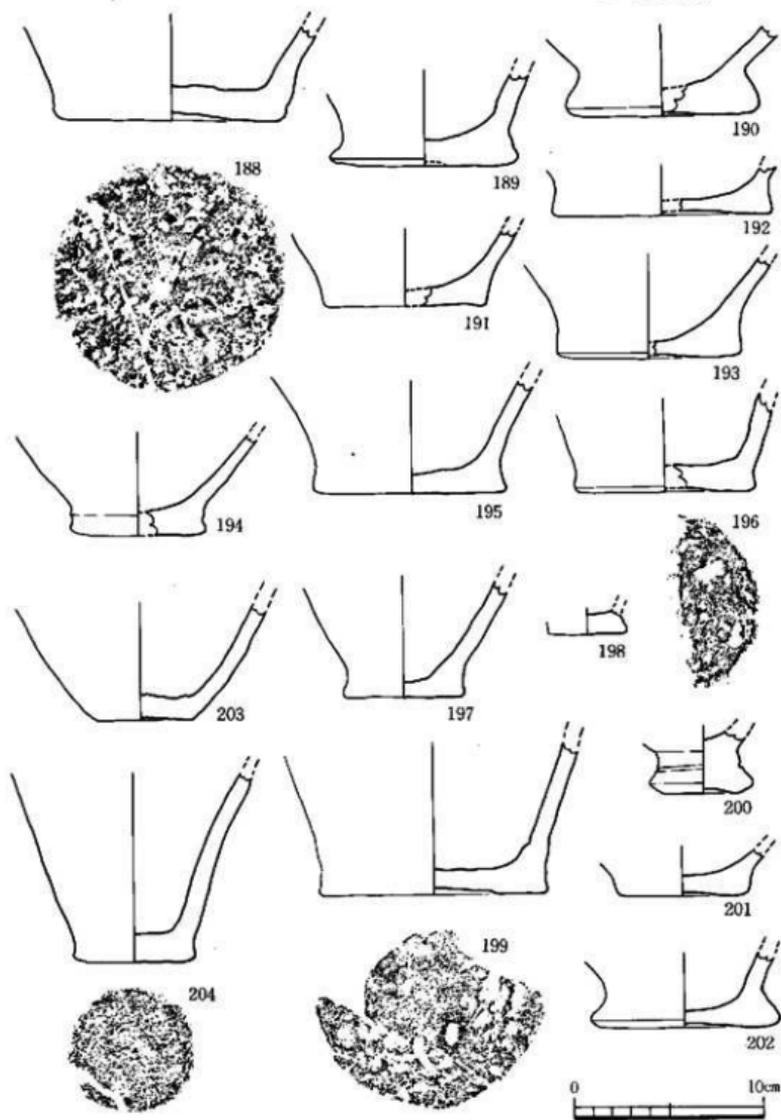


Fig. 36 底部実測図-3 (縮尺 1/3)

173, 179, 184, 191, 194, 204であり条痕の跡をナデているものもある。二枚貝条痕は181だけ、板状調整具によるものは196, 161, ユビケズリによるものは162, 166, 168, 176, 185, 187, 193, 201である。内面にあるもの170もある。後は内外面ともナデ調整によるが、半精製土器のナデ調整より荒い。底面周辺部には精製土器、半精製土器に見られる擦り切れ現象が多少ではあるが認められる(199, 201, 202)。

図示したものは鉢形土器だけであるが、浅鉢形土器の底部も量的には少ないがある。粗製土器底部の形状よりほぼ3種類に区別できる。底面立上りが角張り胴部へとつづくタイプと立上りが丸みを持ち胴部接続が約4分の1の所にあるタイプ。底面立上りがわずかに丸みを持ち胴部へとつづくタイプである。また平底(163, 164, 166, 170, 173, 181, 187, 189, 191, 194, 195, 204)とわずかではあるが上底(161, 162, 165, 164, 168, 169, 172, 175, 176~179, 182~185, 188~190, 192, 193, 166, 199, 200, 202)の底部がありほぼ半々の割合である。このほか脚台付底部ともいうべき上底の底部(Fig. 20-110, 116)も若干認められる。精製土器の上底の割合と比較すると精製土器がほとんど上底にくらべ半精製・粗製土器の上底は半々程度である。これは使用目的による相違かもしれない。

#### 土偶・土製品 (Fig. 37, PL12)

##### 土偶 (Fig. 37-2~4)

2・3・4が土偶である。2は脚部, 手, 顔の部分が欠損しているが, 胴体部の作りからして, 整ったものである。九州の土偶の中でも形の整った部類であろう。腰のくびれ, 乳房の作り, 一目で妊婦とわかる腹部の作り等は精巧に作られている。3は土偶の脚部と思われるが他の土製品かもしれない。作りも研磨も精巧で中央部が空洞となり筒状になっている。これらの形態と大きさから土偶とするよりむしろ高環形土器の脚部とも思われる。しかし中央部が筒形の穴がある点から高環形土器ともしがたい。4は顔面の部分である後頭部が剥落している。顔面は粗雑な作りでかろうじて土偶とわかる形態をしている。四箇東遺跡でも1点出土しているが, 2ほど精巧な作りではなくむしろ4に近い形態である。

##### 土製品 (Fig. 37-1, 5~9)

1は十字形石器を模倣して作成したもので1片が欠損している。中央部に穿孔がある。全面に指によるナデを施しているが, その仕上げは雑である。5~9は円盤状土製品である。中央部に穿孔を両面から施す。8は周辺部に篋状工具で刻目を入れて歯車状に仕上げている。四箇東遺跡からも同種のものが出土している。1はわずかな砂粒しか含んでいない精製された粘土を使用している。2, 3, 4は細砂粒や金雲母を含む胎土で, 5~9は1mm~2mm程度の砂粒を多く含んでいる。焼成はすべて良好, 色調は, 2~4が黒褐色, 1が赤褐色, 5から7, 9が黒褐色, 8が褐色を呈す。

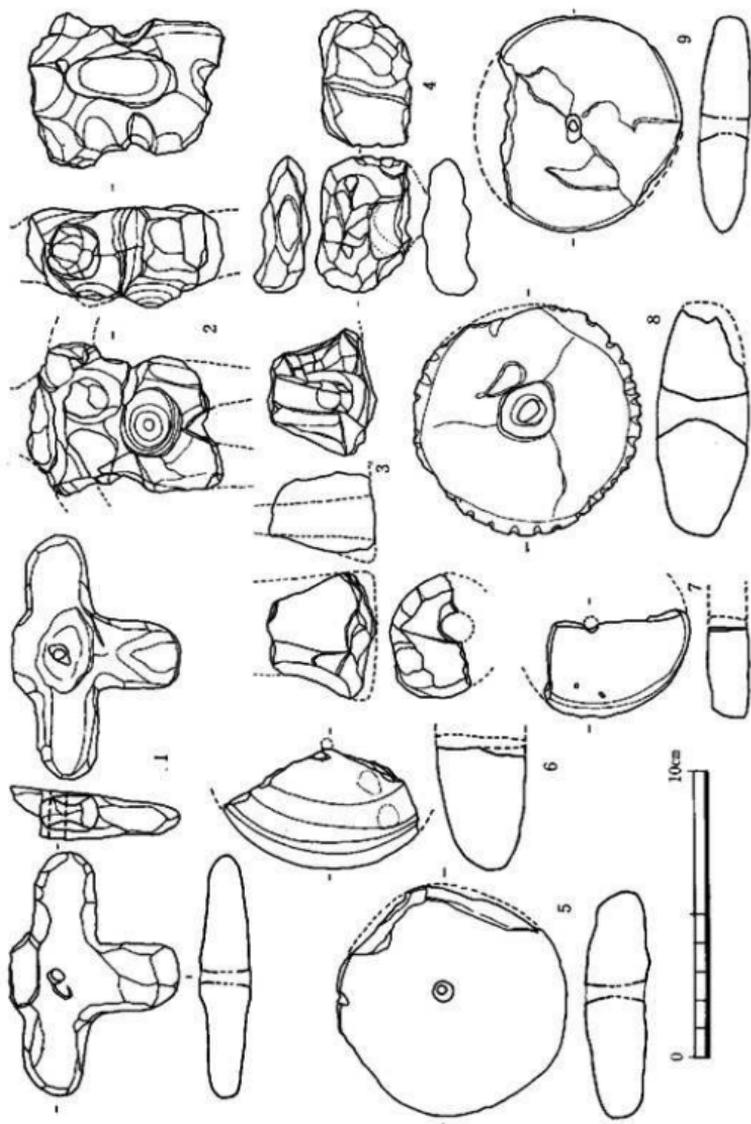


Fig. 37 土偶・土製品実測図 (縮尺 1/2)

## 2) 石器

L-11c地点から出土した石器は、発掘面積300㎡と狭い範囲にもかかわらず、800点近い。これらは出土状況および共伴の土器から縄文時代後期後半のものであると推定できる。石器の種類も石鏃、つまみ型石器、刃器、サイド・ブレイド、打製石斧、磨製石斧等と多種多様である。石器の組成で注目されるのは、やはり黒曜石製の縦長薄片を素材にした薄片石器の割合が高いという事である。800点に及ぶ石器の80%を占める薄片石器の割合の高さは、西北九州の縄文中・後期に顕著な展開をみせている状況を当遺跡も如実に示すものとして把握できる。

当地点は、前述されているように隣接した四箇東遺跡の一部である可能性が高い。しかも時期的にも位置的にも近接する四箇東遺跡も含めた上で、改めて検討しなければならない問題である。このため今回は出土した石器類の事実報告のみにとどめる。石器の器種及び形態についてはJ-10<sup>7</sup>地点の分類に従って述べることにしたい。しかし資料整理は豊富な量と時間不足さらには勉強不足のため、半数のものしか図示することができなかった。しかも特長的な石器類についてのみに主眼がおかれた事も反省しなければならない。割愛したのもや特長的な石器類に関しては四箇東遺跡の報告の中で補足していくことにしたい。

## 石鏃 (Fig. 38・1~24, Fig. 39・25~45, PL. 17)

出土した石鏃は形態的にも分類されるがここでは遺物が縄文後期後半に限定されるため(縄文後期の西北九州に特徴的に出現する薄片鏃に主眼を置いて)に調整方法に主体をおいた。素材となった薄片への加工の差異から大きく3類に分類した。I類は縄文~弥生時代に普遍的に認められるもので、調整は両面に施され、II・III類とは明確に差異が認められるもの。II類は時期に限定されず出土している薄片鏃で、主要剥離面あるいは大剥離面を残しているもので広義の薄片鏃とされるものである。III類は西九州の縄文後期に盛行し特色化されたもので、いわゆる狭義の薄片鏃と呼称されるものであり、主要剥離面に2ないし3の稜線が認められる。これらは加工部位の差異により、さらに細分できるがここではとどめておきたい。

## I類 (1~8)

1はパテナが進んだもので他に比較するとやや小形で細身である。1~4は二等辺三角形を呈し形態的にも類似する。2・5は刃先から脚部にかけて段がつくのを特徴とする。6は表裏面ともに一部に自然面を残す。形態的にも緊張気味となり他と形態的にも差異が認められる。7は小形の鏃でやや先端が欠けている。表裏の二次加工は丁寧である。8も先端部が欠けている小形の鏃である。1~8はいずれも黒曜石製のもの。

## II類 (9~30)

形態的には二等辺三角形を呈するものが大半である。9・10の様に主要剥離面を残し、大剥離面は調整により残っていないものもある。他の石器は主要剥離面・大剥離面をわずかつづ残

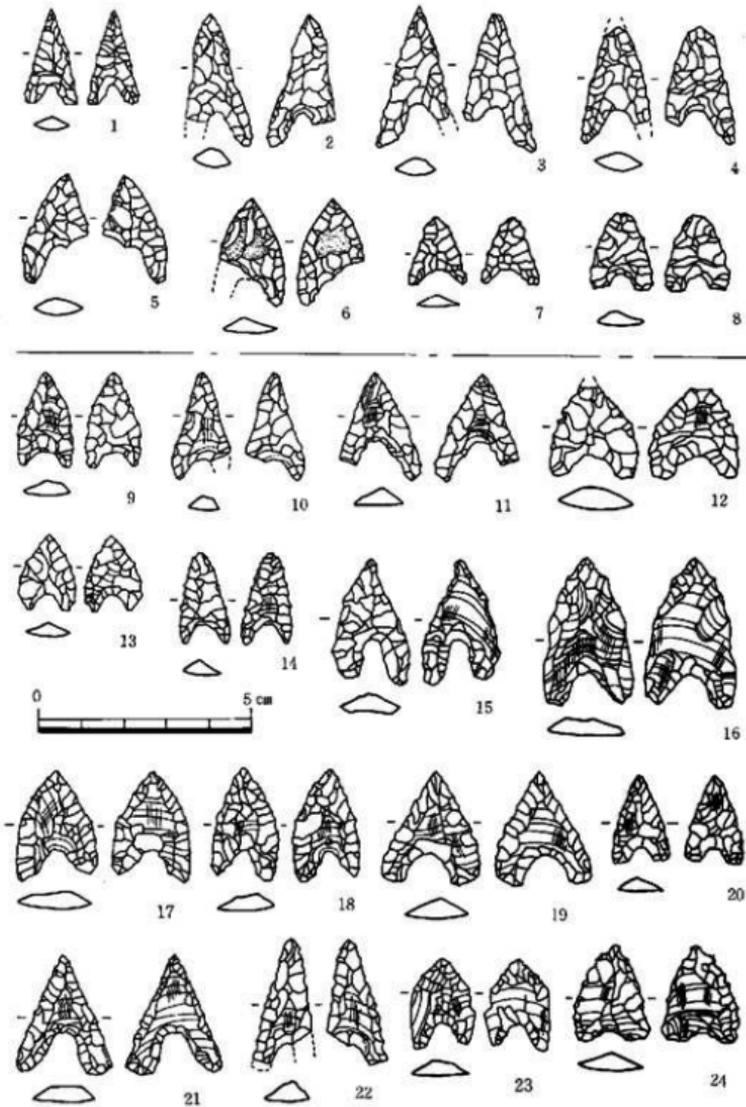


Fig. 38 石鏃実測図一1 (縮尺 3/4)

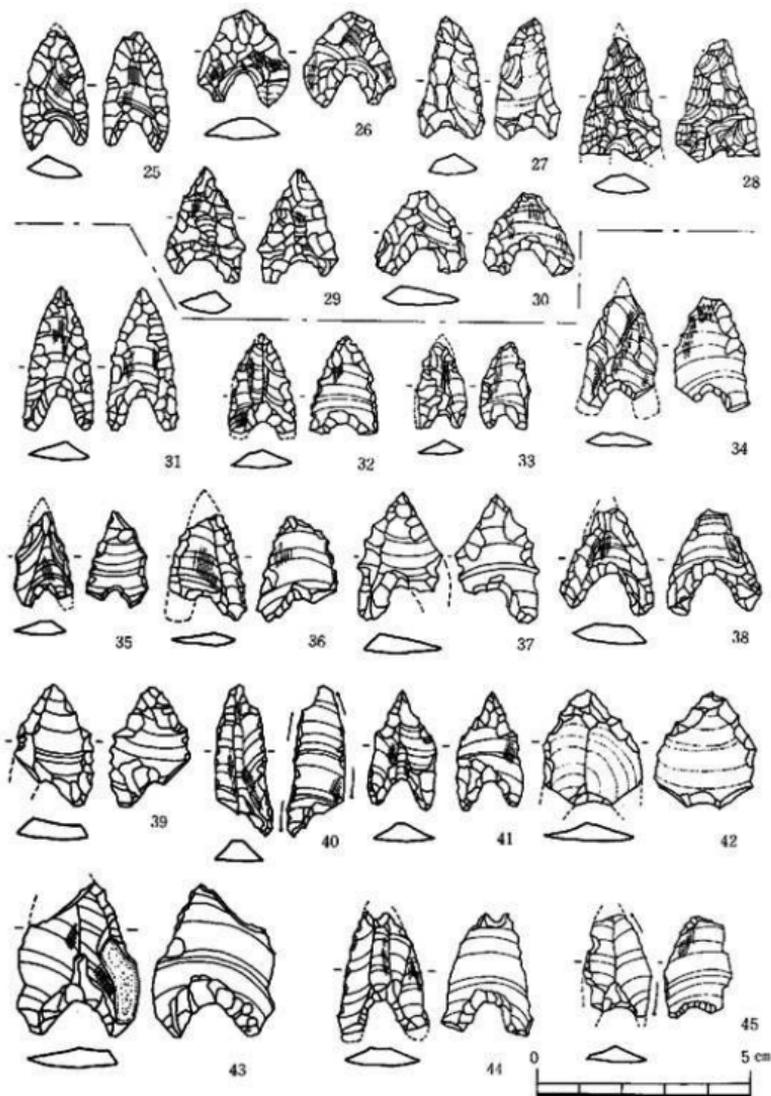


Fig. 39 石鏃実測図-2 (縮尺 3/4)

したものが多く、いずれにしても広義の剥片鏃に属する。大半のものが素材の打面側に脚部があるが、27・29の様に打面側が先端部にくるものもある。

#### Ⅲ類 (31~45)

31~33・36・38は素材となった剥片の打面側を脚部とし全周に細い割離を施したもので、34・35・37・39・41・43~45は前述と同様に素材となった剥片の打面側を脚部として脚部部分の挟りと先端部のみ二次加工を加え刃先を形成させたものである。42は同様な調整方法を用いるが、サマサイト製の素材の打面側が先端部となったもの。40は細長い剥片が素材となり、やはり打面側を脚部として先端部は素材の鋭利な剥片を生かしたものである。43は他に比較するとやや幅広い剥片が使用されている。表面に自然面が残る。42の他はすべて黒曜石製である。

#### 楔形石器・石錐・尖頭器 (Fig. 40~46~66, PL. 18)

##### 楔形石器・影器様石器 (46~57)

黒曜石を素材にしその片面もしくは両面に特殊な割離を持つものを楔形石器とした。これらの形態上の特長としては、ほぼ長方形で石器の一端に細長い極状割離面が観察される。一見影器に類似している。46・48・53は素材の剥片の表裏面に入念な加工を施したものであるが、ただ側面を観察すると彫刻刀面に似た割離が認められる。47・49~52・54~57は形態的に長方形に近い形を呈する。調整割離は片面あるいは側辺部の部分的に施される。しかし、すべての石器の長軸の一端に細長い極状割離が認められる。さらに上部あるいは下部の横位に細かな割離がある。この割離はつぶれ状のもので階段上の割離になっているのが顕著である。共通して言える事は、この石器の横断面は凸レンズ状をなし、長軸に一条ないし二条の極状割離が認められ、上下、横位につぶれがある。55は細長くやや厚手の剥片を素材にしたもので、側面に沿って末端部から一条の極状割離がある。他の石器の様に上下・横位には小さな割離は認められないので、影器様石器として別にした。

##### 石錐 (58~60)

58は黒曜石を素材にしたもので主要割離面には丁寧な調整を加える。大割離面には刃部部分と一部のみ加工を行う。59は素材となった剥片の打面側に二次加工を施してドリル状にしている。末端部は折断されている。60 不純物の多い黒曜石の素材の両面を入念に調整を施したものである。

##### 尖頭器 (61~66)

61は素材となった剥片の打面側に入念な加工を施す。末端部にも調整を加えている。62 やや厚手の剥片を素材にし両面に入念な加工を施したものである。63は打点の残る剥片を素材にして末端に丁寧な加工を加えたもので、大割離面、主要割離面を大きく残している。64は表面に自然面を大きく残すサマサイトを素材にしたもの。打面側は折断によってカットされている。

大剣難面の両側面に連続的に剥離を施し尖頭状にしている。65も61に類似した尖頭器で、素材となった剥片の末端部に両面から入念に加工を加え調整する。打面側は二次加工等は加えず折断によってカットしている。一応尖頭器として扱ったが、サイド・ブレイドのI類に含まれる可能性をも含んでいる。66は厚手の剥片を素材にしたもので、両面を入念な加工により調整している。やや先端部の尖りと側辺部の縁相が石鏃に類似していたが、先端の刃部は石鏃には適していない。61がやや小形であるので、石鏃とも考えられるが一応ここでは尖頭器とした。61・63・65はいずれも剥片尖頭器と称されるものである。

#### つまみ型石器 (Fig. 41-67-85, PL. 18)

つまみ型石器は今回28点の出土をみた。このうち素材となった剥片の末端近くに抉りをいれ折断しているのは2点と少い。残りはすべて打面側の剥片で、バルブやバルブスカーを残しているものばかりである。これらの剥片の幅は2.2cm~2.5cmが多い。しかしこの幅より広い剥片や狭い剥片も含まれる。さらにこの石器の特長である抉入部は打面側により近いものや素材となった剥片の中位あるいは末端に近いものも含まれている。以下個別の石器の概略を述べたい。

67~85の図示しえた石器はすべて打面側の剥片である。この中でも67~79・82~84は主要剥離面に2ないし3の稜を残す。このため断面形は台形状を呈する。67は両側から剥離を加えたもので側辺部に使用痕が認められる。68も使用痕があるが抉入部は両側辺を両側から調整している。69の抉入部は両側辺を粗く調整している。70・71は素材の中位に近い部分に抉入部がある。ともに抉入部は調整を両側面の両側から施しているが71の方がやや粗い調整である。73の調整は片側部分を両面から行なう。74はやや厚手の剥片が素材で打面により近い部分に抉入部がある。調整は両側辺の両側から丁寧に行なわれている。75の調整も74同様である。76の調整は両面から行なわれているが片側の方が丁寧である。77・78も調整は両側辺に両面から施す。79は71と同様に素材の中位に抉入部があるもの。82は73と同様な調整である。83は打点の残る剥片を素材にして抉入部は片側の方に二次加工を施し、もう一方には剥片に対し浅い調整である。84は打面側に二次加工を加えバルブスカー、バルブ等を除去した剥片が素材となっている。抉入部は両側から二次加工で調整。83と84は折断の際の尖敗から抉入部で折れず下部の剥片へ斜めに折れている。80は横幅のある剥片が素材となっている。打面部は小さい。抉入部は両面から粗く二次加工を施し形成している。鼠鹿石は不純物が混る。81は打面の直下に両面から丁寧に二次加工を施し抉入部を形成している。しかしこの抉入部の調整は他の石器に比較すると丁寧である。一応抉入部から“つまみ型石器”としたが、あるいはドリルの先端の折れたものかも知れない。85は他の石器に比較すると厚手となる。これも抉入部から、つまみ型石器の一形態として扱ったが、他の石器(右筵のつまみ)の可能性もある。

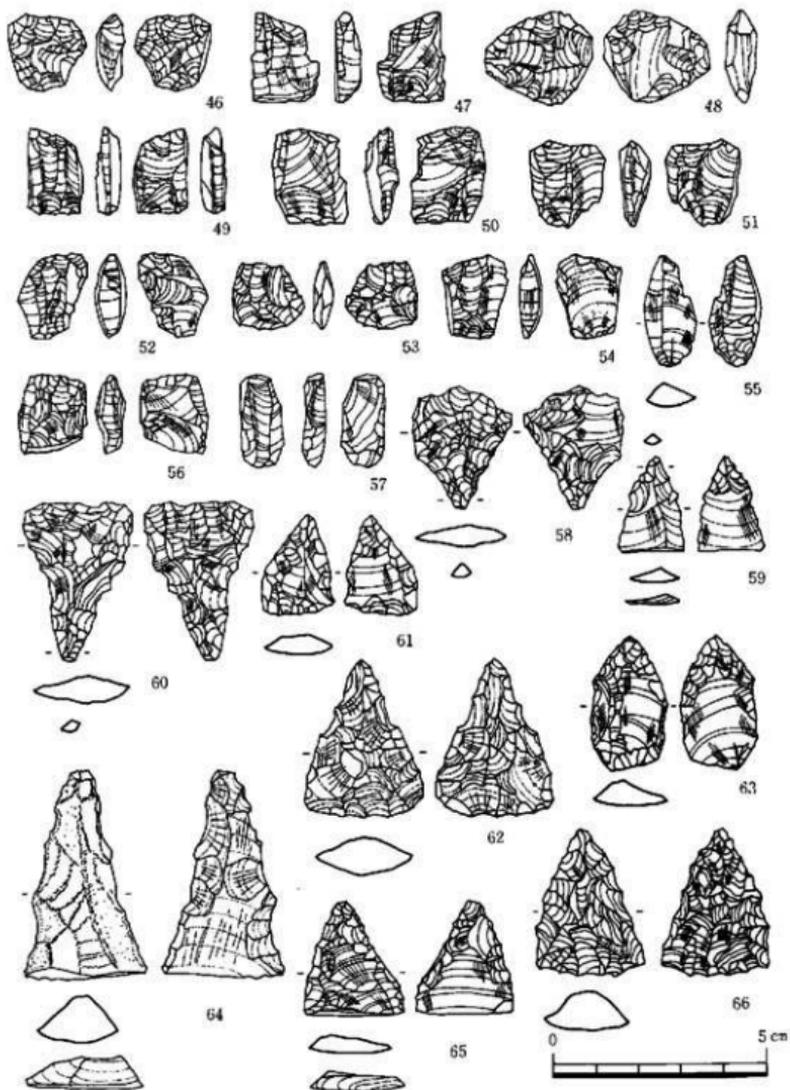


Fig. 40 楔形石器, 石錐, 尖頭器実測図 (縮尺 3/4)

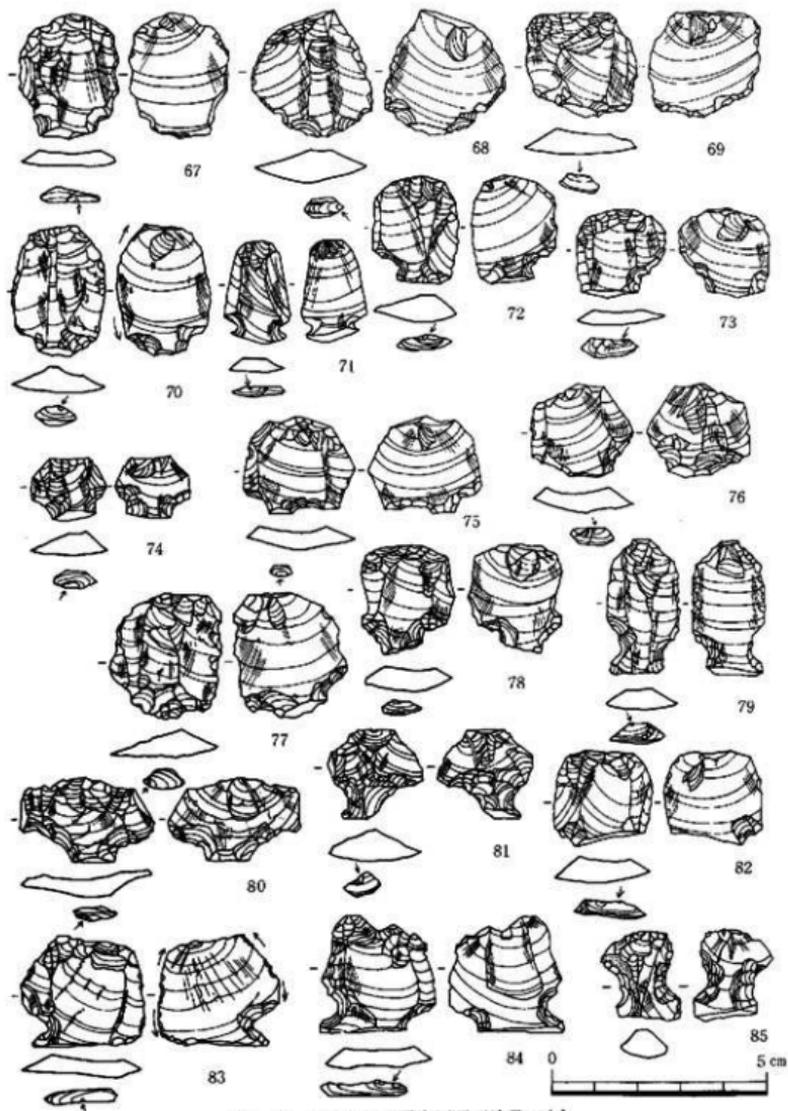


Fig. 41 つまみ型石器実測図 (縮尺 3/4)

サイド・ブレイド (Fig. 42~43—86~125, PL. 19)

剥片石器の中で打面・末端あるいは側辺部に加工を施し、長方形を呈する小形の石器類をサイド・ブレイドとした。この中でも調整の差異により大きくⅠ・Ⅱ類として分類した。

#### Ⅰ類 (86~96)

素材の両面に二次加工を加え、長方形を呈するもの。あるいは素材の片面にのみ二次加工を施し、長方形もしくは半月形になるもの。88は剥片の打面側に二次加工を施したものの。調整は両面からである。87・89・95・96は86と同様に素材となった剥片の短軸に片面からのみ別離調整を施したもので、形状は長方形に近いものと正方形に近いものがある。88は側辺部に両面から別離したもので形状は正方形に近い。また短軸の両端に二次加工を施した89~90・93・94の様なものもある。92はサヌカイト製でやや厚手となるが、大きさ・形状からサイド・ブレイドとした。これらは一部に調整を加えて、素材の面を大きく残していることが多い。しかし88の様には素材の面を僅かしか残さないものも稀にある。86で特記することは素材のリングや稜が擦りへっていることである。

#### Ⅱ類 (97~125)

ここでは素材の剥片の打面側もしくは末端側あるいは両端を折断による方法でカットしたものと二次加工を加えたものを分類した。97~105は素材となった剥片の打面側および末端部、この両端を折断方法により意図的にカットしたもので、形状は長方形もしくは正方形に近く形を整えてある。さらには97~100の様に側辺部に使用痕が認められるものや101~105の側辺部には細かな二次加工が施してあるのに分けられる。106~116は剥片の打面側を残し、その反対側の一端を折断技法により折り取ったものである。打面側は平担な調整打面や113の自然面の打面もある。108・109・110の様に側辺部に細い別離を施したものもあるが、ほとんどの石器は、素材の剥片の鋭利さをそのまま刃部としている。117~125の剥片には打面側を前述同様に意図的に折断したもの、あるいは打面側に二次加工を加えたものである。124は二次加工を施した例で、打面側に両面から細かい別離を加えて打面側を除去している。120・125の側辺部には連続的あるいは部分的に別離を加えている。他の剥片にはやはり使用痕が認められる。いずれにしても形態的に差異が認められ、素材となった剥片をある一定の長さを得るために短辺部へ加工が施されているのを特長としている。



Fig. 42 サイド・ブレイド実測図-1 (縮尺 3/4)

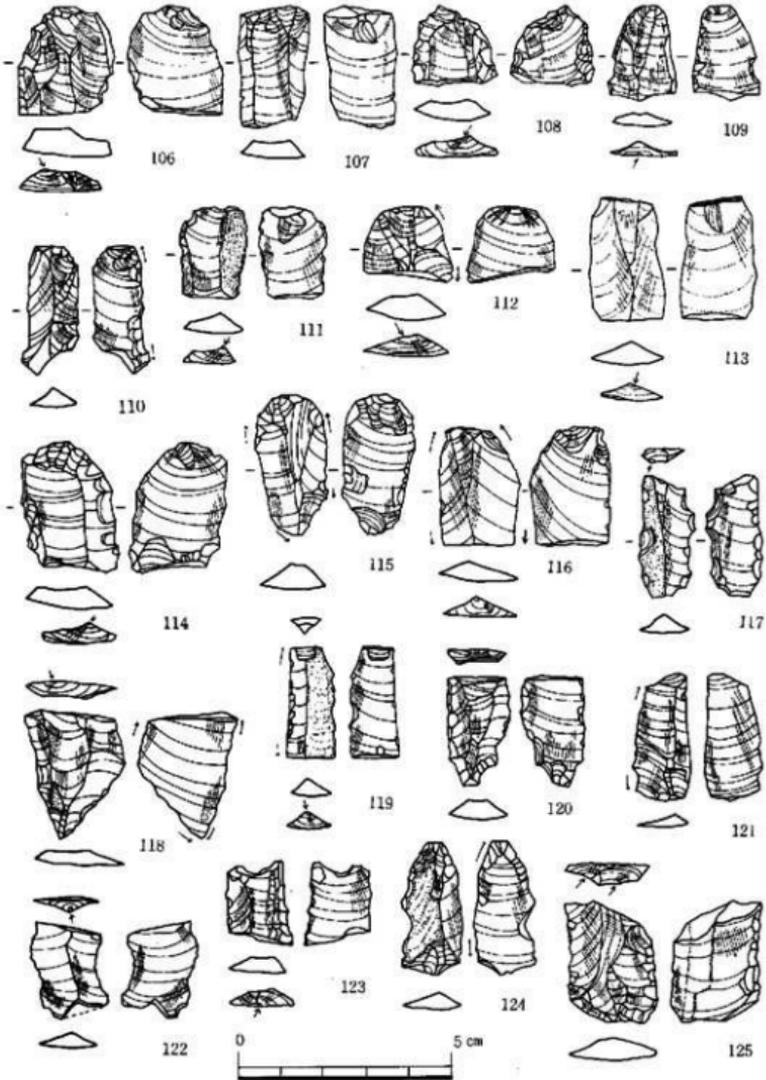


Fig. 43 サイド・ブレイド実測図-2 (縮尺 3/4)

## 刃器 (Fig. 44~50-126~224, PL. 19~22)

黒曜石製の比較的大形の縦長剣片を素材にしたものを刃器として分類した。これらには次の概念規定を考える。1 剣片の両側辺の稜線がほぼ平行で、最大幅に対しその最大長が二倍以上ある縦に長い形状のもの。2 剣片の横断面は三角形もしくは合形状を呈し薄く側辺部は鋭利である。3 剣片自体が利器として使用された一方他の剣片石器の素材として用いられた可能性のあるもの。4 打面は大きくて、両側辺は平行せず末端部が先細りや肥厚するもの。これらに該当するものは150点弱と石器組成の中でも占める割合は高い。(発掘面積が300m<sup>2</sup>と狭い範囲にもかかわらず遺物の出土状況の多い事は先述のごとくで、その中でも刃器等の出上比率の高い事は非常に興味深い。ここでは前述の概念規定にあてはまる刃器を加工および形状使用痕から3類に分類をおこなった。I類は形がよく整った縦長剣片が素材となり、その一端を一側辺もしくは両側辺から尖頭状に加工を施したもので、II類はI類同様に形よく整った縦長剣片を素材にしたもので、側辺部には二次加工や使用痕の認められるもの。このII類は二次加工の施されたものと使用痕のあるものとに大別できる。さらには打面側や末端部を二次加工や折断によるカットしたものとに細分できるが、ここでは細分しないで大まかに取り扱った。III類は、I・II類と同様に形の整った縦長剣片を素材にしているが、二次加工や使用痕も認められないもの。この中にはII類同様に打面側や末端部を二次加工もしくは折断によりカットしたものとに細分できるが一括して分類した。

## I類 (126~129)

126は素材となった縦長剣片のバルブ・バルブスカーを残し、側辺部に二次加工を施すが素材の形状を生かしたものである。127は打面を二次加工により除去し、さらに調整を加えて刃先を形成したもので、129は127同様、打面側を除去するが、剣片の末端部と側辺に二次加工を施したものである。128は打面側を除去し、側辺部を折り取り、彫器に近い機能をもっていると考えられるものである。

## II類 (130~197)

130~152は剣片が打面から末端までであるもの。130 打面は自然面で剣片の表面に自然面を残して側辺部には使用痕が残っている。131 表面に自然面が残る。打面は小さく剣片方向は上・下二方向で側辺には使用痕が著しい。132 は剣片方向が上方からの使用痕がめだつ133 平坦な自然面で側辺部には部分的に二次加工が認められる。134 打面は平坦な調整打面で黒曜石は不純物の混りが多い。136 打角の小さい平坦な調整打面で表面に自然面を残す側辺に使用痕と擦痕が認められる。137 表面に自然面を残し側辺部には使用痕が認められる。138は末端に自然面を残し肥厚する剣片で側辺部に使用痕が残る。139 表面に自然面が残る打面は平坦な調整打面で側辺に使用痕が残る。140 表面に自然面を残し先細りした剣片で、側辺に

使用痕。141 側辺に自然面を残し、やや厚手の製片で打面は平坦な調整打面である。142 打面は平坦な調整打面で側辺に使用痕が残る。143 気泡の混る黒曜石で側辺に使用痕が認められる。144 平坦な調整打面をもつ製片で、両側辺が平行せず使用痕が著しく残る。145 製片の中位に最大幅があり打面は平坦な調整打面である。146 打面は平坦な調整打面で最大幅は製片の中位にあり、打角は小さく側辺部に使用痕が残る。147 末端部が肥厚する製片で、打面は小さな調整打面で平坦である。148 先細りする製片で側辺部に使用痕が認められる。149 やや不整形をなす製片で末端部に最大巾がある。両側辺に使用痕があり打面部は調整打面である。150 剥離方向は上・下二方向にあり、側辺に使用痕が認められる。151 打面が平坦な調整打面で側辺に使用痕が残る。152 打面は平坦打面で製片の末端に使用痕が残る。153 パルバスカールを二次加工で除去し、側辺部に使用痕が認められる。154 他の製片にくらべ極めて大形なもので末端に自然面が残る。パルバスカールは二次加工により除去されている。側辺部は部分的に二次加工が認められる。155 側辺部はわずかに自然面を残し、打面側は二次加工にて除去されている。156 打面側を二次加工にて除去。側辺に使用痕が残る。157 先細りの製片で打面は平坦な調整打面である。側辺には使用痕。158 やや厚手の製片で側辺部に使用痕、もう一方の側辺は自然面である。159 158と同様に側辺に自然面を残し打面側は二次加工にて除去されている。160 製片の最大幅がやや下位にある製片で打面部、打角ともに小さく側辺部に使用痕があり側辺部に擦痕があるのが特徴である。161 打面は二次加工にて除去、さらに折断されている。やはり側辺部には使用痕が残る。162 製片の中位に最大幅があり、打面側は折断されている。163 打面は平坦な調整打面で先細りする製片。164 パテナの進んだ製片で、打面側、側辺部には二次加工が認められる。165 打面側は二次加工にて除去され末端は折断でカットされている。166 末端は折断。打面側は二次加工にて除去され側辺部には二次加工を施している。167 166と同様な製片だがやや火きめである。168 末端が折断された製片で側辺部に二次加工を施し、打面は平坦な調整打面をもつ。169 末端の折断された製片で側辺部には使用痕が残る。170 打面は平坦な調整打面をもち末端が折断され、側辺に使用痕が残る。171、172 ともにやや厚手の縦長の製片で末端が折断によりカットされている。172は表面に自然面を残す。173 打角の小さな平坦面をもち表面には自然面がある。174は末端の折断された製片で側辺に使用痕を残す。175 最大幅が製片の下位にあり末端部は折断。側辺部には使用痕と二次加工が認められる。176 比較的厚手の製片が素材となつたもので剥離方向は上・横位となる。177 末端が折断されたもので打面は平坦な調整打面をもつ。178 やはり末端が折断された製片で両側辺に使用痕が残る。打面は平坦な調整打面をもつ。179 厚手の製片で両側辺に二次加工が施されている。打面は平坦な調整打面。180は打角の小さな薄手の製片で側辺部に著しく使用痕が残っている。末端部は折断され、打面は平坦な調整

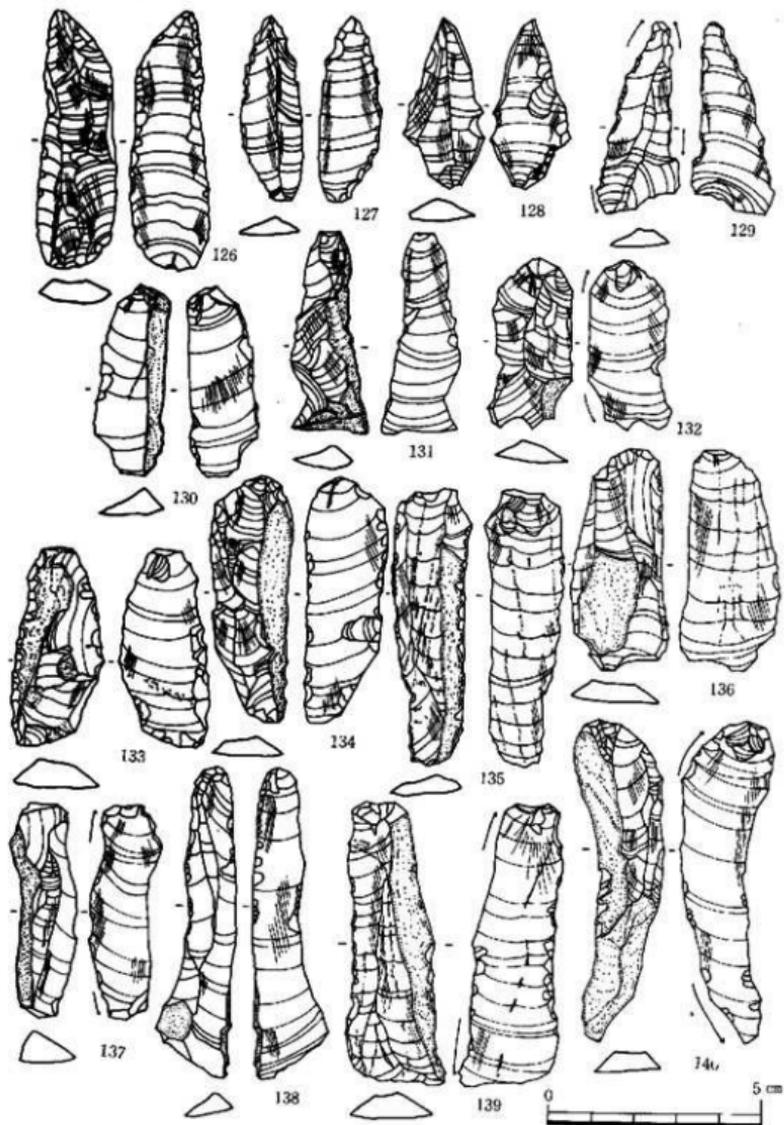


Fig. 44 对器尖刺图一 (縮尺 3/4)

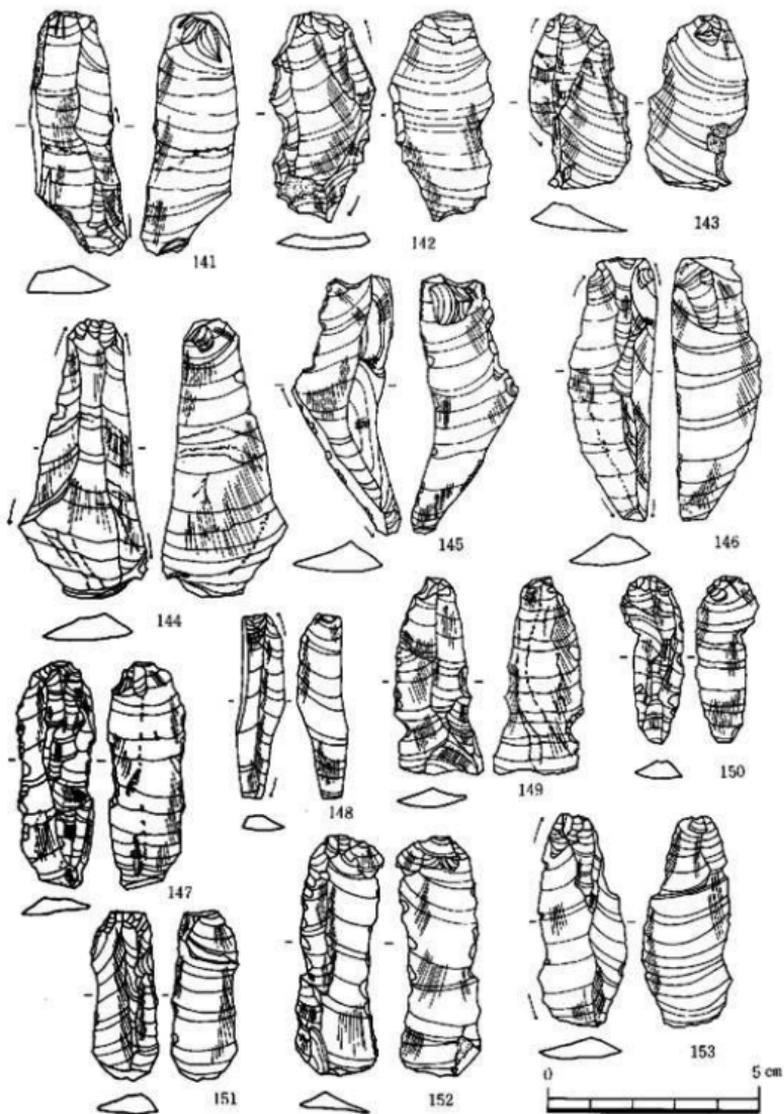


Fig. 45 刃器実測図-2 (縮尺 3/4)

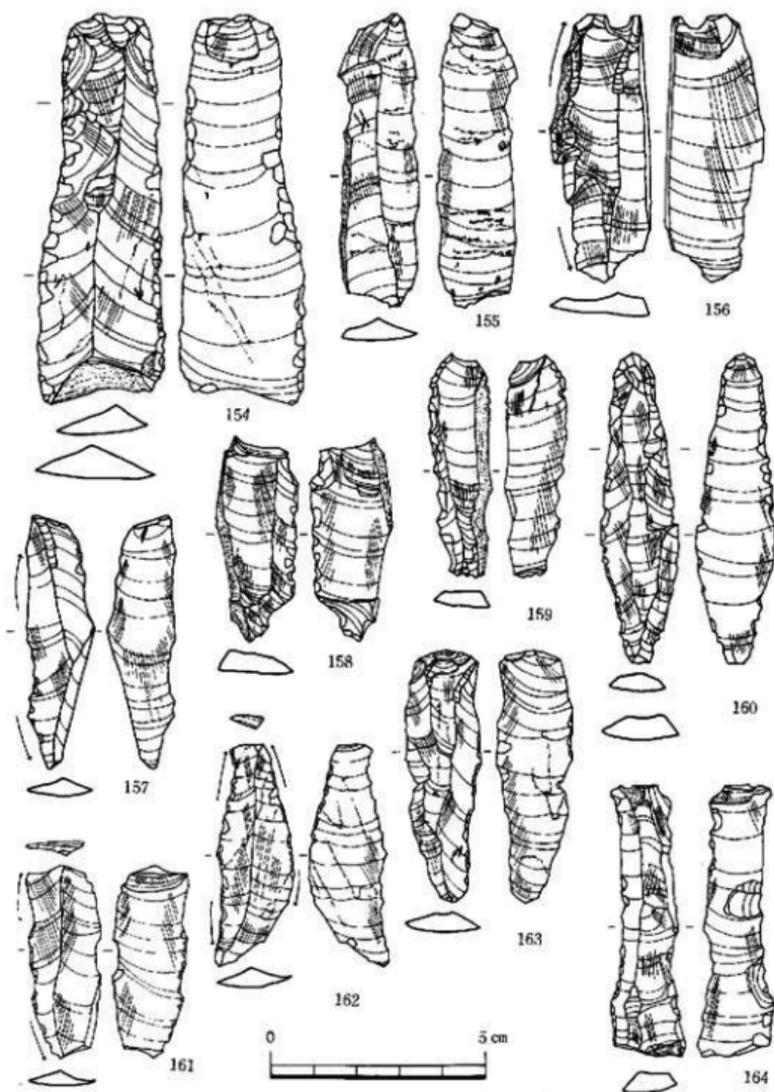


Fig. 46 刃器実測図—3 (縮尺 3/4)

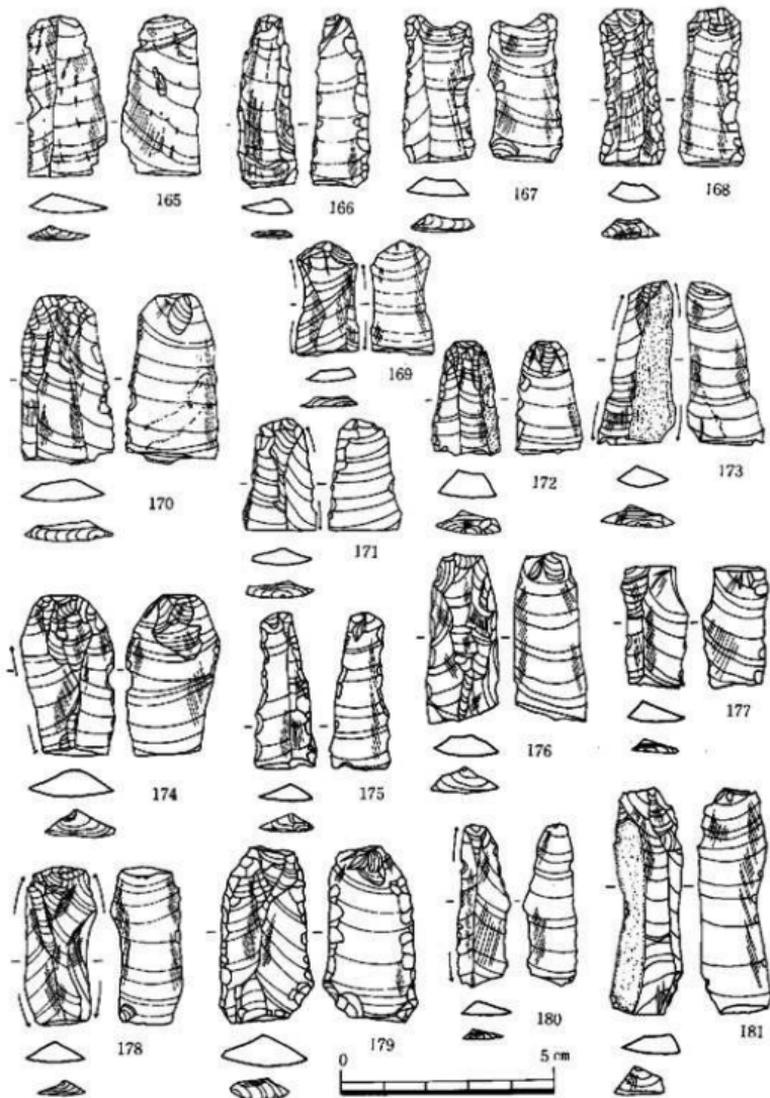


Fig. 47 刀器実測図—4 (縮尺 3/4)

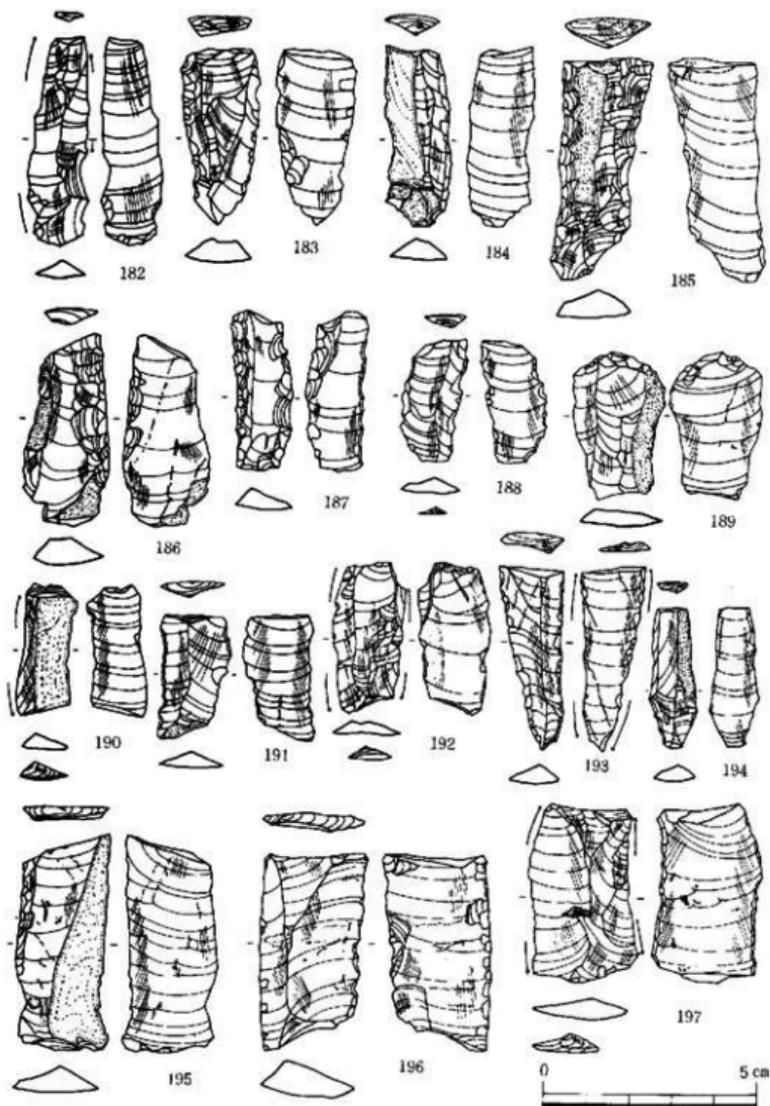


Fig. 48 刃器尖測圖一5 (縮尺 3/4)

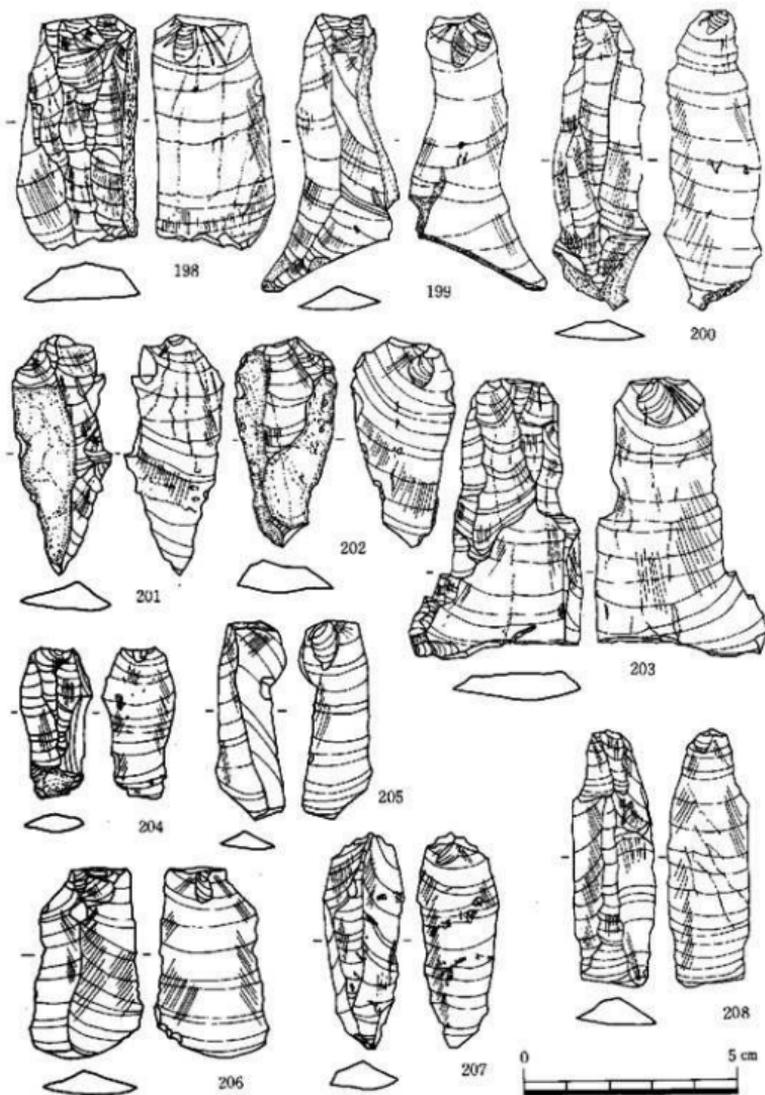


Fig. 49 万器実測図-6 (縮尺 3/4)

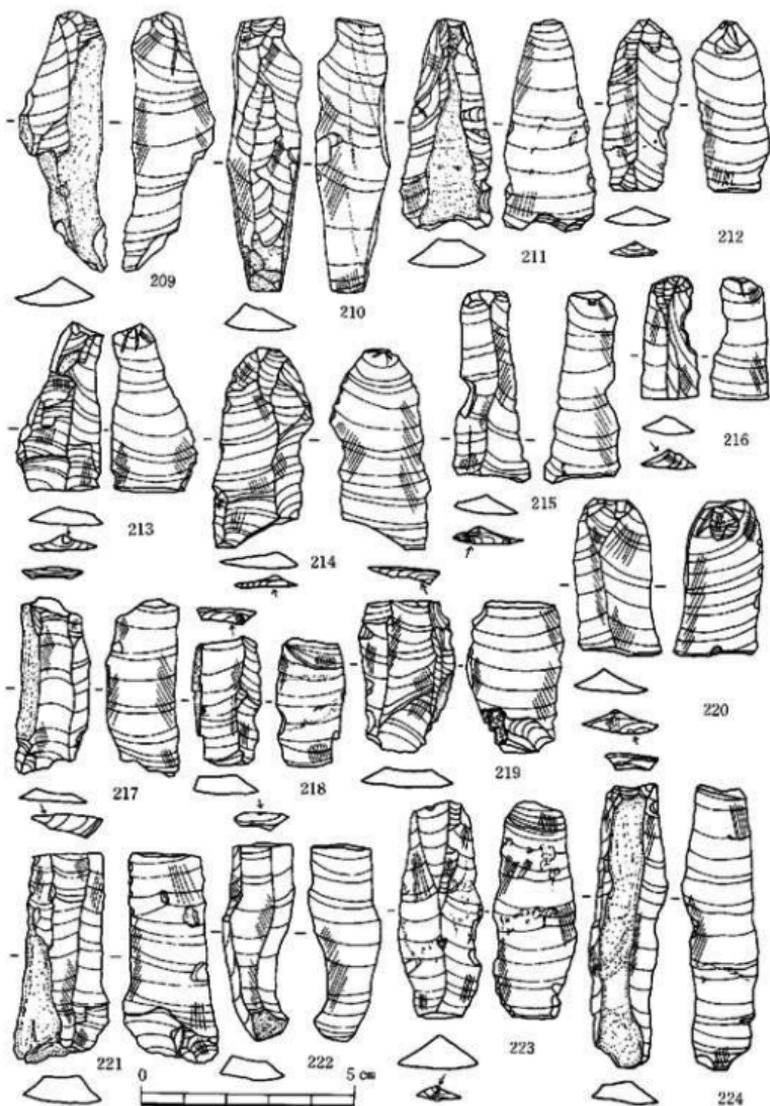


Fig. 50 刃器実測図-7 (縮尺 3/4)

打面である。181 表面に自然面を残す剥片で、打面は平坦な調整打面。剥離は上・下二方向あり、打面が二面認められる。他と同様に側辺部には使用痕が残っている。182 打面側は折断され、末端部と側辺に使用痕が残る。183 やや厚手の剥片で打面側は折断され側辺部には使用痕が残る。184 表面に自然面を残し打面側は折断されている。やはり側辺には使用痕が残る。185 厚手の剥片の打面側を折断した石器で側辺部には二次加工を施す。186 末端は肥厚し自然面が残る。打面側は折断され側辺には二次加工が施されている。187 パテナの進んだ剥片に片面にのみ二次加工が施されている。また打面側は二次加工で除去。188 打面側の折断された剥片で側辺部に使用痕。189 末端部が折断されしかも打面側は二次加工が施されている。側辺部に使用痕がある。190 表面に自然面が残る末端部が折断された剥片で使用痕が残る。191 打面側は折断され末端部に自然面を残す。側辺に使用痕がある。192 打面は自然面で両側辺に使用痕が著しく残る。193 先細りした剥片で打面側は折断、側辺部には二次加工と使用痕が顕著。194 打面側が折断された剥片で表面に自然面を残す。195～197 は他にくらべ大形の剥片で打面側は折断か、もしくは二次加工がなされ側辺には二次加工がなされ、側辺には二次加工や使用痕が認められる。

### Ⅲ類 (198～224)

Ⅱ類と同様な形態となるが、剥片自体が利器として使用されたか、あるいは他の剥片石器の素材となる可能性をもつものをⅢ類とした。Ⅱ類と同様に打面～末端までのもの、二次加工や折断により打面側もしくは末端部が除去されているものに細分できる。

198は厚手の剥片で側辺部と末端に自然面を残す。打面は平坦な調整打面である。199は側辺部と末端に自然面が残る、石核の端の剥片であると推定できる。黒曜石は透明感がなく灰黒色をなす、これは針尾烏産のものと考えられる。打面は平坦な調整打面で打角は小さい。200の打面は平坦な調整打面で、剥片の末端部が肥厚し自然面である。199・200から原石に自然面があるものを使用した事と石核の大きさを知る上での好資料となる。201・202は表面に自然面を残し、他と比較すると厚手の剥片である。201は先細りとなり不純物の多い黒曜石である。いずれにしてもこの2点は石核より早い時期に剥離されたものであろう。203 打面側は平坦な調整打面で末端部は肥厚し幅広となる。これは剥片取卸時の失敗のためであろうか。204は剥片の末端部に自然面を残す。この剥片の打面、打角はともに小さい。205の打面は自然面で剥離は上・下二方向となっている。206 調整された平坦打面をもつ剥片でやや幅広となる。207の剥片は気泡が多く混った黒曜石で、断面もやや厚みをもつ。打面側は平坦な調整打面で末端部になぜか自然面を残す。剥離方向は上方からだけである。208の打面は小さな調整打面で、剥片の剥離方向は上・下二方向となり断面形はやや厚みをもつ。黒曜石には不純物が多く混っている。209は剥片の最大幅が中位にあり、表面には自然面が残る。先細りする形状を呈

している。201・202と同様に早い時期に石核から剥取されたと考えられるものである。210・211は角の小さな剥片で、いずれも表面に自然面を残す。剥離方向は上方からだけである。212は平坦な調整打面をもつ剥片で末端は折断されている。213の剥片は最大幅が下位にあり、末端部が折断されている。表面にわずかに自然面を残す。214はやや広めの剥片で、打面は平坦な調整打面。215の打面は平坦で調整打面である。最大幅は剥片の下部。216は末端が折断された剥片で打角は小さい。剥離方向は上方からのみである。217は側辺部に自然面を残し、打面側と末端部が折断されている。218は気泡の混った黒曜石製の剥片で打面側は折断によりカットされている。219は表面にわずかに自然面を残した剥片で最大幅は下位にある。打面側は折断。220の剥離方向は上方からだけで、末端に折断されている。打面は平坦な調整打面である。221は打面側が折断によりカットされたもので表面には自然面を残している。222も221と同様に打面側が折断されている。末端に自然面を残し、剥片の最大幅は中位にある。223の剥片は気泡の多く混ったもので、剥離方向は上方からと一定している。打面側は折断によるカットがなされている。224の剥片は打面から末端までが均等性をもつ幅をなす。さらに剥片の表面、しかも中央部に自然面を残している。打面側は折断により除去。

#### 剥片 (Fig. 51-225~238)

J-10 i 地点で「縦長剥片」という名称を用いたが、刃器や縦長剥片を素材にした石器類と混同しやすいので、ここで剥片と訂正しておきたい。これらは全般的にすづまりで幅広い形状を呈したもので形態も不揃いである。刃器は縦に長く整った剥片で形態的に区別できる。刃器同様に使用痕の認められる剥片類もある事から、製作上あるいは使用目的に明らかに差異があるものと考えられる。これら剥片の剥離方向は、刃器がある一定性の剥離を持っているにもかかわらず剥離方向が一方のものとして上・下・横位からの三方向をもつものがあり、一定はしていない、しかし總体的に刃器とは差異があるにもかかわらず、打面部を折断や二次加工により除去しているものも数点存在する。平坦な調整打面をもつものは225・226・228・229・230・231・233・234・235・237で、236は平坦な自然面を打面としている。225は姫島産の黒曜石で側辺部には使用痕が認められる。同様に使用痕の認められるものは、227・228・234・235・236・238である。前述したごとく刃器の調整同様に227・232・238の打面部は折断や二次加工により除去されている。J-10 i 地点の剥片には表面に自然面を残したものが割に多く認められたが、今回は少ない出土であった。しかしL-11C地点は四箇東遺跡の一部分と考えられるため速断はできないので、四箇東遺跡報告の際に全資料を検討して見なければならぬと考えている。237はやや大きめの幅広い剥片であるが末端部の側辺は火を受けた痕跡が明確に残っている。図示しなかった中にも？点火を受けた痕跡をもつものがある。

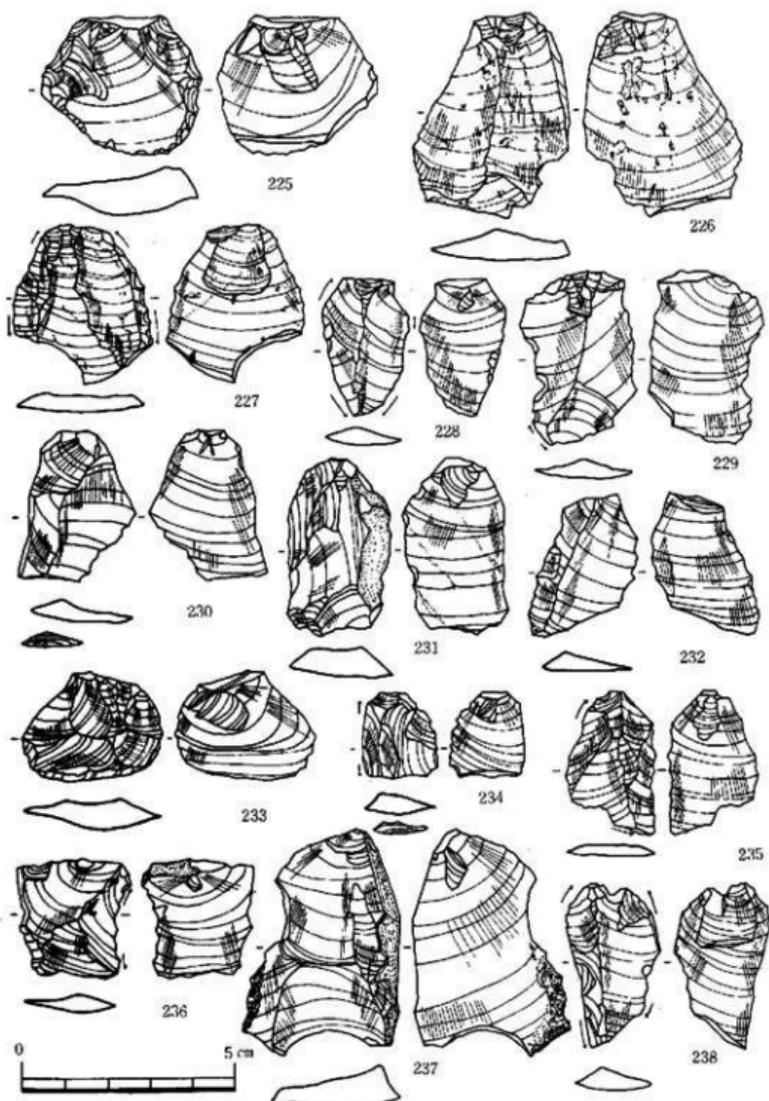


Fig. 51 銅片尖刺図 (縮尺 3/4)

## 石匙・削器・掻器 (Fig. 52~54—239~261, PL. 23, 24)

石匙とは一般につまみ状の小突起をもつ打製石器を言うがここでは削器や掻器と区別して分類した。239 はやや幅広のサヌカイト製削片を使用したもので、打面側に粗い調整で挿入部を形成し、削片の末端側を片面から連続的に剥離し刃部を形成している。表面に大きなバルバスカを残している。また側辺の一部に自然面も残し、この素材の削片が自然面をもつ原石から剥離された事が窺える。240 は横幅の削片を素材にしたもので、239 同様に打面側を挿入部としている。やはり挿入部の調整は粗雑で粗い、末端は両面から剥離を施して刃部としている。241 は前述の横型石匙とは形態を異にする縦型の石匙である。やや幅広の縦長削片を素材にして末端部に連続的な剥離を施し刃部形成している。打面側は平坦な調整打面でこちらをつまみ側として挿入部をつくり出し表面には横方向の剥離痕が認められる。

## 削器・掻器 (243~261)

243 横長削片を素材にしたもので、削片の自然面や打面・バルバスカを残し末端部に片面からのみ二次加工を連続的に施している。調整剥離を施してない裏面は削片自体の鋭利さを残す。表面は丁寧な研磨という程ではないが磨かれている。244 はやはり幅広の削片を素材にし、削片の末端部に両面から二次加工を連続的に施して刃部としている。打面は平坦な自然面である。曲線をもつ側辺部には片面からのみ二次加工を加えている。245 は打面と側辺部に自然面を残している。打面は上・下二方向にある。削片の末端部は両面から連続的に剥離調整を加え刃部形成している。246 は厚手の削片を素材にしたやや大形の削器で側辺部に両面から連続的に二次加工を施して刃部形成している。表面には自然面を残す。247 は246と同様な長方形に近い形態を呈するが、246にくらべやや小ぶりである。側辺部には自然面を残し、打面は平坦な調整打面で大剥離面の中央部に大きくバルバスカを残している。248 の削片はやや不整形なものが素材となっている。側辺に自然面を残す。二次加工はやはり連続的に両側面に施し刃部形成している。加工調整なされた表面には、意図的になされたのか磨って高い部分を取りのぞいた痕跡が窺える。しかしこれは使用時のものか石器製作途中のものかは現在のところ判別し難い。249 の素材である削片は厚手のもので表面には自然面を残している。刃部調整は長辺に沿って行なわれ、両面を粗いが連続的に剥離している。また短軸の側辺部には使用痕も認められる。250 も249 同様にやや厚手の削片な素材となっている。削片は平坦な調整打面をもち、バルバスカなどを裏面に残している。表面の側辺部には大きく自然面を残し調整は施さず、素材のままである。刃部となる側辺部には粗いが連続的な剥離をもって刃部形成している。251 は大形の幅広な削片を利用した削器で、バルバスカを大きく残す。打面は平坦な調整打面で打角は小さい。削片の末端部には調整を施さず、打面に近い長軸部分に局部的に両面から二次加工を施している。252 は自然面を打面とする横長削片を素材にしたもので、

片面からのみ細かい二次加工を施し刃部としている。これは剥片そのものの鋭利さを生かした為であろう。253は黒曜石製の縦長剥片を素材にした、コーンケープスクレイパーである。打面側に両面から丁寧な剝離を施し、彎曲した刃部を形成している。254は素材となった剥片の打面側に両面から、末端部は片面から調整を行なったもの。これはあるいは大形のサイド・ブレイドの可能性もあるが大きさから削器とした。255は比較的厚手の剥片を素材としたもので、打面は平坦な調整打面をもつ。長軸の側辺部に両面から粗く調整を局部的に施し刃部としている。256は打面が平坦な自然面をもつやや厚手の剥片を素材にし、長軸の側辺部に片面から二次加工を加えている。257・259は縦長剥片を素材として側辺部には両面あるいは片面から調整剝離を施したもの。257は打点が残る。259は打面側に二次加工を加え打面等を除去している。258の素材である剥片は平坦な調整打面をもち、バルバスクアーを残す。側辺部には使用痕が認められる。260は先細りのやや厚手の剥片を素材にし、末端部に二次加工を加えたもの。261はやはり厚手の剥片を素材にしたもので側辺部に二次加工が認められる。剥片の末端は斜めに折り取られている。243~252はサヌカイト、253~261は黒曜石製のものである。

#### サヌカイト製剥片石器 (Fig. 55・262~269)

サヌカイト製の剥片に使用痕などの認められる石器類をサヌカイト製剥片石器として削器・掻器と区別し分類した。この中には削器・掻器の可能性のあるものも認められるが、折断によるカット調整などを考慮し、サヌカイト製剥片石器として分類した。

262は大形の縦長剥片が素材で、打面・末端に自然面を残す。末端に近い部分を両側辺から二次加工を施して抉入部を形成している。同様な形態をもつものを前回“つまみ型石器”の一形態のバリエーションとして扱ったが、それよりも大形でサヌカイト質である点からここに分類した。平坦な自然面を打面とする縦長剥片を素材とする263は、表面に自然面を残し剝離方向は横・下位で不整形を呈している。264 整った縦長剥片が素材となって、両側辺に使用痕が認められる。打面部は平坦な自然面で末端部にも自然面を残し、石核の大きさが容易に知られる。厚手の剥片が素材になった265は表面に自然面を残し、粗い二次加工を側辺部に施している。266 平坦な調整打面を素材にした剥片で一辺に両面から部分的に二次加工で調整を施している。267は剥片の両端が折断されたもので、両側辺に使用痕が認められる。268は平坦な調整打面をもつ剥片を素材にしたもので、素面に自然面を残す。二次加工は連続的に行ない刃部形成をなしている。269の素材となった剥片は打面に自然面の平坦打面をもち末端部を折断によりカットし整形している。剥片の側面には自然面を残すため、この剥片は石核から早い時期に剝離されたものであることが推察できる。刃部部分には両面から粗い剝離を連続的に施している。全般的に共通して言えることは、比較的大形の剥片であるため刃部形成すると刃先が急角度に近いものとなっている。

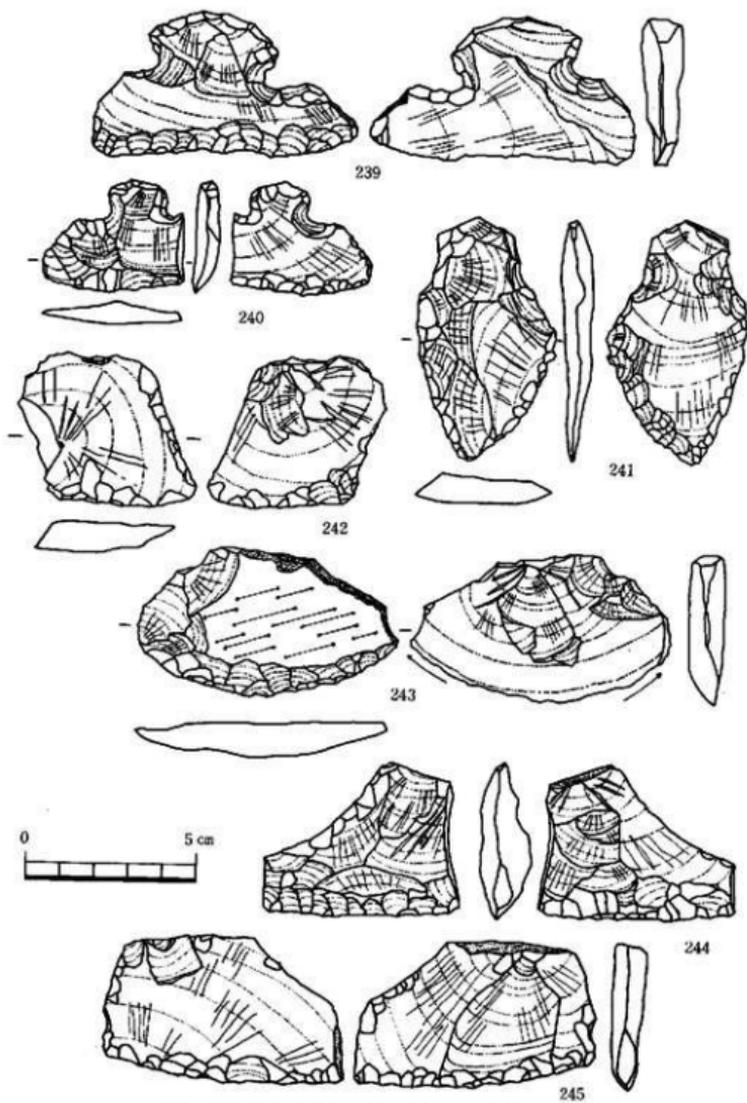


Fig. 52 石匙, 削器, 搖器実測図一 (縮尺 3/5)

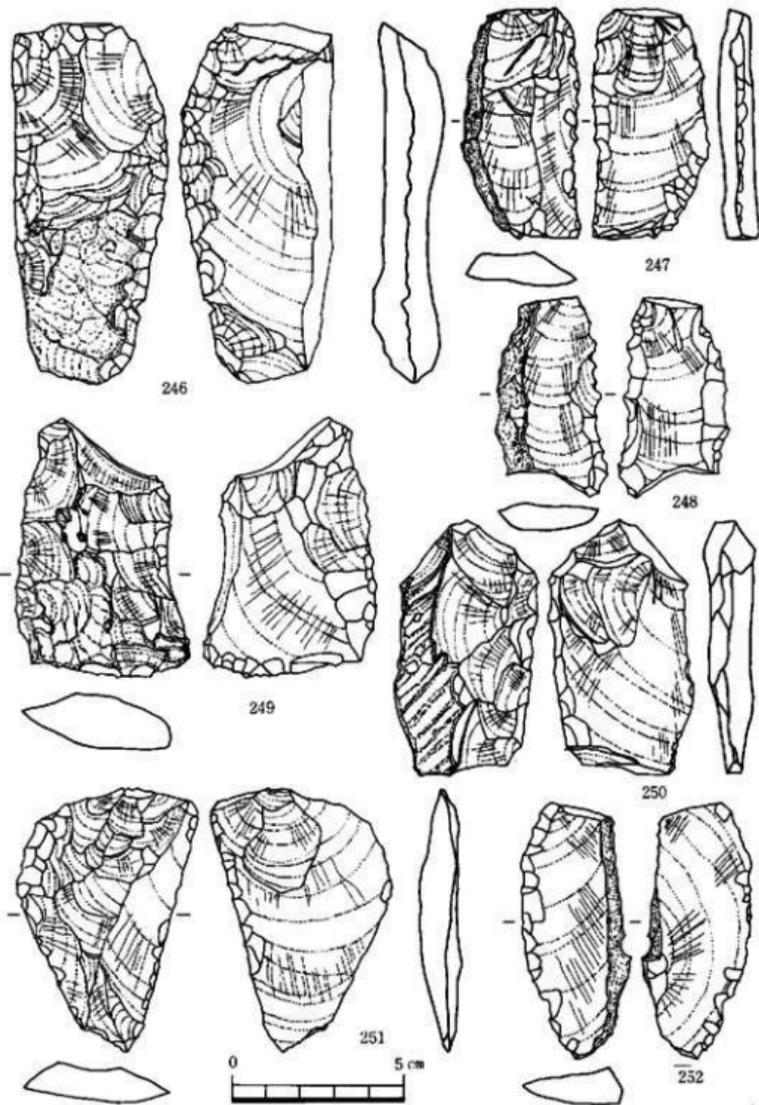


Fig. 53 削器，掻器実測図—2 (縮尺 3/5)

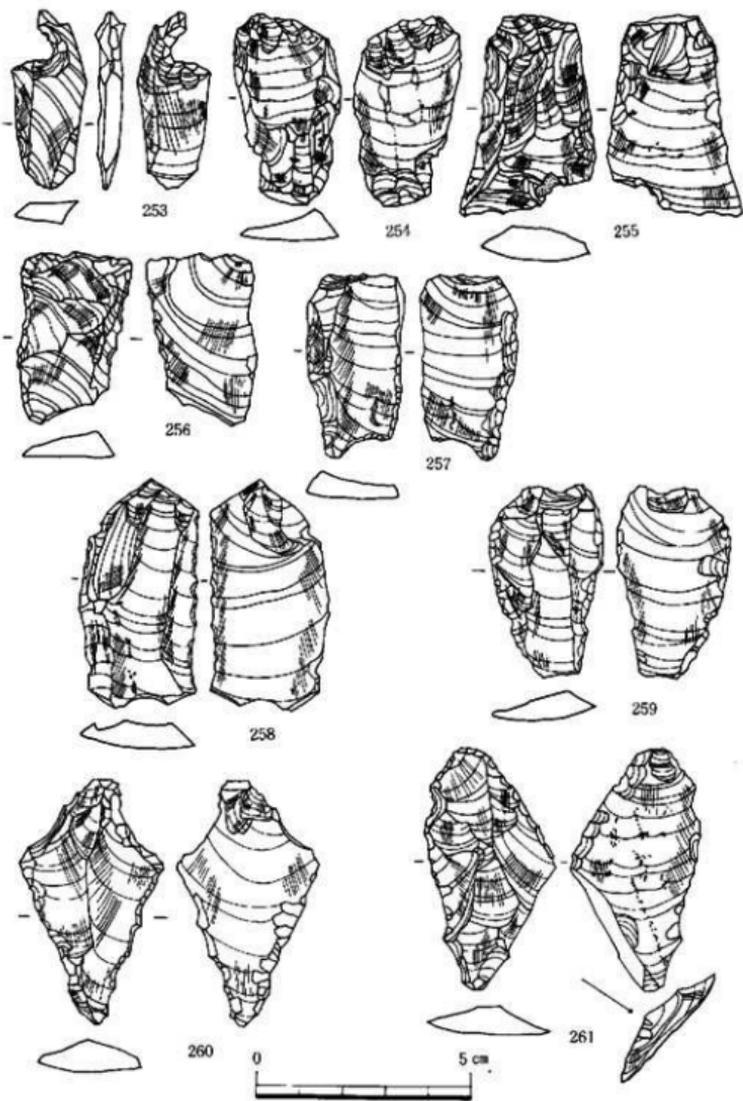


Fig. 54 削器，椽梁実測図-3 (縮尺 3/4)

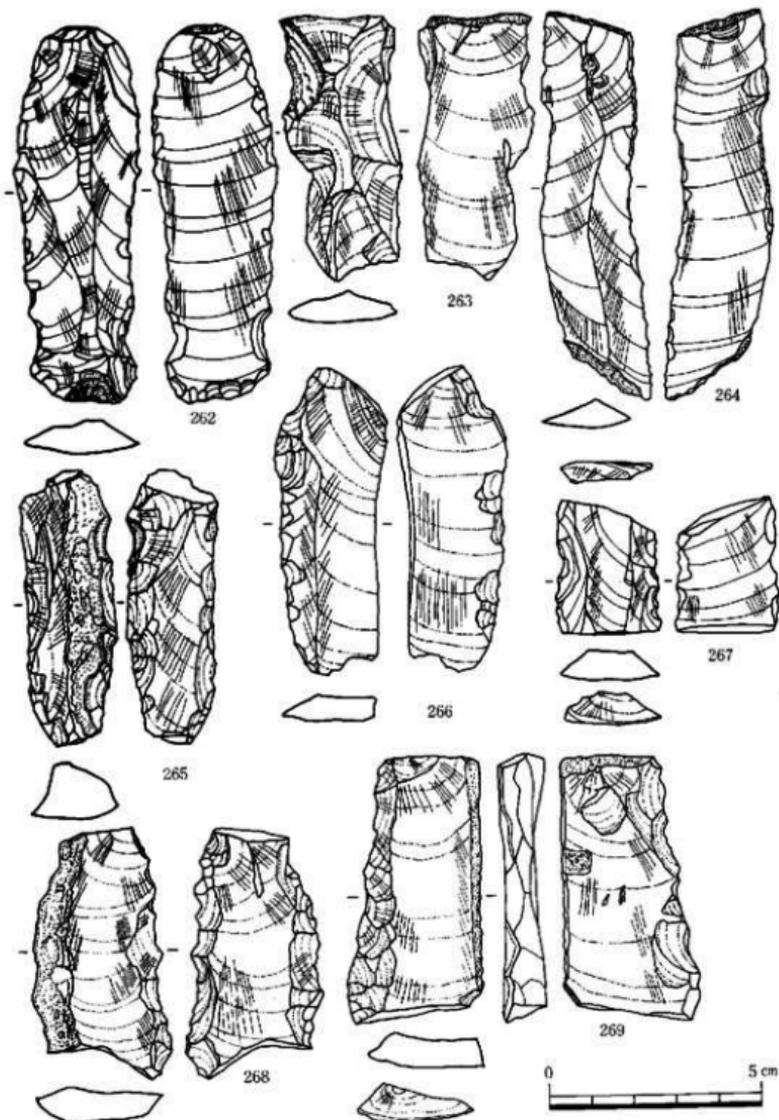


Fig. 55 サヌカイト製剥片石器実測図 (縮尺 3/4)

## 打製石斧・打製石庖丁 (Fig. 56・270~277, PL. 25)

270 は比較的大形で厚手の剥片を素材にした短冊型の打製石斧である。剥片の側辺部に両面から剝離を施し刃部形成をしている。素材の側辺が彎曲している為、刃部が曲線している。打面側は節理面をそのまま残している。271 は素材の全周に剝離調整を施したもので、長方形に近い形状をなす。側面は扁平である。272 は素材の一部に節理面を残す剥片を利用した石斧で、長軸の側辺と刃部部分に大きい連続的な剝離調整を施している。特に刃部部分は入念で、この為基部から刃先にかけて鋭角に近くなり、急角度の刃先を形成する。大きな剥片の割には側面側は扁平である。273 は厚手で大きな剥片を素材にしたもの。しかし刃部部分は欠失している。剥片の打面側を石斧の基端としているが、剝離調整を加える事により大部分を除去しているが、僅かに平坦打面の痕跡を残す。これも側辺部の調整は側辺にかたよっている。分銅型を呈する 274 はやや薄手の剥片を素材にしたものである。打面側に近い部分の両側辺に両面もしくは片面から剝離を加え挿入部を形成。しかし挿入は浅い。刃部部分も両面から細い剝離を加えて形を整えている。しかし急角度の刃先ではなく薄い直刃状のものとなる。さらには表裏面ともに研磨した痕跡がある。これは剥片自体の凹凸をなくし一定の厚みを作り出したものか、使用時に関するものか判別がつかない。275 やはり大形で厚みのある剥片を利用し、打面側を基端としている。刃部は欠損。両側辺を両面から剝離している。打面部分も二次加工を加え除去。276 は他の石斧に比べ、やや小さめの石斧である。打面側は片面から連続的に剝離を加え打点等を除去している。刃部部分も片面からの剝離により角度のつく刃先に仕上げている。277 は凝灰岩製で節理面の残る剥片を素材として長軸の両辺を両面から剝離し、刃部としている。調整は片面だけが入念な為、刃先は鋭利となる。

## 磨製石斧 (Fig. 57~58-278~296, PL. 26)

278 は小形の局部磨製石斧である。刃部部分は極めて丁寧な研磨が施されている。基部も僅かに研磨されているが粗雑。さらに裏面の基部部分は大きく剝離されたままで研磨にいたっていない。基端は欠失して形状は不明である。279 は安山岩の剥片を利用したものであるが、側辺と刃部部分にのみ研磨を施している。もう一方の側辺部は粗い剝離で調整したままで研磨はなされていない。通常石斧の形状はなせず、このままで使用されたものであろう。280 はやはり小形である。刃部・基部とも全面にわたって研磨。さらに基端部は研磨され平坦となっている。281 は研磨部分が剝落し、僅かに磨製石斧の名ごりをとどめる。基部から基端にかけて欠失している為、全体の形状・大きさは不明である。282 は刃部や基端部が僅かに欠損している。研磨部分は大きく剝落して部分的に磨製石斧の痕跡をとどめる。283 の刃部は使用時あるいは製作途上に欠けたのか、再度研磨を施して刃部を形成している。この為断面に稜がつく刃部と基端部は研磨が丁寧である。基端部も刃部同様に鋭利となる。基部の研磨は刃部部分等

より雑である。284は刃部に丁寧な研磨を施した安山岩製の石斧である。基端から基部にかけては剥離面が大部分を占めている。これは磨製部分が剥離した為かと考えられるが、石斧自体のパテナあるいは研磨と剥離面の観察から局部磨製石斧としておきたい。285の刃部は僅かに欠けているが小形の石斧である。両面とも全体的に研磨がゆきとどいている。基端部は平坦に近く研磨。286は蛇紋岩製のやや小形の磨製石斧である。基端部と刃部部分が欠損している。片面の研磨は丁寧だが、もう片面は粗雑で素材の剥離を僅かに残している。287の刃部部分は欠損し、研磨部分も大きく剥落。しかし部分的に磨製部分を残し、磨製石斧の痕跡をとどめている。288は自然礫の形状をそのまま生かして部分的に研磨を施し磨製石斧としたもので、刃部・基端部は欠損している。他の石斧に比較すると細長い形状だが、断面形は楕円形で厚い。289は小形の安山岩製の石斧である。刃部部分に研磨の痕跡をとどめるが、基部部分の研磨部分は大きく剥落している。290は刃部部分の欠失した石斧。他の石斧に比較するとやや薄手。基端部分は平坦に研磨されている。基部部分の研磨が一部剥落しているが、すべて丁寧である。291も部分的に研磨が剥落している。刃部部分の両端が欠損するが、基端部から刃部までやや細長い形状を呈する。研磨は刃部のみ丁寧だが他は粗雑である。292は刃部が欠損している石斧である。研磨は両面ともに丁寧、しかし形状はやや不整形をなすが、これは素材となった礫の自然の形状を生かした為と考えられる。293は292と同様に刃部の欠損した石斧である。基端部が尖る形状を呈し、他の石斧とは形態的に異なる。調整は片面の研磨が部分的に剥落しているが、わりに丁寧である。294は両面ともに丁寧な研磨で作られた石斧である。刃部部分から基部にかけては使用時あるいは製作途上に一度欠損している。しかしその後改めて研磨調整を施している痕跡が認められる。そのために断面形は階段上を呈する。基端部はやや斜めの形状となっている。296はやはり刃部が欠損している。石斧の表面観は粗雑で、素材の凹凸のある形状をそのままにして研磨調整している。以上述べてきた石斧は磨製石斧・打製石斧とに分類される。さらに磨製石斧の内でも全磨製・局部磨製(半磨製)とに分けられるが大別のみでとどめた。石器の組成で述べた如く製片石器の割合が高く、石斧類の出土の割合は低い。しかし30点近く出土した石斧の中でも20点の磨製石斧の出土は興味深い。この様な現象はJ-10地点でも同様であった。縄文後期の台地上にある遺跡では打製石斧の出土量は磨製石斧よりまさる。ほぼ同時期に属する四箇遺跡周辺では、この現象と対照的で非常に興味深いものとして捉えらる。今後、四箇東遺跡あるいは四箇遺跡の報告の中で、さらに検討しなければならない問題としてあげておきたい。

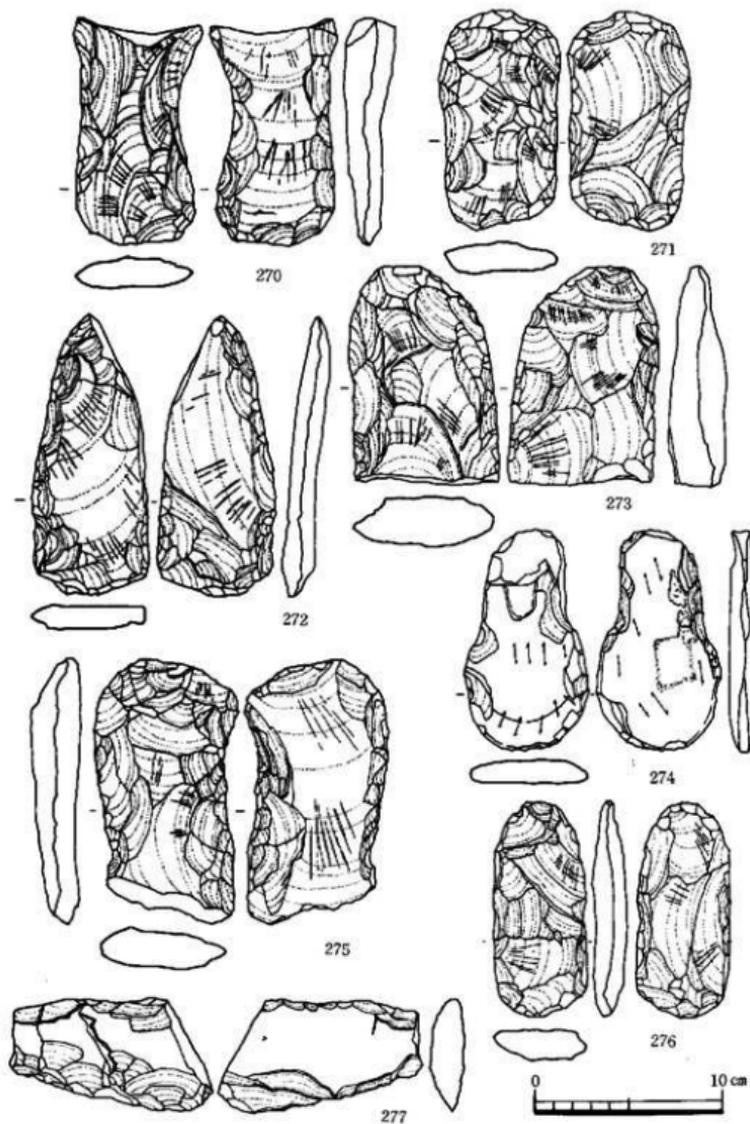


Fig. 56 打製石斧，打製石楔丁夾面圖（縮尺 1/3）

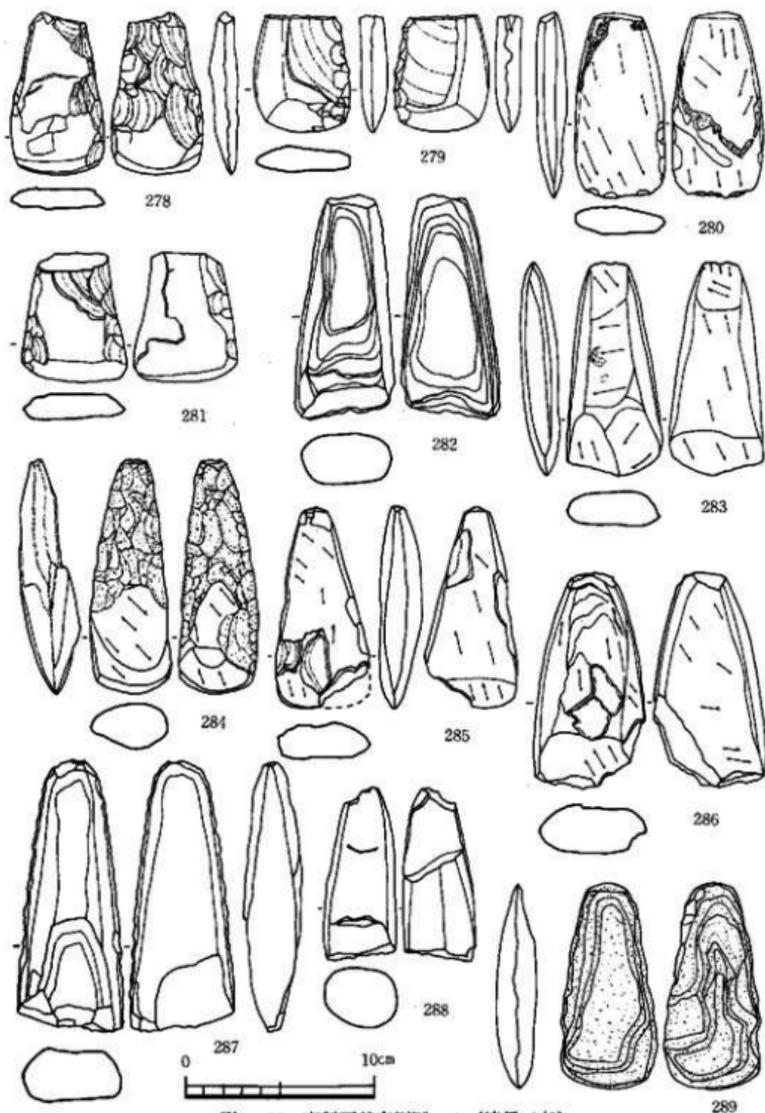


Fig. 57 磨製石芥夾圖一 (縮尺 1/3)

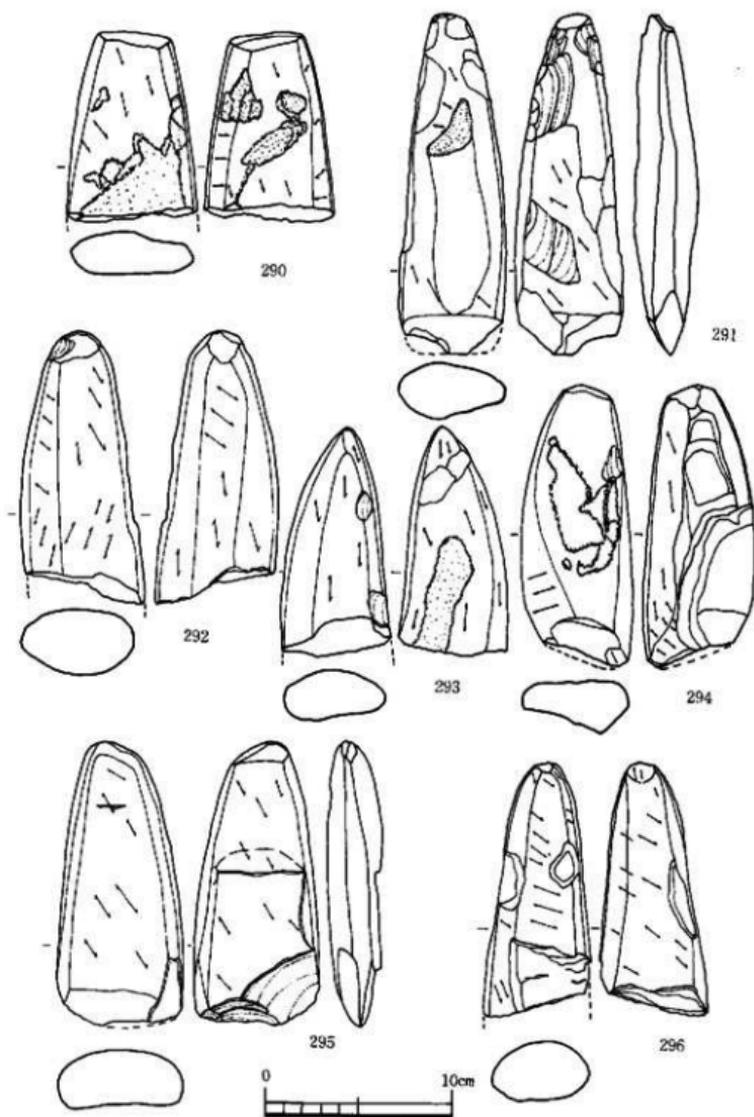


Fig. 58 磨製石斧実測圖—2 (縮尺 1/3)

## 磨石・石製円盤 (Fig. 59—297—305, PL. 27)

調理用具として石皿と一体のものであるが、J—10 $\delta$ 地点に比較すると多く出土した。いずれも自然礫を素材として使用されている。297は凝灰岩製のもので、片面に使用頻度の著しい磨った痕跡が認められる。しかし他の面には敲打したと考えられる痕跡が認められ、磨石と敲石の用途を兼ねそなえたものであろう。298花崗岩製の扁平な自然礫を素材にしたもので、表裏面ともに使用頻度が著しい。部分的に欠失しているが円礫であろう。299硬質砂岩製のもので断面も丸をもった円礫が用いられているが、使用された面の表裏面には敲打痕のみが残る。石器自体の周囲が部分的に磨りへっている所から、主に敲石としての用途をもち、使用度は低いが、一部では磨石としても使用されたものである。300花崗岩製の扁平な円礫を使用した磨石で半分欠失しているが、楕円形を呈していたと考えられる。側面と表裏面の後部分には磨った痕跡が認められる。301扁平な安山岩を使用した磨石で表面の稜線部分には著しく磨った痕が認められるが、平坦な表裏面の中心部には敲打痕があり、297・299と同様に敲石と磨石の用途を兼ねそなえた石器であると考えられる。302花崗岩製の自然礫を用いた磨石である。半分欠失しているが表裏面は平坦となり、著しく使用した痕跡が認められる。形態的には297・298・301のように形が整ってはいなく自然礫をそのまま利用したものである。

石製円盤 これらは次の項で述べる317・318・319と同様に用途は明確にされていないもので、総体的に扁平な円礫を素材にしている。303は硬質砂岩製の扁平な礫を素材にしたもので周囲を部分的に粗く打ちかいて形状を整えている。さらには表面を僅かだが磨いて平坦にしている。304全周を打ちかくことにより形状を円盤状に整えたものである。表面はミガキや削りなどの調整はなく素材の扁平な安山岩をそのまま利用している。305扁平な凝灰岩の周囲を打ちかいて円盤状にしているもので、表裏面ともに磨いた痕跡が認められる。

## 石皿 (Fig. 60—306—309, Fig. 61—310, PL. 28)

今回出土したものは比較的大型なものが多い。306半分以上欠失している為、形状は不明である。花崗岩製のもので表面は使用頻度が著しく凹んでいる。307花崗岩製の大型な素材を利用しているもの。半分は欠失しているが残っている側面から推定すると長方形もしくは方形の形状を呈していたと考えられる。306に比較すると使用頻度は低く表面の凹みは程んど認められない。308僅かに側面に欠損部分が認められるが程んど元来の形状を保っているものと考えられ、長方形を呈する石皿である。使用面は一面で使用頻度は低い。309硬質砂岩製の火形なもので使用面は表裏面、側面と3面もある。欠失している為元来の形状は不明である。310扁平な花崗岩を用いたもので亀の甲羅状を呈す。断面形はゆるい舟底状を呈して凹んだ面が使用されたと考えられる。花崗岩本来の凹凸のある器表面が全面に残り周囲もところどころ失なわれているが、製作上あるいは使用上のものか判別がつかない。使用され

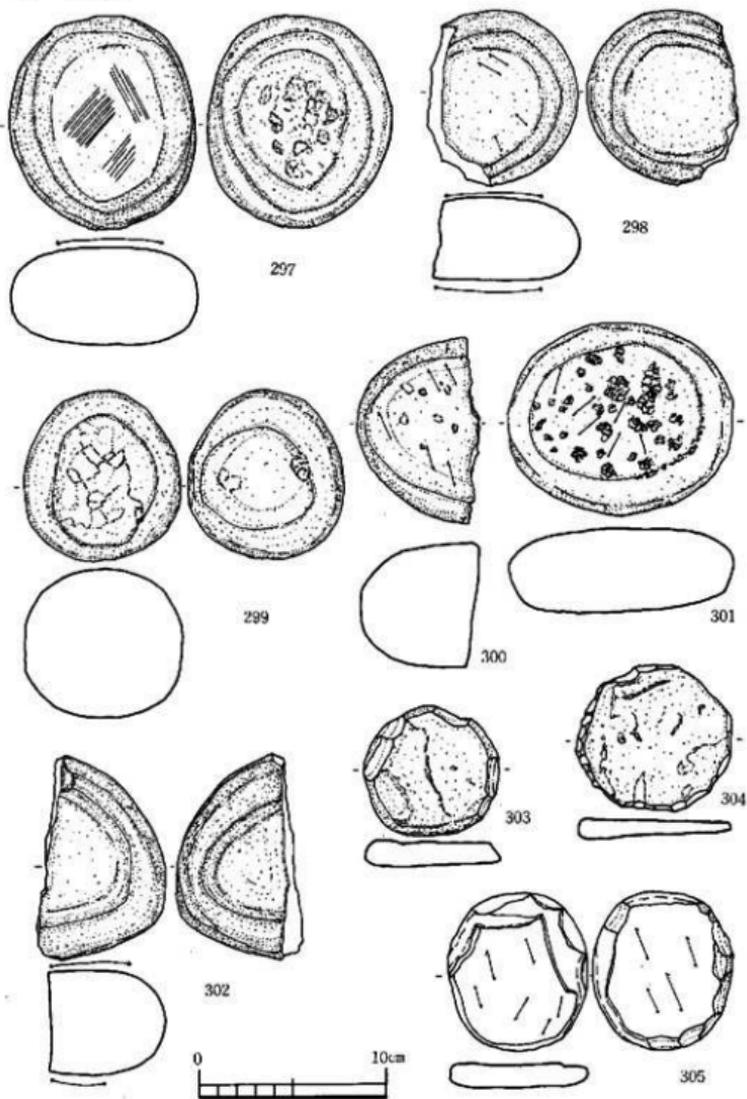


Fig. 59 磨石, 石製円盤実測図 (縮尺 1/3)

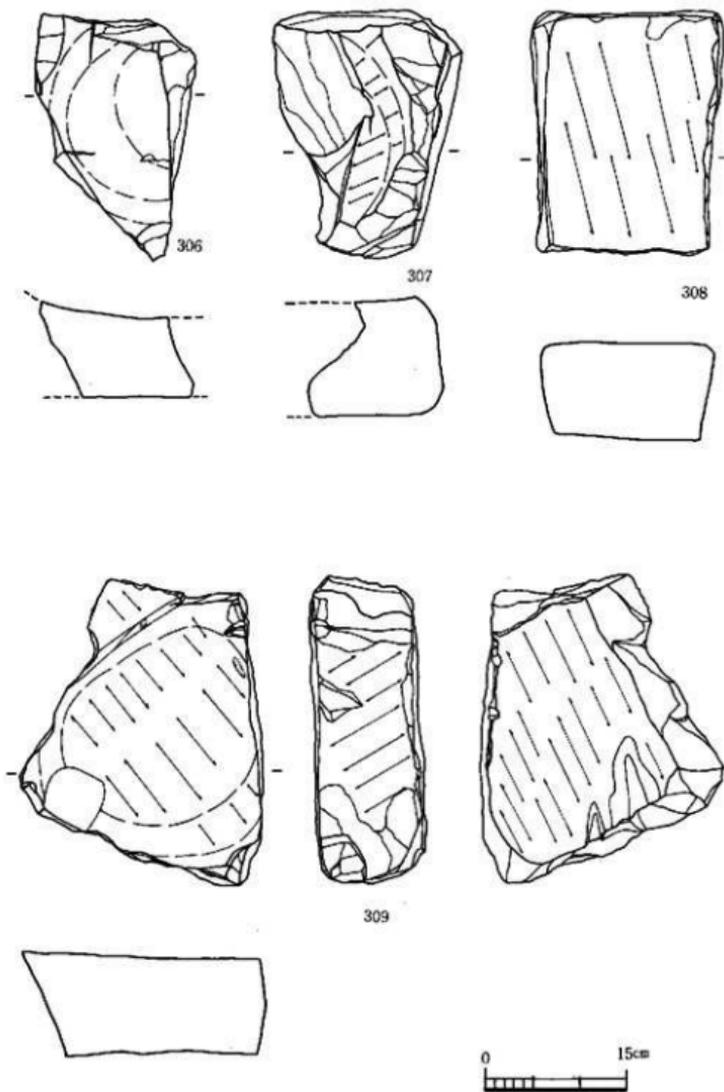


Fig. 60 石皿実測図--1 (縮尺 1/6)

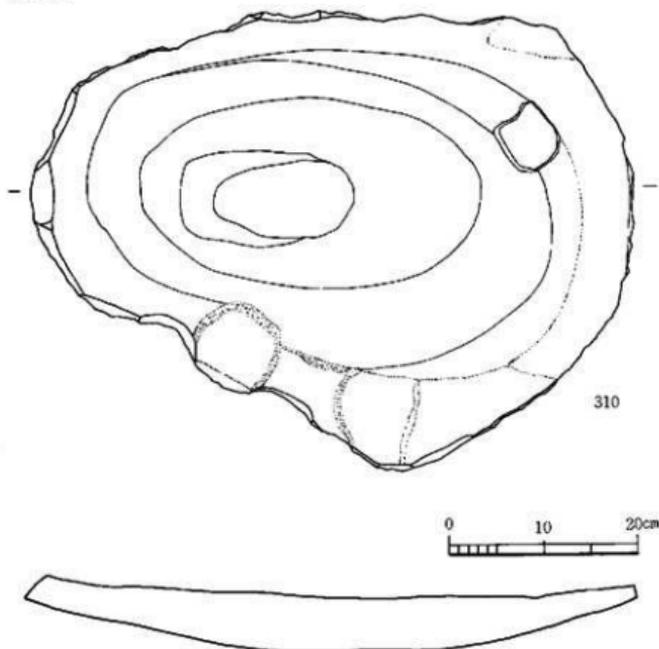


Fig. 61 石皿実測図-2 (縮尺 1/6)

たと考えられる面の僅かな部分にのみ研磨痕が認められるが顕著ではない。同様な形状・石材の出土も他に2点程あったが、これらには自然面のままで使用された可能性をもつものはなかった。図示しなかったものも多くあるが大形のは9点近くで、他は破損の著しい小さなものが10点近くあった。これらはすべて石皿として取り扱ったが、大部分は砥石と用途を兼ねてなっていたかも知れない。

#### 十字型石器・磨製石器・石錘・勾玉 (Fig. 62-311~321, PL. 29)

後期に出現する特徴的な石器で用途等は不明のものである。石器自体は磨製のもので打製のものがある。311は滑石製のもので部分的に打ちかき、あるいは削りによって形状を整えているが、一本は欠失している。312は硬質砂岩製のもので周囲を打ちかいて作製している。さらに部分的に削りを施している。313他に比較するとやや小さな石器で周囲を打ちかき事によって大まかに形を整えその後削りや研磨を施して仕上げている。石材は凝灰岩である。314は凝灰岩製のもので打ちかきによって形を整えている。くびれ部分は削りで調整している部分

もある。図示しなかった石器の中にも一応、十字型石器の変形として扱った石器があるが、これは両面からの剥離によって形状を整えているが突出部が三方にしかなく、あるいは他のくびれをもつ石器の可能性もある為、断定はできない。

315 硬質砂岩製の自然礫を素材にした有溝石器で溝は浅く楕円形を呈する。316 花崗岩の小礫を素材にしたもので上・下端を打ちかいて石鏢としている。

317・318・319 は粘板岩製の磨製石器であるが、三木とも頭部に削りによるくびれをつくり全体的には丁寧な研磨により形状を整えている。頭部と体部の境部分には緩く曲線をつけ明らかに境界をつけている。三木とも下部が欠失しているが、同様なものが出土した千里シビナ遺跡の石器から推定すると頭部状にくびれがあり、頭部と体部に境界をもち下部は直線的に終る石器と考えられる。これも出土は十字型石器と同様に西北九州の後期に限られ、用途は全く不明である。隣接する四箇東遺跡にも317と同様なものが出土している。

320 は硬玉製の勾玉である。素材となった硬玉は質は悪い。穿孔は両面からなされて全体的な研磨調整は丁寧である。片辺は曲線をもった介形状でもう一辺は直線的だが鋸歯状を呈する。321 はやや扁平な蛇紋岩を素材にした垂飾品である。懸垂用の孔は両面から穿孔されている。孔の両横と下部の三方に浅く切りこみをいれている。この溝状のものは紐を結ぶ際のスベリ止めと考えられる。孔の上部は欠失していて、使用途中あるいは穿孔中に失われたものか判別はむずかしい。320 と類似の出土例として三万田東原遺跡があるが石材は角閃岩製である。

#### 石核（残核）

図示しなかった石器の中に石核をあげることができる。多量の剥片鉄・つまみ型石器・刃器等が出土したが、これらの石核と思われるものは一点の出土もみなかった。石核として20点弱の残核があるが、いずれも図示できる様なものはない。これらに共通して言えることは打面調整を全く行わず、打面転位をしながら一見アトランダムに剥片剥取をしていることで、定形の剥片を剥取したとは考え難いものである。しかも石核の打面は1回の剥離でつくられた平坦打面もしくは自然面そのままの打面を使用している。先述のごとくL-11C地点は隣接する四箇東遺跡の一部と考えられる為、四箇東遺跡報告の際に補足していきたい。

注1 柳田純孝、渡辺和子「四箇馬辺遺跡調査報告書(2)」福岡市教育委員会1978

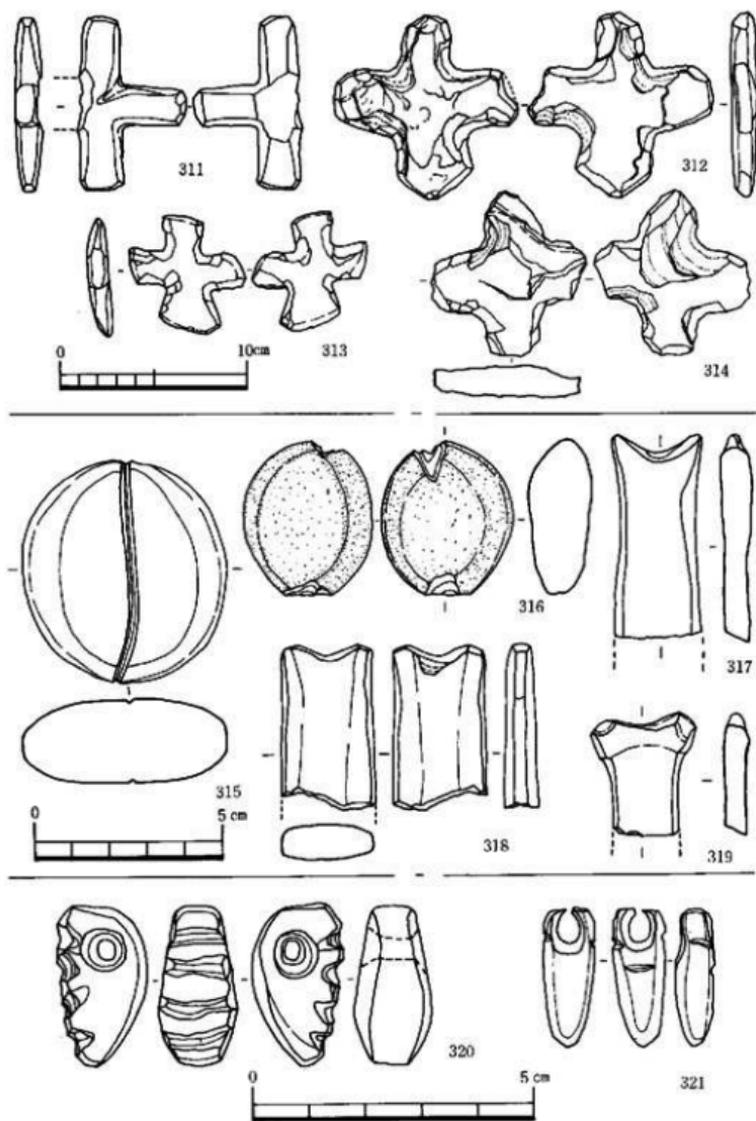


Fig. 62 十字型石器，磨製石器，石鏃，勾玉突測圖一（縮尺 1/3・2/3・1/1）

## IV ま と め

今年度発掘調査のL-11c地点は、四箇東遺跡の南側に位置している。四箇遺跡、四箇周辺遺跡には基盤の礫層が平坦ではなくかなり凹凸がある。この凸面を縄文時代前期から、生活面として利用し、なおかつ凹地を灌漑用水、水路として利用していたことを物語っている。凸面を微高地として利用しはじめたのは縄文時代後期で四箇遺跡A地点、四箇東遺跡等が知られている。四箇遺跡A地点をJ-10i地点の三万田Ⅰ・Ⅱ式を主に出土する時期と四箇東遺跡や今回のL-11c地点の三万田Ⅱ・Ⅲ式、特にⅢ式を主体に出土する時期に微高地の活用がなされたことは、早良平野独特の現象であろう。

今回の発掘調査の主な目的は、四箇東遺跡からつづく微高地上に遺構を検出する事であった。しかしながら期待はみごとに外れ、四箇東遺跡と同様に中央部に凹みを持ち、東西端に微高地が広がっていることが判明した。中央部の凹地はまだ南側へとつづくから取水場としての可能性が強い。

今回の調査で四箇東遺跡とL-11c地点は同一遺跡として捉えなければならないことが明確となり四箇東遺跡の報告が今だ刊行されていない段階で遺物、遺構、遺跡の性格を分析する事はさけない。また土器についても接合資料の検討を行う必要がある。

L-11c地点での事実報告を主にしてきたが、ここで問題となった点を上げてまとめとし、四箇東遺跡での報告時に検討課題としたい。

### 1. 三万田式土器の型式設定

三万田式土器の型式設定は、宮内氏が精製土器について四箇遺跡A地点、J-10i地点、四箇東遺跡の資料を紹介している。この中では精製土器の規定だけであり、粗製土器、高環形土器については資料不足の感がある。四箇遺跡、四箇周辺遺跡の中でも三万田式土器の形式設定を再考する必要がある。

### 2. 半精製土器の型式、名称の設定

器面調整がナデで終わっている無文土器の設定と名称設定である。精製土器とも粗製土器とも区別しにくい器種がある。分類の中で粗製土器の範中であつたり精製土器の範中にとらえられている場合がある。土器を細分する必要はないが、三万田式土器を理解する上でこの無文土器を設定しておく必要がある。

### 3. 全磨製石器の型式、名称設定

Fig. 62-317~319で図示した3点である。全面を研磨し、上端部に挟入部を持つこの石器

は4遺跡、7点出土している。現在の所3遺跡は低湿地である。機能、用途、形態などまったく不明である。

#### 4. 縄文時代後期における黒曜石製削片剥取技法と石核

縄文時代後期において黒曜石の縦長削片が多量に出土するにもかかわらず石核の出土例はほとんど認められない。技法的には一見旧石器時代の技法を思はせる剥取技法である。削片より見た石核の削片剥取技法の解明が必要である。

#### 5. 低湿地における縄文時代後期の遺跡について

四箇周辺の調査によって低湿地の遺跡のあり方が明らかになりつつある。特に微高地が各所に発見され、その微高地より縄文時代後期の三万田式土器が出土している。自然的環境等の条件を考えながら考察していく必要がある。

以上5つの問題点を上げたが、四箇A地点、四箇東遺跡の報告をふまえて、その中でふれることにしたい。



種類	P-K	P.L.-L	器形	器形	器高	口径	底径	口径	底径	色	裏	胎	土	備	考
Fig. 18 54	462		樽型土器	洗鉢型						内外共に黒褐色		1~2mmの砂粒、少量あり	赤褐色	三方型土器	平縁口縁
55	T.L.V類	10	*	洗鉢型											*
56	1171	11	*							内外共に黒褐色				汚染あり	三方型土器
57	T.L.V類		*	洗鉢型						*	暗褐色	2~3mm	*		三方型土器
58	136		*	洗鉢型						内面暗褐色外面黒褐色		1~2mm	*		*
59	644	10	*	洗鉢型						内外共に黒褐色			*		*
60	43-3	*	*	洗鉢型									*		表状口縁
61	785	*	*	洗鉢型									*		*
62	874	*	*	洗鉢型						内外共に黒褐色外面一部黒褐色			*		*
63	51-3	*	*	洗鉢型						内外共に黒褐色外面一部黒褐色			*		*
64	51-2	*	*	洗鉢型						内外共に黒褐色外面一部黒褐色			*		*
65	143	10	*	洗鉢型						内外共に黒褐色			*		*
66	808		*	洗鉢型						内外共に黒褐色外面一部黒褐色			*		平縁口縁
67	42-4	10	*	洗鉢型						内外共に黒褐色			*		*
68	54-4	*	*	洗鉢型						内外共に黒褐色		2~3mm	*		表状口縁
69	125		*	洗鉢型						内外共に黒褐色			*		平縁口縁
70	1099		*	洗鉢型						内面暗褐色外面赤褐色			*		*
71	80シムト		*	洗鉢型						内外共に黒褐色			*		*
Fig. 19 72	1051		*	洗鉢型						内外共に黒褐色			*		*
73	274		*	洗鉢型						内外共に黒褐色		1~2mm	*		*
74	494		*	洗鉢型					3.7	内外共に黒褐色		2~3mm	*		平縁
75	1142		*	洗鉢型					4.5	*			*		*
76	247		*	洗鉢型					5.0	内面暗褐色外面赤褐色		1~2mm	*		*
77	756		*	洗鉢型					4.7	内面暗褐色外面赤褐色			*		上底
78	838		*	洗鉢型					6.0	内面暗褐色外面赤褐色		2~3mm	*		平底
79	356		*	洗鉢型					5.5	内外共に黒褐色			*		縁部スリ付
80	452		*	洗鉢型					5.8	内外共に赤褐色			*		*
81	1615		*	洗鉢型					5.5	内面赤褐色外面赤褐色			*		上底 圧痕あり
82	1054		*	洗鉢型					6.0	内面暗褐色外面赤褐色			*		平底 内面スリ付、外縁あり
83	159		*	洗鉢型					3.8	内外共に黒褐色			*		平底
84	1025		*	洗鉢型					6.0	内面暗褐色外面赤褐色			*		上底
85	363		*	洗鉢型					6.0	内外共に赤褐色			*		わずかに上底
86	902		*	洗鉢型					6.0	内面暗褐色外面赤褐色			*		上底
87	37		*	洗鉢型					4.0	内面暗褐色外面赤褐色			*		上底
88	982		*	洗鉢型					6.0	内面暗褐色外面赤褐色			*		平底
89	372		*	洗鉢型					6.5	内面暗褐色外面赤褐色			*		上底
90	3a-3, 5b-3		*	洗鉢型					3.5	内外共に黒褐色			*		*
91	238		*	洗鉢型					8.0	内面暗褐色外面赤褐色		1~2mm	*		*
92	428		*	洗鉢型					5.0	内面暗褐色外面赤褐色		2~3mm	*		平底
93	500		*	洗鉢型					6.5	内面暗褐色外面赤褐色			*		上底 圧痕あり
94	754		*	洗鉢型					4.8	内面暗褐色外面赤褐色			*		スリ付
95	182		*	洗鉢型					5.4	内外共に黒褐色			*		平底
96	690		*	洗鉢型					7.5	内外共に黒褐色			*		*
97	156		*	洗鉢型					4.8	内面暗褐色外面赤褐色			*		*
98	12		*	洗鉢型					5.0	内面暗褐色外面赤褐色			*		*
99	1022		*	洗鉢型					7.6	内面暗褐色外面赤褐色			*		圧痕あり
100	1077		*	洗鉢型					7.5	内外共に赤褐色			*		*
101	1055		*	洗鉢型					7.5	内面暗褐色外面赤褐色			*		圧痕あり
102	461		*	洗鉢型					7.1	内面暗褐色外面赤褐色			*		*
103	621		*	洗鉢型					5.0	内面暗褐色外面赤褐色			*		*
104	270		*	洗鉢型					5.1	内面暗褐色外面赤褐色			*		*
Fig. 20 105	336, 695	11	精緻土器	洗鉢型	6.0+a	21.5	21.9	16.5	—	内外共に黒褐色、緑褐色		1~2mmの砂粒、少量あり		三方型土器	山形口縁
106	1183		*	洗鉢型	6.6-a	30.0	27.9	20.1	—	内外共に黒褐色			*		平縁口縁



種別	Y-系	PI-系	器種	器形	器高	口径	器厚	器底	器色	器調	胎土	備考
Fig. 33	1064		煎製土器	鉢形 1 型	—	—	—	—	内外共に褐色	一部黒褐色	2~3mmの砂粒、金 葉を含有	平縁口縁
Fig. 34	101		*	成 形					12.9	内面黒褐色外面赤褐色	3~4mm *	ト 底 スス付着 圧痕有り
	162			*					9.9	内外共に褐色	*	*
	163			*					10.8	内外共に褐色	*	平 底 くさりの圧痕 *
	164			*					9.9	内面黒褐色外面赤褐色	*	*
	165	1100		*					10.2	内外共に褐色	*	上 底 *
	166	北IV型	*	*					10.6	内面赤褐色外面赤褐色	*	平 底 *
	167	1031		*					6.8	内外共に褐色	*	*
	168	944		*					10.2	内面黒褐色外面赤褐色	*	わずかに上底 *
	169	476	16	*					11.7	内面赤褐色外面赤褐色	*	上 底 *
	170	1024		*					10.2	内面赤褐色外面赤褐色	*	平 底 *
Fig. 35	171	412		平 縁 製 器	*				7.2	内外共に褐色	2~3mm *	*
	172	1063	16	煎製土器	*				11.4	内面赤褐色外面赤褐色	*	上 底 三處有り
	173	728, 729	*	*					8.4	内外共に褐色	*	平 底 *
	174	837		平 縁 製 器	*				6.6	内面赤褐色外面赤褐色	*	*
	175	1131		煎製土器	*				11.4	*	*	わずかに上底 圧痕有り
	176	127		*					9.6	内面赤褐色外面赤褐色	*	*
	177	997		*					6.0	内面赤褐色	*	ワ 底 *
	178	302		*					9.6	内外共に褐色	*	わずかに上底 *
	179	1030		*					11.4	内面赤褐色外面赤褐色	*	ト 底 圧痕有り
	180	上L-作例	16	平 縁 製 器	*				6.6	内面赤褐色外面赤褐色	3~4mm *	平 底 *
	181	506		煎製土器	*				10.5	内面赤褐色外面赤褐色	*	*
	182	184		*					11.7	内外共に褐色	*	上 底 *
	183	267	16	平 縁 製 器	*				6.9	内面赤褐色外面赤褐色	2~3mm *	わずかに上底 *
	184	1065		煎製土器	*				10.2	内面赤褐色外面赤褐色	*	*
	185	763		*					11.1	内外共に褐色	3~4mm *	*
	186	1128		*					8.4	内外共に褐色	*	*
	187	1130		*					9.9	*	*	平 底 *
Fig. 36	188	北IV型	16	*					12.3	内外共に褐色	*	わずかに上底 くさりの圧痕
	189	496		*					9.9	内面赤褐色外面赤褐色	*	平 底 圧痕有り
	190	834		*					10.2	内外共に褐色	*	*
	191	965		*					8.4	内面赤褐色外面赤褐色	*	*
	192	23		*					11.7	内外共に褐色	2~3mm *	わずかに上底 圧痕有り
	193	824		*					9.9	*	3~4mm *	平 底 *
	194	1057		*					7.2	内外共に褐色	*	*
	196			*					10.2	内面赤褐色外面赤褐色	*	* 黒縁石有り
	197	273	16	*					9.6	内面赤褐色外面赤褐色	1~2mm *	平 底 *
	197	807		平 縁 製 器	*				6.6	内外共に褐色	*	*
	198	北IV-4		煎製土器	*				4.2	内外共に褐色	2~3mm *	*
	199	北IV型		煎製土器	*				12.0	内外共に褐色	3~4mm *	ト 底 圧痕有り
	200	963		煎製土器	*				9.5	内面赤褐色外面赤褐色	1~2mm *	胎土少
	201	1064		煎製土器	*				7.2	内面赤褐色外面赤褐色	2~3mmの砂粒、金 葉を含有	わずかに上底
	202	北IV型		*					10.2	内外共に褐色	2~3mmの砂粒、金 葉を含有	わずかに上底 圧痕有り
	203	284		平 縁 製 器	*				9.1	内外共に褐色	2~3mmの砂粒、金 葉を含有	上 底
	204	648		煎製土器	*				8.45	内面赤褐色外面赤褐色	*	平 底
Fig. 37	1	2001	11	十字形 製器	—				赤褐色		1cmの砂粒と金 葉を含有	穿孔あり ナゲは上付
	2	2002	12	土 器					紅褐色		1~2mm *	*
	3	890		十形 製器					黒褐色		*	中央部に孔あり
	4	2003	*	土器製器					紅褐色		*	守蓋欠損
	5	220	11	四角形 製器					紅褐色		3~3mm *	中央に穿孔あり
	6	376		*					緑褐色		*	*
	7	256		*					暗褐色		*	*
	8	1182	11	*					暗褐色と暗紅褐色		*	周辺に割 き入れる
	9	546	*	*					暗褐色と暗褐色		*	*

Tab. 6 石器計測表-1

(単位 cm)

番号	採肉点	S-径	P.L.径	タイプ	石質	長	幅	厚	備考
1	Fig. 38	1	352	17	I	黒燧石	2.2	1.2	0.3
2	◇	2	420	◇	◇	◇	3.0	1.5	0.4
3	◇	3	63	◇	◇	◇	3.2	1.7	0.4
4	◇	4	895	◇	◇	◇	2.7	1.6	0.4
5	◇	5	19	◇	◇	◇	2.5	1.4	0.3
6	◇	6	938	◇	◇	◇	2.5	1.5	0.3
7	◇	7	922	◇	◇	◇	1.6	1.4	0.2
8	◇	8	128	◇	◇	◇	1.7	1.5	0.3
9			354	◇	◇	◇	2.4	1.5	0.4
10			874	◇	◇	◇	1.3	1.4	0.4
11			898	◇	◇	◇	1.8	1.7	0.4
12	Fig. 38	9	276	17	II	◇	2.2	1.3	0.3
13	◇	10	727	◇	◇	◇	2.5	1.4	0.3
14	◇	11	27	◇	◇	◇	2.5	1.9	0.4
15	◇	12	481	17	◇	◇	2.1	2.1	0.5
16	◇	13	393	◇	◇	◇	1.7	1.3	0.3
17	◇	14	106	◇	◇	◇	2.1	1.2	0.3
18	◇	15	888	◇	◇	◇	2.9	1.8	0.4
19	◇	16	479	◇	◇	◇	3.5	2.1	0.4
20	◇	17	838	◇	◇	◇	2.5	1.9	0.4
21	◇	18	502	◇	◇	◇	2.6	1.6	0.3
22	◇	19	862	◇	◇	◇	2.7	2.3	0.5
23	◇	20	5	◇	◇	◇	2.1	1.4	0.3
24	◇	21	526	◇	◇	◇	2.8	2.2	0.4
25	◇	22	848	◇	◇	◇	2.9	1.4	0.5
26	◇	23	952	◇	◇	◇	2.1	1.5	0.3
27	◇	24	872	◇	◇	◇	2.2	1.8	0.4
28	Fig. 39	25	461		◇	◇	2.8	1.5	0.4
29	◇	26	346	17	◇	◇	2.2	2.1	0.5
30	◇	27	550	◇	サヌカイト	◇	2.8	1.5	0.4
31	◇	28	592	17	◇	黒燧石	2.8	1.9	0.4
32	◇	29	110	◇	◇	◇	2.7	1.9	0.5
33	◇	30	8	◇	◇	◇	1.9	2.1	0.4
34			138	◇	◇	◇	1.8	1.6	0.4
35			199	◇	◇	◇	2.0	1.7	0.4
36			368	◇	◇	◇	2.6	1.9	0.4
37			854	◇	◇	◇	1.5	1.5	0.3
38			881	◇	◇	◇	2.7	1.5	0.4
39		衣採		◇	◇	◇	2.0	1.5	0.4
40			481	◇	◇	◇	4.3	1.4	0.6
41	Fig. 39	31	73	17	III	◇	3.4	1.6	0.4
42	◇	32	825	◇	◇	◇	2.3	1.6	0.4
43	◇	33	466	◇	◇	◇	2.0	1.1	0.3
44	◇	34	896	◇	◇	◇	2.6	1.8	0.3
45	◇	35	316	◇	◇	◇	2.3	1.4	0.3
46	◇	36	820	◇	◇	◇	2.4	1.8	0.3
47	◇	37	927	◇	◇	◇	3.0	1.9	0.5
48	◇	38	416	17	◇	◇	2.5	2.2	0.5
49	◇	39	821	◇	◇	◇	2.8	1.9	0.5
50	◇	40	829	17	◇	◇	3.5	1.3	0.5
51	◇	41	371	◇	◇	◇	2.7	1.6	0.4
52	◇	42	917	◇	◇	サヌカイト	2.7	2.3	0.3

Tab. 7 石器計測表-2

(単位 cm)

編	挿図編	S-編	PL編	タイプ	石質	長	幅	厚	備考	
石	53	Fig.39 43	342	17	重	黒曜石	3.6	2.9	0.4	
	54	44	313	◇	◇	◇	2.8	2.2	0.4	
	55	45	92	◇	◇	◇	2.3	1.6	0.3	
	56		55	◇	◇	◇	1.7	1.9	0.2	
	57		221	◇	◇	◇	1.4	1.5	0.3	
	58		331	◇	◇	◇	2.3	2.6	0.3	
	59		612	◇	◇	◇	3.1	1.4	0.4	
	60		765	◇	◇	◇	2.2	2.3	0.4	
	61		899	◇	◇	◇	3.1	1.8	0.4	
	62		957	◇	◇	◇	2.5	2.0	0.5	
	63		152	◇	◇	◇	1.7	1.8	0.3	分型不可院
	64		639	◇	◇	◇	1.8	1.4	◇	
	65		793	◇	◇	◇	1.9	1.8	0.3	◇
	66		794	◇	◇	◇	1.6	1.4	0.3	◇
	67		818	◇	◇	◇	1.6+α	0.8+α	◇	
	68		891	◇	◇	◇	1.6	1.7	0.2	◇
	69		940	◇	◇	◇	2.5	1.4	0.2	◇
	模	70	Fig.40 46	826	18	◇	◇	1.8	1.8	
		71	47	852		◇	◇	2.1	1.6	
72		48	759		◇	◇	2.5	2.2		
73		49	774	18	◇	◇	2.0	1.3		
74		50	900	◇	◇	◇	2.2	1.8		
75		51	871	◇	◇	◇	2.0	1.8		
76		52	694	◇	◇	◇	2.0	1.1		
77		53	785	◇	◇	◇	1.6	1.7		
78		54	887	18	◇	◇	2.0	1.4		
79		56	807	◇	◇	◇	1.8	1.6		
80		57	879		◇	◇	2.2	1.0		
81		Fig.40 55	778		◇	◇	2.6	1.2	0.5	
82			736		◇	◇	4.0	1.9	0.5	
83		Fig.40 58	876		◇	◇	2.9	2.3	0.5	
尖頭器	84	59	171	18	◇	◇	2.2	1.5	0.3	
	85	60	560	◇	◇	◇	3.7	2.5	0.6	
	86	Fig.40 61	904	◇	◇	◇	2.3	1.7	0.4	
	87	62	83	◇	◇	◇	3.7	2.8	0.9	
	88	63	625	◇	◇	◇	3.1	2.7	0.5	
	89	64	839		サヌカイト	4.9	2.8	1.1		
	90	65	816		黒曜石	2.6	2.3	0.3		
	91	66	822	18	◇	◇	3.5	2.5	0.9	
	92	Fig.41 67	245	◇	◇	◇	2.9	2.3	0.3	
	93	68	803	◇	◇	◇	2.9	2.9	0.7	
	94	69	609	◇	◇	◇	2.5	2.5	0.6	
	95	70	673	18	◇	◇	3.0	2.1	0.6	
	96	71	757	◇	◇	◇	2.4	1.5	0.3	
	97	72	766	◇	◇	◇	2.5	2.0	0.6	
98	73	732	◇	◇	◇	2.1	2.1	0.3		
つまみ石	99	74	806	◇	◇	◇	1.5	1.7	0.5	
	100	75	918	◇	◇	◇	2.3	2.6	0.6	
	101	76	770	◇	◇	◇	2.1	2.4	0.6	
	102	77	1	18	◇	◇	2.9	2.5	0.6	
	103	78	699	◇	◇	◇	2.5	2.2	0.6	
	104	79	741	◇	◇	◇	3.1	1.7	0.5	

Tab. 8 石器計測表—3

(単位 cm)

	扉	排	開	S-扉	P.I.扉	タイプ	石 質	長	幅	厚	備 考
つ み 型 石 器	105	Fig.41	80	648	18		黒 燧 石	2.0	3.0	0.4	
	106	✳	81	943	✳		✳	2.1	2.2	0.7	
	107	✳	82	647			✳	2.2	2.2	0.6	
	108	✳	83	613			✳	2.1	2.8	0.4	
	109	✳	84	800	18		✳	2.7	2.7	0.5	
	110	✳	85	242			✳	2.0	1.6	0.6	
	111			2			✳	3.6	1.8	0.5	
	112			804			✳	2.6	2.2	0.4	
	113			301			✳	3.5	2.2	0.4	
	114			933			✳	2.4	3.4	0.5	
	サ イ ド ・ ブ レ イ ド	115	Fig.42	86	85	19	I	✳	4.0	2.4	0.3
116		✳	87	735	✳	✳	✳	2.7	2.5	0.4	
117		✳	88	923	✳	✳	✳	2.3	2.4	0.4	
118		✳	89	914	✳	✳	✳	1.4	1.9	0.3	
119		✳	90	772	✳	✳	✳	2.1	1.3	0.6	
120		✳	91	706	✳	✳	✳	1.6	1.9	0.4	
121		✳	92	885	19	✳	サヌカイト	2.5	2.4	0.8	
122		✳	93	944	✳	✳	黒 燧 石	2.3	1.8	0.4	
123		✳	94	913	19	✳	✳	2.1	2.2	0.4	
124		✳	95	902	✳	✳	✳	1.9	1.9	0.4	
125		✳	96	773	✳	✳	✳	2.0	1.8	0.4	
126				508			✳	4.3	2.4	0.7	
127				894			✳	2.8	1.9	0.7	
128		Fig.42	97	667	19	II	✳	1.8	1.8	0.6	両端折断
129		✳	98	760	✳	✳	✳	2.1	1.4	0.5	✳
130		✳	99	764	19	✳	✳	1.8	1.3	0.3	✳
131		✳	100	855	✳	✳	✳	1.8	2.5	0.3	✳
132		✳	101	283	19	✳	✳	2.3	2.1	0.6	✳
133		✳	102	814	✳	✳	✳	2.0	1.9	0.6	✳
134		✳	103	835	19	✳	✳	2.5	1.7	0.4	✳
135		✳	104	P.1049	✳	✳	✳	1.7	2.5	0.6	✳
136		✳	105	887	✳	✳	✳	2.6	1.9	0.6	
137		Fig.43	106	345			✳	2.5	2.2	0.6	先端折断
138		✳	107	740			✳	2.7	1.6	0.4	
139		✳	108	909			✳	1.9	2.0	0.5	先端折断
140		✳	109	795			✳	2.2	1.5	0.3	✳
141		✳	110	857			✳	3.0	1.3	0.4	
142		✳	111	828			✳	2.1	1.6	0.5	先端折断
143		✳	112	659			✳	1.8	2.1	0.6	✳
144		✳	113	422	19	✳	サヌカイト	2.8	1.7	0.5	✳
145		✳	114	841	✳	✳	黒 燧 石	3.0	2.2	0.5	✳
146		✳	115	947			✳	3.2	1.7	0.6	
147		✳	116	832	19	✳	✳	2.7	1.9	0.4	先端折断
148		✳	117	812			✳	2.8	1.2	0.4	先端折断
149		✳	118	281			✳	2.9	2.1	0.3	✳
150		✳	119	845			✳	2.6	1.2	0.4	両端折断
151	✳	120	776			✳	2.5	1.5	0.4	先端折断	
152	✳	121	875			✳	3.0	1.4	0.3	✳	
153	✳	122	761			✳	2.2	1.6	0.4	✳	
154	✳	123	783			✳	1.9	1.5	0.3	両端折断	
155	✳	124	612			✳	3.1	1.4	0.3		
156	✳	125	939			✳	2.9	2.1	0.5	先端折断	

Tab. 9 石器計測表-4

(単位 cm)

	産 地	挿 区 産	S-産	PI.産	タイプ	石 質	長	幅	厚	備 考	
サイ ド ・ ブ レ イ ド	157		76			黒 曜 石	4.0	3.9	0.7		
	158		672			*	2.5	2.1	0.5		
	159		771			*	1.2	1.3	0.3		
	160		796			*	2.3	1.7	0.3		
	161		827			*	2.0	1.7	0.6		
	162		868			*	2.3	2.0	0.5		
	163		905			*	2.6	1.2	0.5		
	164		932			*	3.3	1.7	0.4		
	165		960			*	2.5	2.1	0.3		
	166		517			*	3.0	2.1	0.3		
	167		813			*	2.6	2.5	0.6		
	168		836			*	3.0	1.9	0.5		
	169		934			*	2.8	2.0	0.5		
	170		950			*	2.6	1.5	0.3		
	171		959			*	3.2	2.0	0.5		
	刃	172	Fig.44	126	701	19	I	*	6.0	1.8	0.5
		173	*	127	481	*	*	*	4.3	1.4	0.4
174		*	128	736	*	*	*	3.8	1.8	0.5	
175		*	129	177	*	*	*	4.5	1.8	0.4	
176		*	130	251	*	II	*	4.4	1.5	0.6	
177		*	131	910	*	*	*	4.6	1.5	0.5	
178		*	132	555	*	*	*	3.9	1.8	0.4	
179		*	133	743	*	*	*	4.6	2.0	0.7	
180		*	134	446	19	*	*	5.6	1.9	0.4	
181		*	135	451	*	*	*	6.5	1.6	0.4	
182		*	136	598	*	*	*	5.2	2.1	0.5	
183		*	137	367	20	*	*	5.0	1.4	0.7	
184		*	138	68	*	*	*	7.3	1.1	0.4	
185		*	139	437	20	*	*	6.6	1.9	0.6	
186		*	140	337	*	*	*	7.5	2.0	0.5	
187		Fig.45	141	587	*	*	*	5.7	2.1	0.6	
188		*	142	125	*	*	*	4.9	2.4	0.3	
189		*	143	767	*	*	*	4.1	2.3	0.5	
190		*	144	581	20	*	*	6.5	3.0	0.6	
191		*	145	501	*	*	*	6.1	2.5	0.6	
192		*	146	563	*	*	*	6.1	2.1	0.7	
193		*	147	539	20	*	*	5.3	1.8	0.4	
194		*	148	505	*	*	*	4.3	1.2	0.3	
195		*	149	460	20	*	*	4.6	1.8	0.4	
196		*	150	196	*	*	*	3.9	1.9	0.4	
197		*	151	364	*	*	*	3.9	1.5	0.5	
198		*	152	248	20	*	*	5.5	1.8	0.3	
199		*	153	336	*	*	*	4.9	2.1	0.5	
200		Fig.46	154	58	20	*	*	6.1	2.9	0.6	
201		*	155	524	*	*	*	6.8	1.8	0.5	
202		*	156	335	*	*	*	6.2	2.3	0.5	
203		*	157	362	*	*	*	5.9	1.5	0.4	
204	*	158	457	20	*	*	4.5	1.8	0.5		
205	*	159	844	*	*	*	5.2	1.4	0.4		
206	*	160	374	*	*	*	7.2	1.8	0.5		
207	*	161	135	21	*	*	4.5	1.5	0.3		
208	*	162	497	*	*	*	5.2	1.7	0.5		

水産折衝

Tab.10 石器計測表-5

(単位 cm)

器	編	洞	S-編	P.L.編	タイプ	石質	長	幅	厚	備	考	
												編
	209	Fig.46	163	507	21	II	黒曜石	5.8	1.7	0.4		
	210	◇	164	577	◇	◇	◇	6.3	1.7	0.4		
	211	Fig.47	165	426	◇	◇	◇	3.8	1.8	0.4	先端折断	
	212	◇	166	515	◇	◇	◇	4.0	1.3	0.3	◇	
	213	◇	167	893	◇	◇	◇	3.5	1.7	0.4	◇	
	214	◇	168	38	◇	◇	◇	3.7	1.5	0.4	◇	
	215	◇	169	950	◇	◇	◇	2.6	1.4	0.3	◇	
	216	◇	170	64	21	◇	◇	3.9	2.0	0.5	◇	
	217	◇	171	823	◇	◇	◇	2.1	1.7	0.4	◇	
	218	◇	172	856	◇	◇	◇	2.6	1.6	0.6	◇	
	219	◇	173	864	◇	◇	◇	3.7	1.6	0.4	◇	
	220	◇	174	49	21	◇	◇	3.8	2.2	0.6	◇	
	221	◇	175	355	◇	◇	◇	3.6	1.3	0.4	◇	
	222	◇	176	132	◇	◇	◇	3.9	1.7	0.5	◇	
	223	◇	177	664	◇	◇	◇	2.4	1.4	0.5	◇	
	224	◇	178	942	◇	◇	◇	3.7	1.6	0.4	◇	
	225	◇	179	808	◇	◇	◇	4.1	2.2	0.7	◇	
	226	◇	180	792	◇	◇	◇	3.8	1.1	0.3	◇	
	227	◇	181	56	21	◇	◇	5.1	1.7	0.4	◇	
	228	Fig.48	182	391	◇	◇	◇	4.8	1.2	0.4	先端折断	
	229	◇	183	400	◇	◇	◇	4.0	1.8	0.5	◇	
	230	◇	184	484	◇	◇	◇	4.1	1.5	0.5	◇	
	231	◇	185	728	21	◇	◇	5.1	2.0	0.6	◇	
	232	◇	186	52	◇	◇	◇	4.4	2.0	0.6	◇	
	233	◇	187	147	22	◇	◇	3.7	1.4	0.4	◇	
	234	◇	188	140	◇	◇	◇	2.2	1.4	0.3	先端折断	
	235	◇	189	301	◇	◇	◇	3.3	2.1	0.3	◇	
	236	◇	190	948	◇	◇	◇	3.0	1.2	0.3	先端折断	
	237	◇	191	236	◇	◇	◇	2.9	1.6	0.4	先端折断	
	238	◇	192	311	◇	◇	◇	3.5	1.6	0.3	先端折断	
	239	◇	193	704	22	◇	◇	4.2	1.5	0.4	先端折断	
	240	◇	194	139	◇	◇	◇	3.3	1.4	0.4	◇	
	241	◇	195	518	22	◇	◇	5.0	2.1	0.6	◇	
	242	◇	196	550	◇	◇	◇	4.6	2.4	0.8	◇	
	243	◇	197	700	◇	◇	◇	4.2	2.4	0.4	◇	
	244	Fig.49	198	702	◇	Ⅲ	◇	5.5	2.6	0.8		
	245	◇	199	523	◇	◇	◇	6.4	2.1	0.5		
	246	◇	200	516	◇	◇	◇	7.0	2.1	0.5		
	247	◇	201	417	◇	◇	◇	5.5	2.1	0.6		
	248	◇	202	340	22	◇	◇	4.6	2.4	0.7		
	249	◇	203	584	◇	◇	◇	6.5	4.0	0.7		
	250	◇	204	759	◇	◇	◇	3.5	1.7	0.4		
	251	◇	205	514	22	◇	◇	4.6	1.6	0.3		
	252	◇	206	447	◇	◇	◇	4.4	2.7	0.5		
	253	◇	207	908	22	◇	◇	5.0	1.9	0.6		
	254	◇	208	929	◇	◇	◇	6.0	1.9	0.6		
	255	Fig.50	209	343	◇	◇	◇	5.8	1.9	0.6		
	256	◇	210	12	◇	◇	◇	6.4	1.7	0.6		
	257	◇	211	721	22	◇	◇	4.9	2.0	0.6		
	258	◇	212	227	◇	◇	◇	4.0	1.8	0.4	先端折断	
	259	◇	213	444	◇	◇	◇	3.9	2.0	0.4	◇	
	260	◇	214	863	22	◇	◇	4.6	3.4	0.3	◇	

Tab.11 石器計測表-6

(単位 cm)

	№	採 取 地	S-№	P.L.№	タイプ	石 質	長	幅	厚	備 考	
刃	261	Fig.50 215	711	22	Ⅱ	黒 曜 石	4.3	1.7	0.4	末端折断	
	262	◇ 216	791		◇	◇	2.9	1.9	0.4	◇	
	263	◇ 217	549		◇	◇	4.0	1.6	0.3	◇	
	264	◇ 218	677		◇	◇	3.0	1.6	0.4	先端折断	
	265	◇ 219	480		◇	◇	3.5	2.2	0.4	◇	
	266	◇ 220	538	22	◇	◇	3.7	2.1	0.5	末端折断	
	267	◇ 221	573		◇	◇	5.0	2.2	0.6	先端折断	
	268	◇ 222	556		◇	◇	4.6	1.7	0.5	◇	
	269	◇ 223	406	22	◇	◇	5.1	1.9	0.7	◇	
	270	◇ 224	427	◇	◇	◇	6.7	1.8	0.5	◇	
	271		243		Ⅱ	◇	3.3	2.1	0.7		
	272		430		◇	◇	4.4	2.6	0.6		
	273		454		◇	◇	4.3	2.2	0.5		
	274		503		◇	◇	5.1	2.5	0.6		
	275		589		◇	◇	4.1	1.3	0.4		
	276		651		◇	◇	6.0	3.3	0.9		
	277		719		◇	◇	4.0	2.4	0.4		
	278		734		◇	◇	3.2	2.3	0.6		
	279		750		◇	◇	5.9	1.8	0.6		
	280		762		◇	◇	3.5	2.4	0.6		
	281		857		◇	◇	3.0	1.3	0.4		
	282		861		◇	◇	3.3	1.8	0.3		
	283		901		◇	◇	4.0	1.7	0.3		
	284		26		Ⅱ	◇	3.0	1.4	0.3		
	器	285		137		◇	◇	3.5	1.8	0.7	
		286		203		◇	◇	3.9	1.1	0.4	
		287		327		◇	◇	3.2	2.0	0.3	
		288		338		◇	◇	4.3	1.5	0.5	
		289		384		◇	◇	3.8	2.1	0.4	
		290		387		◇	◇	3.8	1.3	0.2	
		291		462		◇	◇	5.9	2.4	0.8	
		292		463		◇	◇	5.0	2.1	0.4	
293			483		◇	◇	6.3	3.5	1.0		
294			534		◇	◇	7.0	3.0	1.0		
295			593		◇	◇	4.5	2.3	0.4		
296			597		◇	◇	4.7	2.1	0.6		
297			626		◇	◇	4.8	4.4	0.8		
298			642		◇	◇	4.0	1.4	0.4		
299			687		◇	◇	2.9	2.2	0.4		
300			707		◇	◇	3.5	1.7	0.4		
301			809		◇	◇	4.9	2.7	0.3		
302			819		◇	◇	3.8	1.4	0.4		
片	303	Fig.51 225	859		◇	◇	3.3	3.8	1.1		
	304	◇ 226	323		◇	◇	4.7	3.7	0.7		
	305	◇ 227	897		◇	◇	3.7	3.3	0.4		
	306	◇ 228	689		◇	◇	3.2	3.0	0.4		
	307	◇ 229	59		◇	◇	4.1	2.6	0.4		
	308	◇ 230	401		◇	◇	3.3	2.5	0.4		
	309	◇ 231	586		◇	◇	4.0	2.4	0.7		
	310	◇ 232	687		◇	◇	3.3	2.6	0.4		
	311	◇ 233	889		◇	◇	2.5	3.3	0.7	姫島産黒曜石	
	312	◇ 234	869		◇	◇	2.0	1.7	0.4		

Tab.12 石器計測表-7

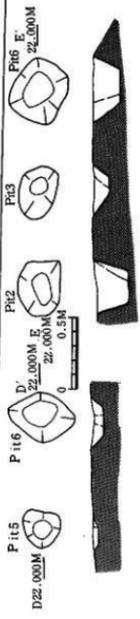
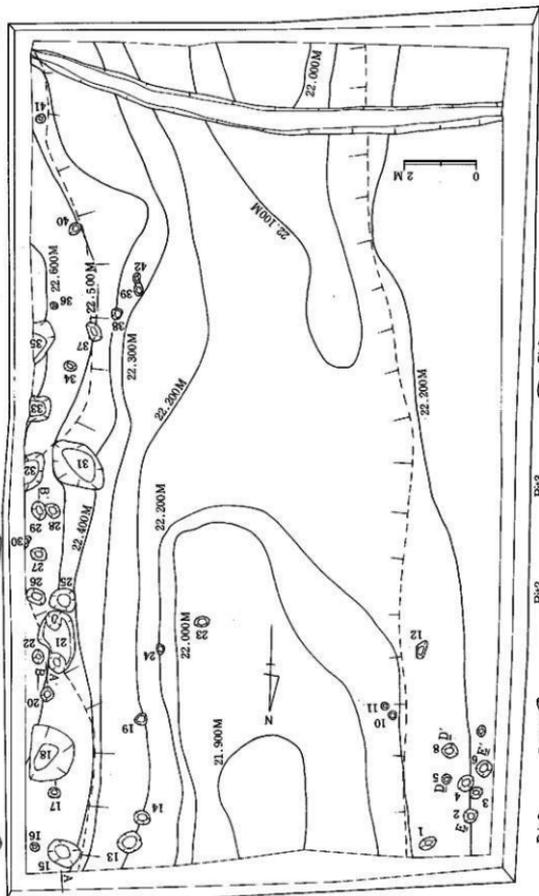
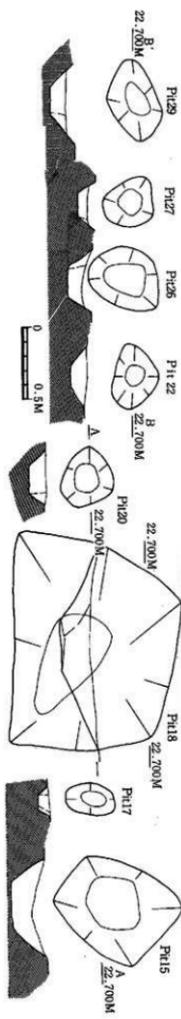
(単位 cm)

系	種類	底	S-底	PL底	タイプ	石質	長	幅	厚	備考		
剥片	313	Fig.51	235	499		黒曜石	3.2	2.0	0.2			
	314	◇	236	529		◇	2.8	2.6	0.4			
	315	◇	237	439		◇	5.3	3.7	0.9	先端に火を受けている		
	316	◇	238	834		◇	3.9	2.2	0.5			
	317			118		◇	4.0	2.0	0.4			
	318			322		◇	4.2	2.4	0.5			
	319			348		◇	4.7	3.2	0.8			
	320			358		◇	4.2	2.7	0.7			
	321			411		◇	2.7	2.7	0.5			
	322			421		◇	3.9	1.9	0.3			
	323			440		◇	5.1	3.1	0.8			
	324			459		◇	4.1	3.0	0.7			
	325			474		◇	6.0	4.0	0.7			
	326			494		◇	5.1	3.3	0.7			
	327			540		◇	4.3	3.8	0.7			
	328			565		◇	4.6	1.8	0.5			
	329			582		◇	5.2	3.2	0.5			
	330			723		◇	3.3	1.9	0.3			
	331			779		◇	3.8	1.7	0.4			
	332			801		◇	5.0	1.9	0.4			
	333			852		◇	3.0	1.7	0.5			
	334			853		◇	3.0	1.5	0.4			
	335			866		◇	3.6	1.4	0.3			
	336			911		◇	2.5	1.9	0.6			
	石器	337	Fig.52	239	334	23	サヌカイト	4.2	7.7		1.3	横型石器
		338	◇	240	432		◇	3.2	4.0+α		0.7	◇
		339	◇	241	324	23	◇	7.1	4.0		0.8	縦型石器
		340	◇	242	826	◇	◇	4.5	4.0		0.9	
		341	◇	243	559	◇	◇	4.3	7.4		1.0	
		342	◇	244	495	◇	◇	4.5	5.5		1.3	
		343	◇	245	739	◇	◇	4.3	6.8		0.9	
		344	Fig.53	246	754	◇	◇	10.5	4.4		1.7	
		345	◇	247	493	◇	◇	6.7	3.2		1.0	
346		◇	248	392	◇	◇	5.8	2.9	0.8			
347		◇	249	571	◇	◇	7.6	4.3	1.6			
348		◇	250	572	◇	◇	7.5	3.5	1.2			
349		◇	251	522	◇	◇	7.8	4.6	0.9			
350		◇	252	476	23	◇	7.5	2.9	1.1			
351		Fig.54	253	519	24	黒曜石	4.2	1.7	0.4			
352		◇	254	508	◇	◇	4.3	2.4	0.7			
353		◇	255	348	◇	◇	4.7	3.2	0.8			
354		◇	256	40	24	◇	4.0	2.5	0.6			
355		◇	257	454	◇	◇	4.3	2.2	0.5			
356		◇	258	503	◇	◇	5.1	2.5	0.6			
357	◇	259	430	◇	◇	4.4	2.6	0.6				
358	◇	260	361	24	◇	5.7	3.3	0.7				
359	◇	261	531	◇	◇	5.6	2.9	0.6				
360			334		サヌカイト	4.0	7.6	1.2	横型石器			
361			419		◇	7.6	5.8	1.3				
362			398		◇	5.2	4.0	1.2				
363			483		◇	6.3	3.5	1.0				
364	Fig.55	262	59	24	◇	8.8	2.7	0.7				

Tab.13 石器計度表-8

(単位 cm)

	底	挿込底	S-系	PL系	タイプ	石質	長	幅	厚	備考
ナ ス カ イ ト 製 割 片 石 器	365	Fig.55 263	724	24		ナスカイト	6.2	2.5	0.7	
	366	◇ 264	753	◇		◇	9.1	2.0	5.6	
	367	◇ 265	101	◇		◇	6.3	2.1	1.3	
	368	◇ 266	512	◇		◇	7.1	2.5	0.6	
	369	◇ 267	194			◇	3.2	2.3	0.7	両端折断
	370	◇ 268	392			◇	5.9	3.0	0.8	
	371	◇ 269	487	24		◇	6.3	3.2	0.8	末端折断
	372		533			◇	4.7	1.7	0.5	
	373		562			◇	8.4	3.4	0.6	
打 製 石 斧	374	Fig.56 270	4	25		安山岩	12.1+α	6.2	1.6	
	375	◇ 271	234	◇		◇	11.7	5.9	1.5	
	376	◇ 272	748	◇		◇	15.0	6.1	1.3+α	
	377	◇ 273	541	◇		◇	11.5+α	7.6	2.7	
	378	◇ 274	751	◇		凝灰岩	11.8	6.5	1.2	分銅型
	379	◇ 275	453	◇		安山岩	14.4+α	6.6	2.0	
	380	◇ 276	712	◇		◇	11.5	4.9	1.7	
	381	◇ 277	961	◇		凝灰岩	8.5+α	6.0	1.7	打製石刃1か?
	382		369			安山岩	7.9+α	5.9	1.9	
	383		456			◇	9.9+α	7.2	2.2	
	384		710			◇	11.4+α	5.8	1.4	
	385		527			◇	10.4	7.2	2.5	
	386	Fig.57 278	45	26		◇	8.7+α	4.8	1.2	
	387	◇ 279	567	◇		◇	6.2	4.9	1.4	
	388	◇ 280	344	◇		蛇紋岩	9.9	4.7	1.5	
389	◇ 281	590	◇		安山岩	7.0+α	5.4	1.3		
390	◇ 282	51			◇	11.6+α	5.2	2.7		
磨 製 石 斧	391	◇ 283	61	26		蛇紋岩	11.4	5.0	1.7	
	392	◇ 284	16	◇		安山岩	12.5	4.1	2.5	
	393	◇ 285	119	◇		蛇紋岩	10.8	5.0	1.9	
	394	◇ 286	494			◇	11.5+α	5.2	2.6	
	395	◇ 287	482	26		安山岩	14.4	5.5	2.5+α	
	396	◇ 288	107			蛇紋岩	9.0+α	3.8	3.7	
	397	◇ 289	351	26		安山岩	11.0	5.0	2.0	
	398	Fig.58 290	464			蛇紋岩	10.0-α	7.0	2.3	
	399	◇ 291	510			安山岩	18.2	5.6	3.0	
	400	◇ 292	455	26		蛇紋岩	14.3+α	6.3	3.5	
	401	◇ 293	782	◇		◇	12.1-α	5.8	2.6+α	
	402	◇ 294	25			◇	15.0+α	5.8	2.3-α	偏刃
	403	◇ 295	318	26		◇	15.2	6.7	3.0+α	
	404	◇ 296	486	◇		◇	13.0+α	5.5	3.2	
	405		899			◇	7.7+α	5.6	2.9	
406		57			安山岩	9.5+α	4.1+α	2.2		
407		520			蛇紋岩	7.1+α	5.0	2.3	基部のみ	
408		89			◇	7.6+α	5.5	2.5	◇	
409		315			◇	10.5+α	5.7	3.4		
410		749			◇	8.5+α	6.7	2.7+α	基部のみ	
411		506			凝灰岩	12.3+α	6.3	3.2		
石 皿	412	Fig.60 306	755			花崗岩	25.0-α	16.4+α	8.5	
	413		307	91		◇	26.0-α	19.4+α	12.2	
	414		308	568	28	◇	25.2-α	19.8+α	10.0	
	415		309		◇	硬質砂岩	30.8-α	25.6-α	8.8	
	416	Fig.61 310	350	◇		花崗岩	47.0	63.0	5.8	



# 圖 版





(1)L-11c 地点全景

(北から撮影)



(2)北西部のピット検出状態と土器出土状態



(1)L-11c 地点全景

(北から撮影)



(2)北東部のピット検出状態



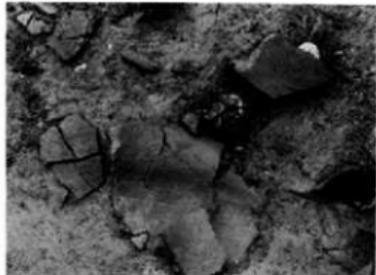
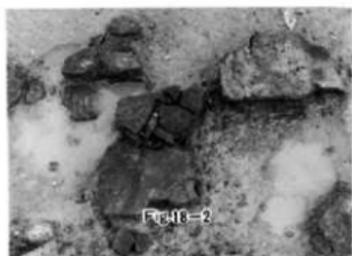
(1)中央部の凹地と遺物出土状況

(南側から撮影)

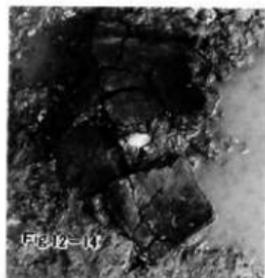
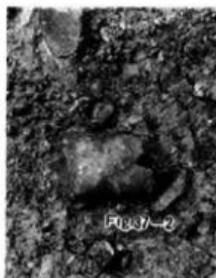
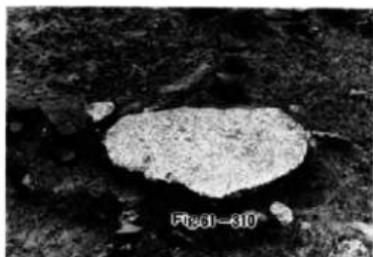


(2)南側凹地と遺物出土状況

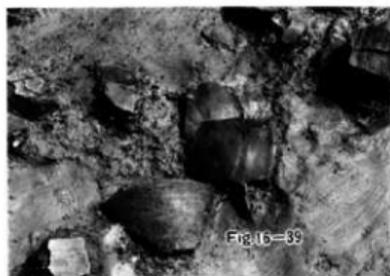
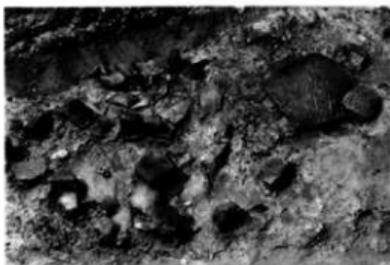
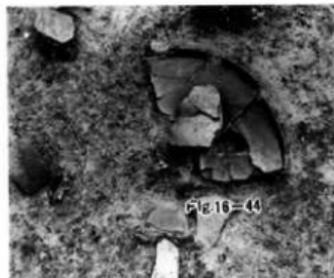
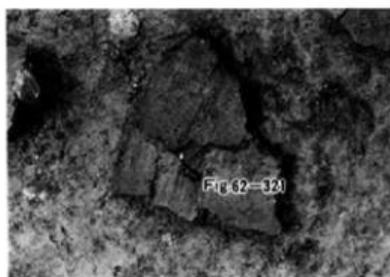
(北から撮影)



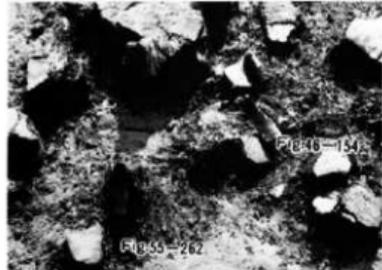
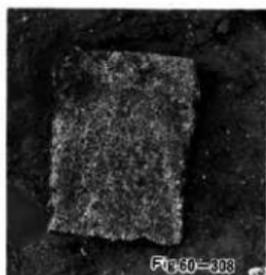
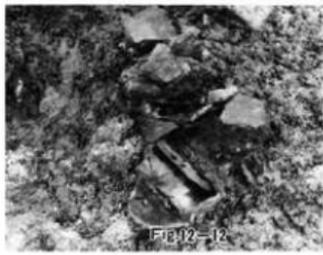
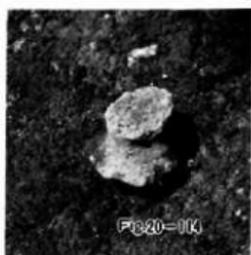
遺物出土状態-1



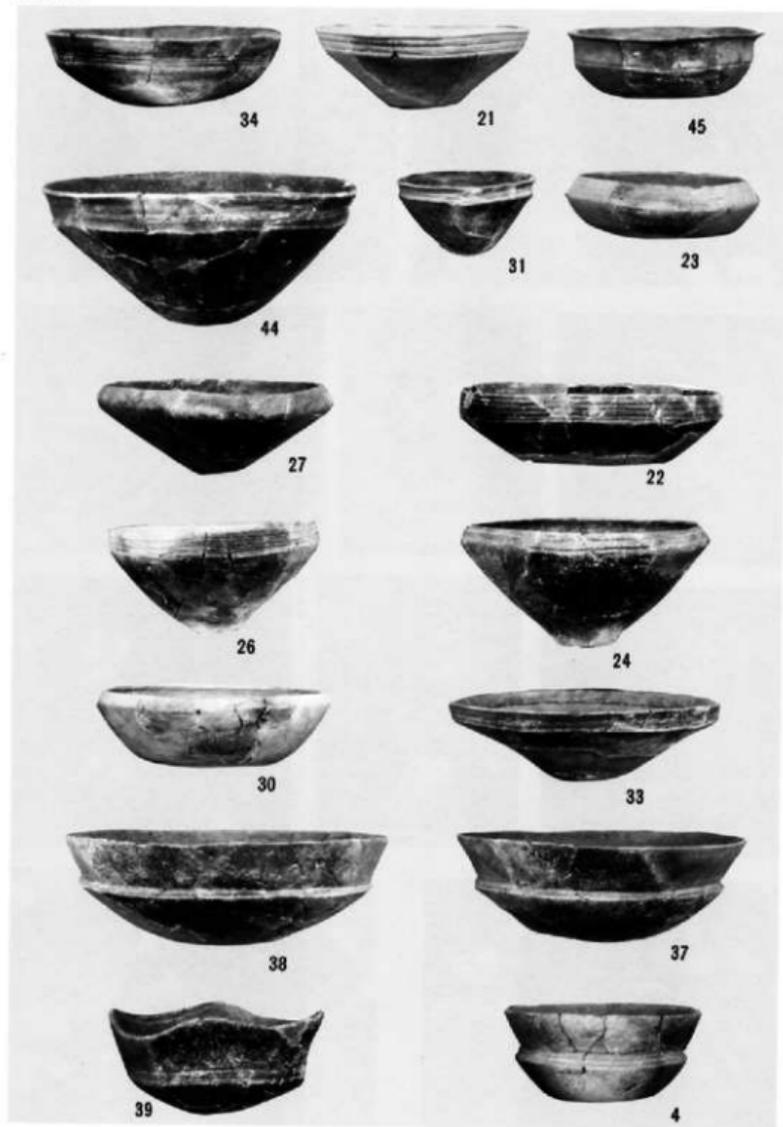
遺物出土状態-2



遺物出土状態-3



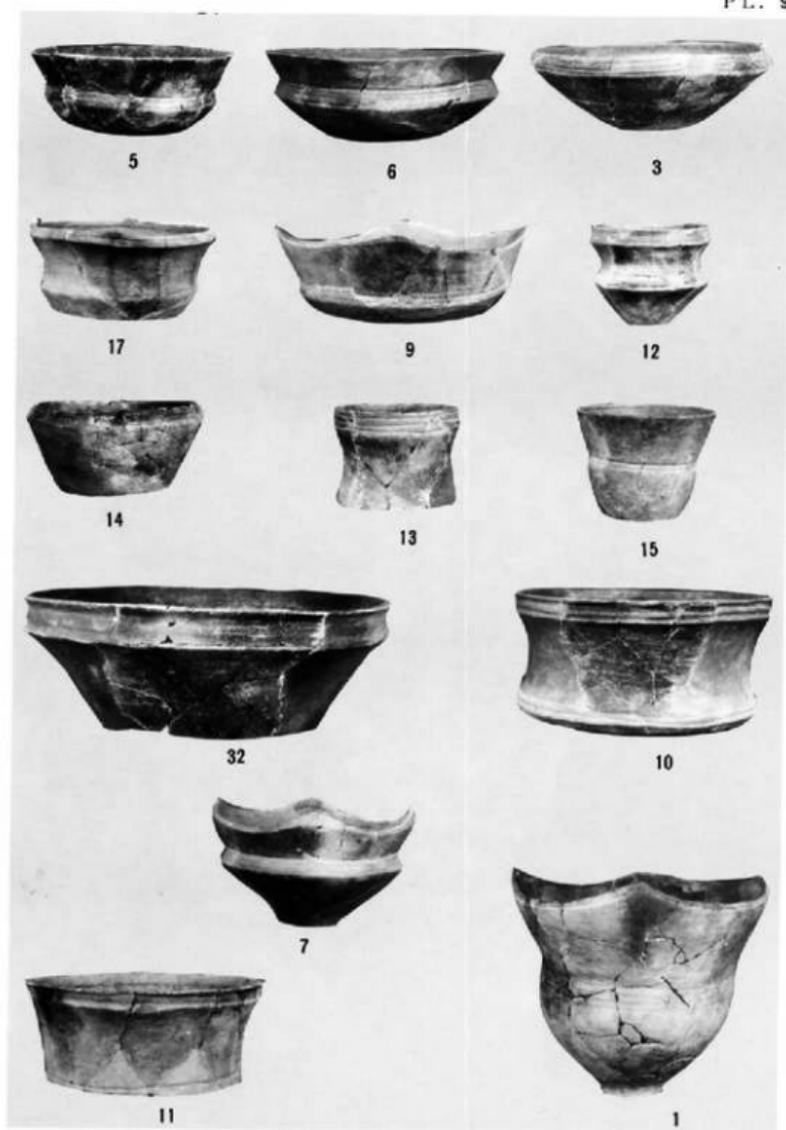
遺物出土状態-4



精製土器

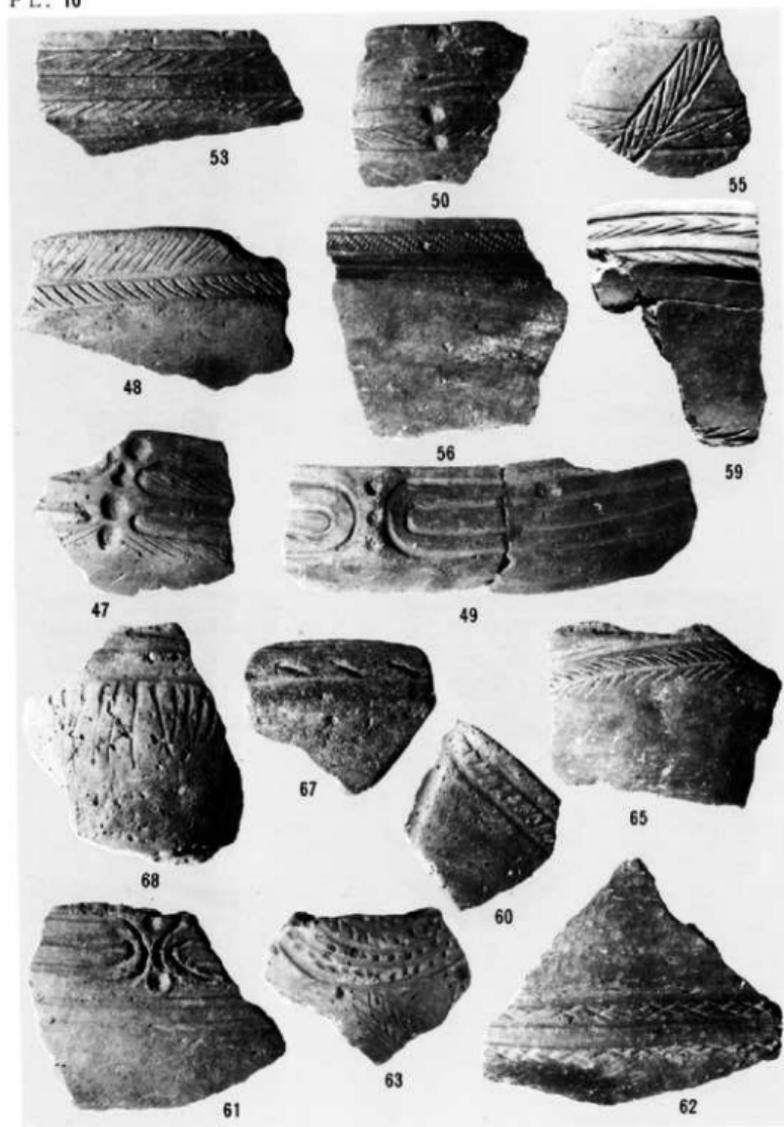
(番号は挿図番号と同一)

(縮尺不統一)



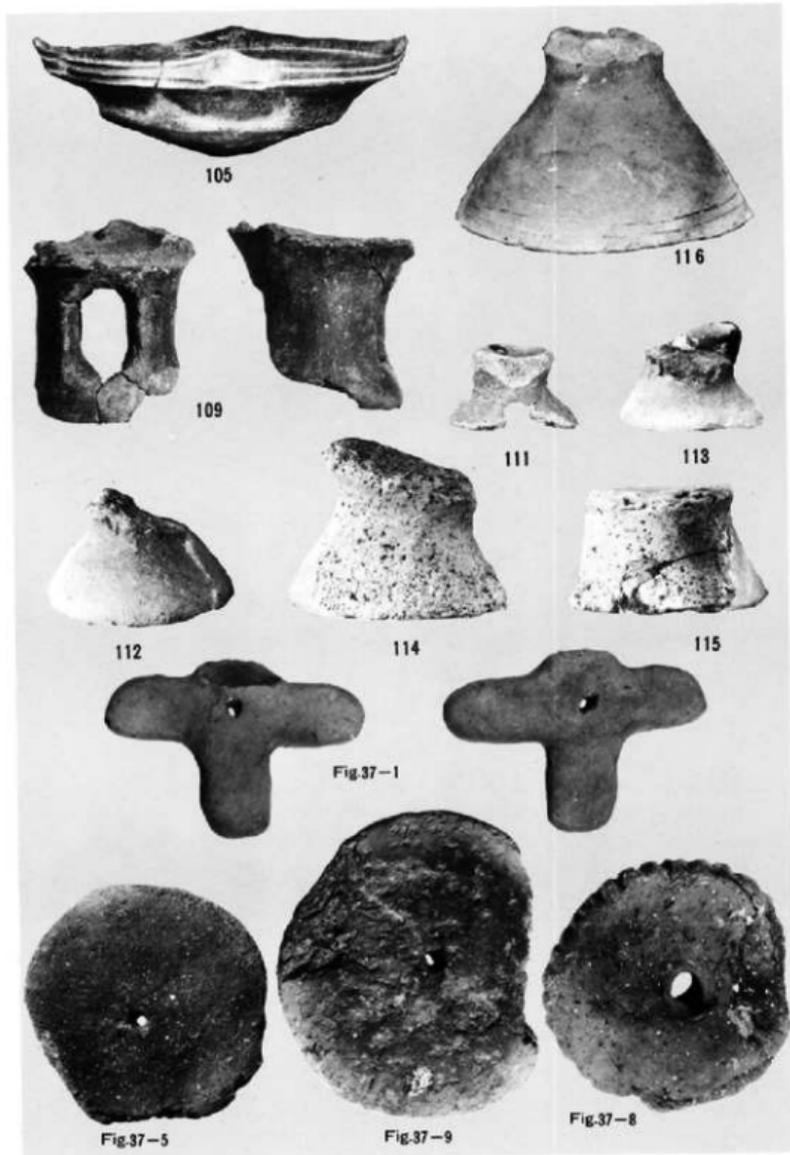
精製土器

(縮尺不統一)



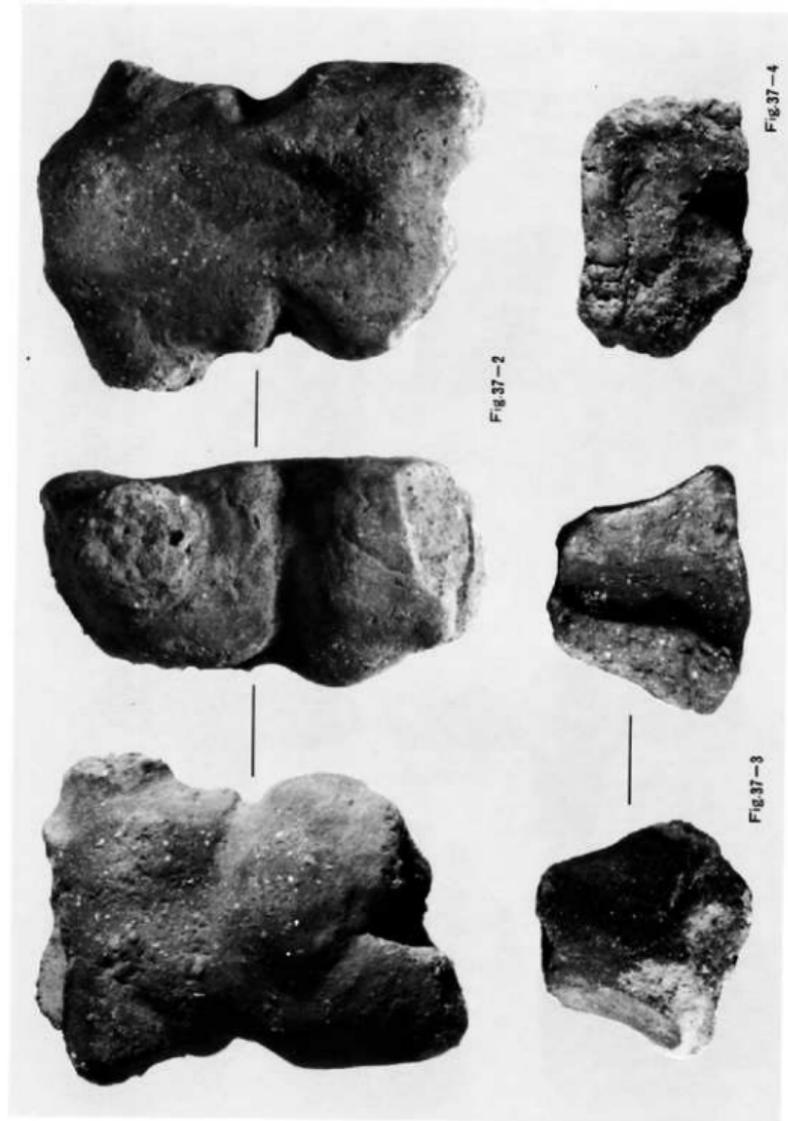
精製土器各種文様

(前尺不統一)



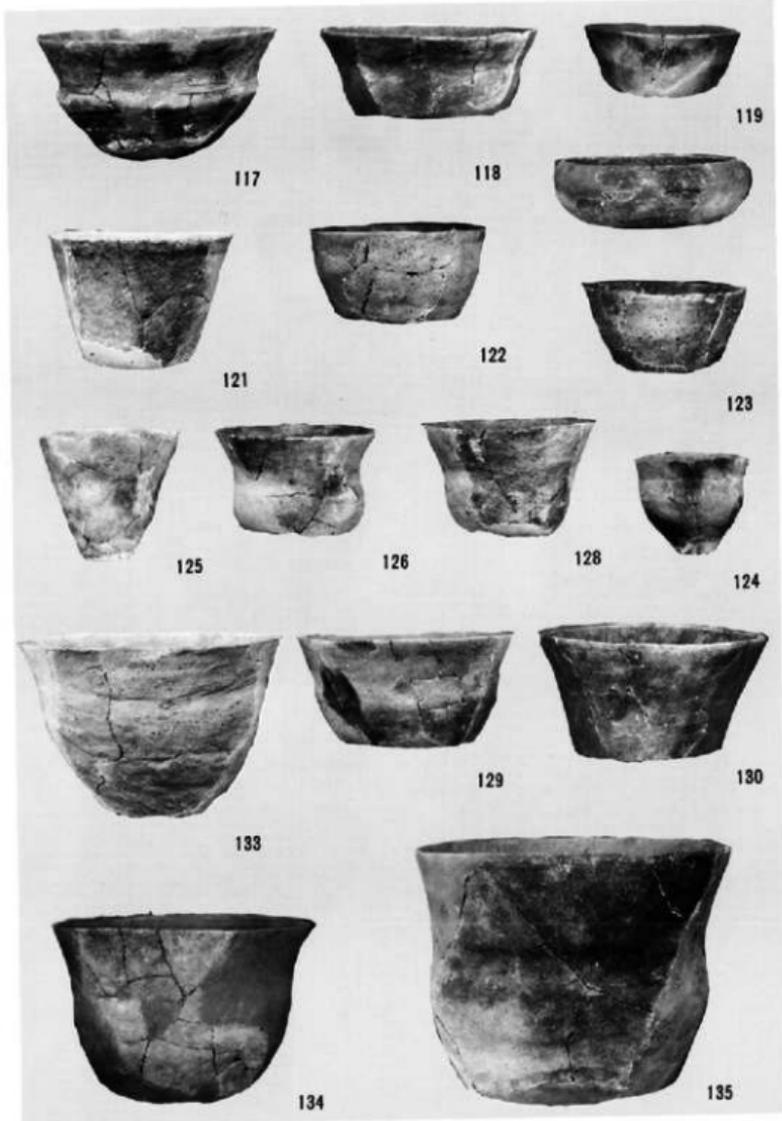
高坏彩土器・土製品

(縮尺不統一)



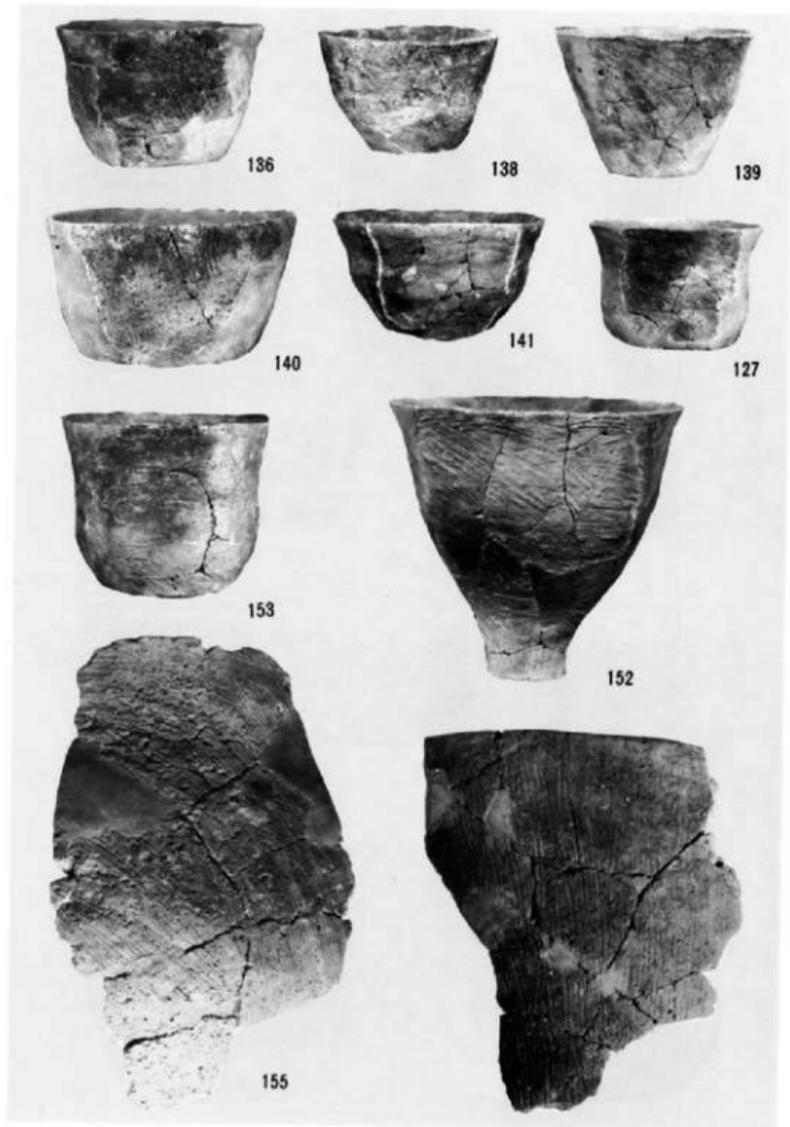
土偶

(縮尺不統一)



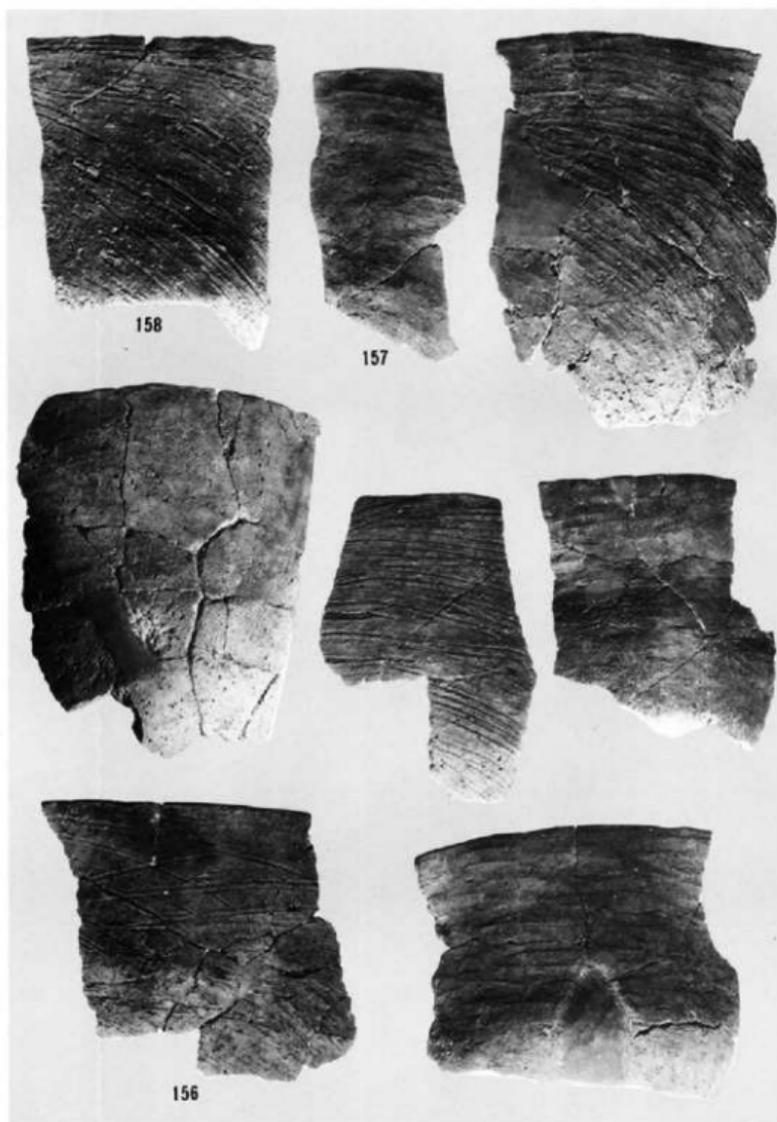
半精製・粗製土器

(縮尺不統一)



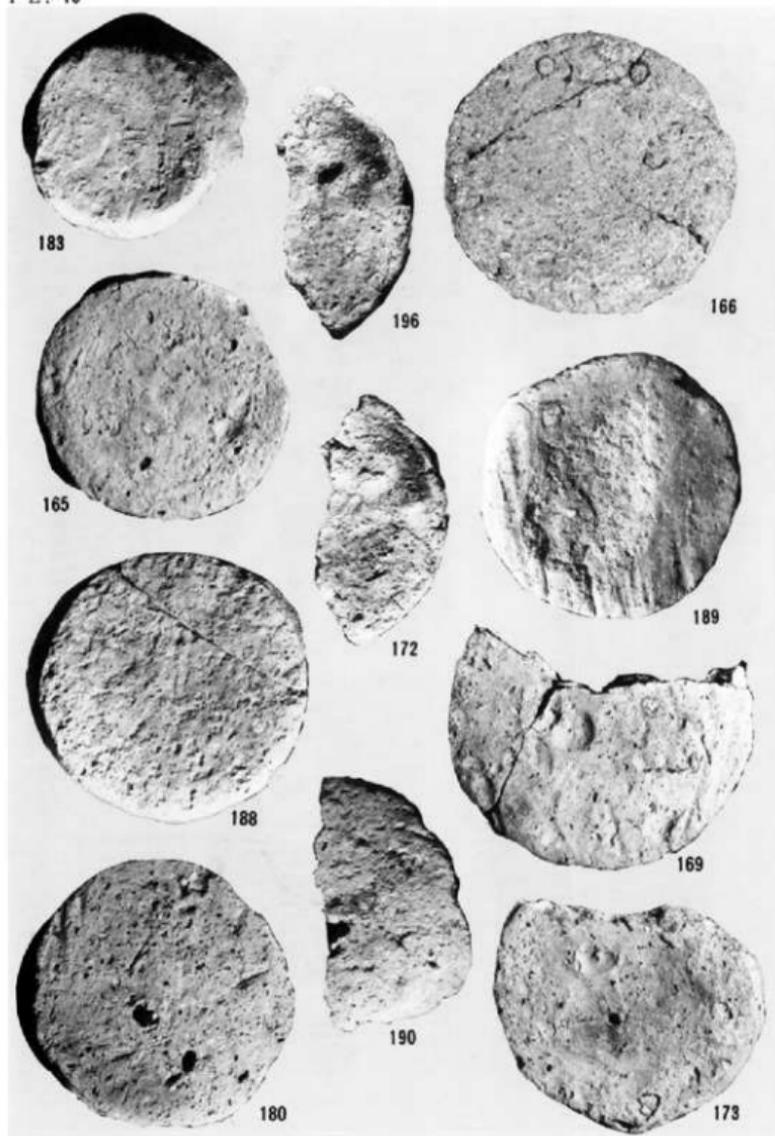
粗製土器

(縮尺不統一)



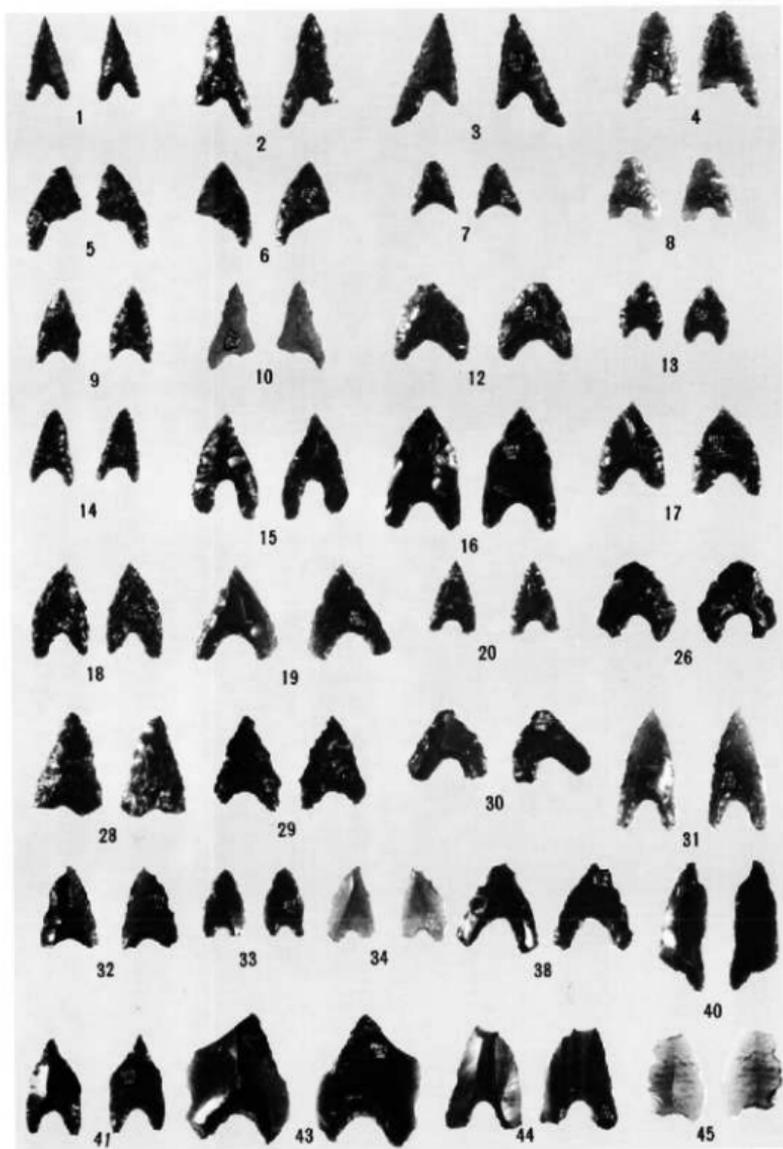
粗製土器

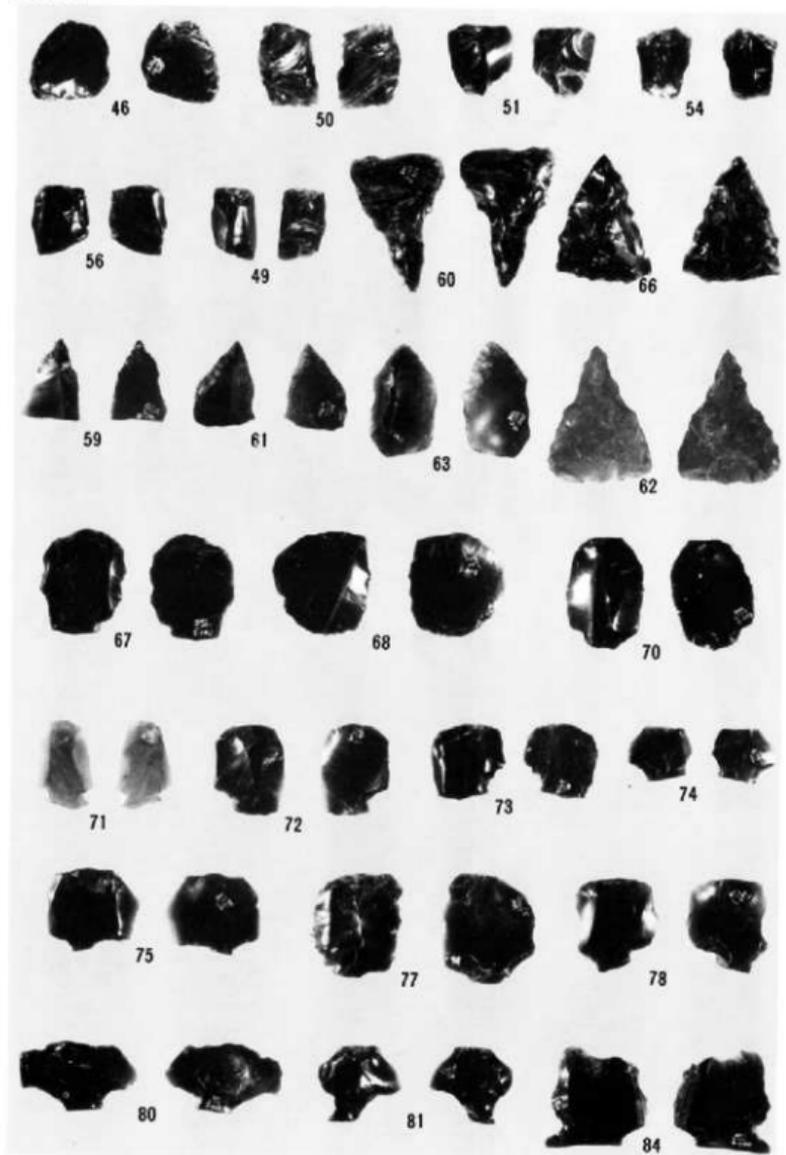
(縮尺不統一)



底部压痕

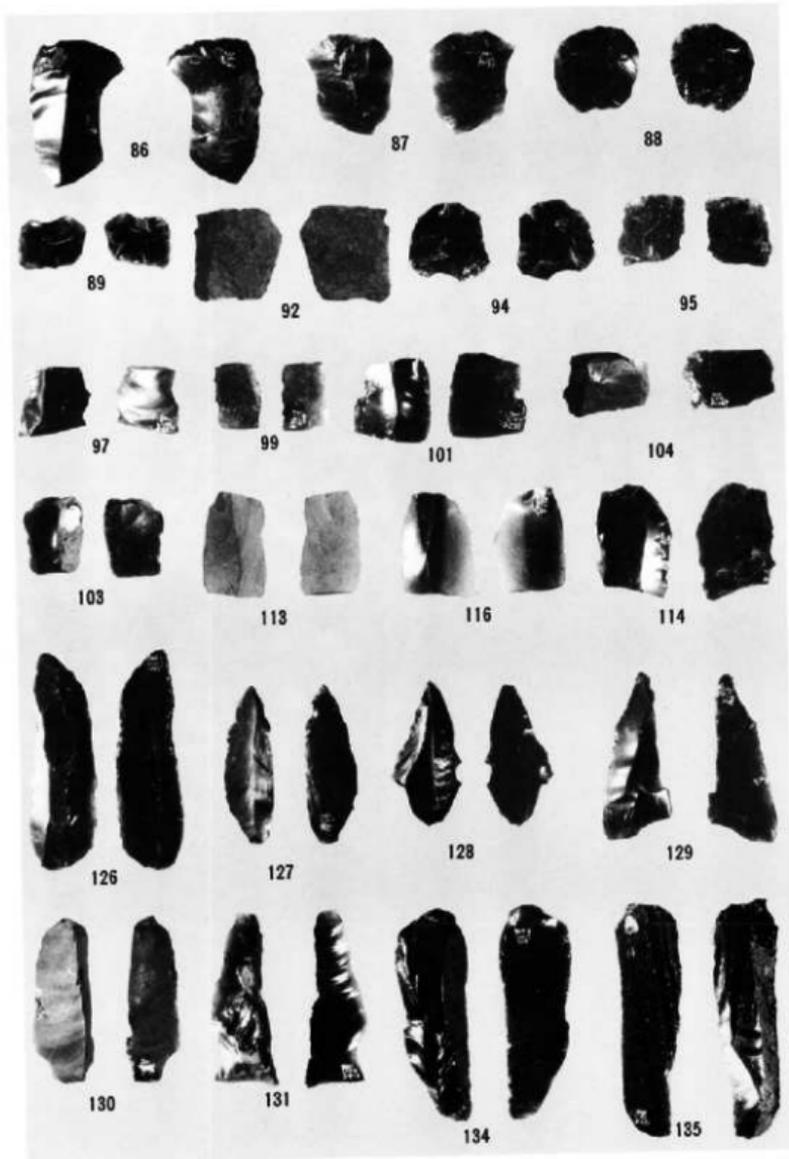
(縮尺不統一)





楔形石器・つまみ形石器等

(縮尺2/3)



サイド・ブレイド・刃器

(縮尺2/3)

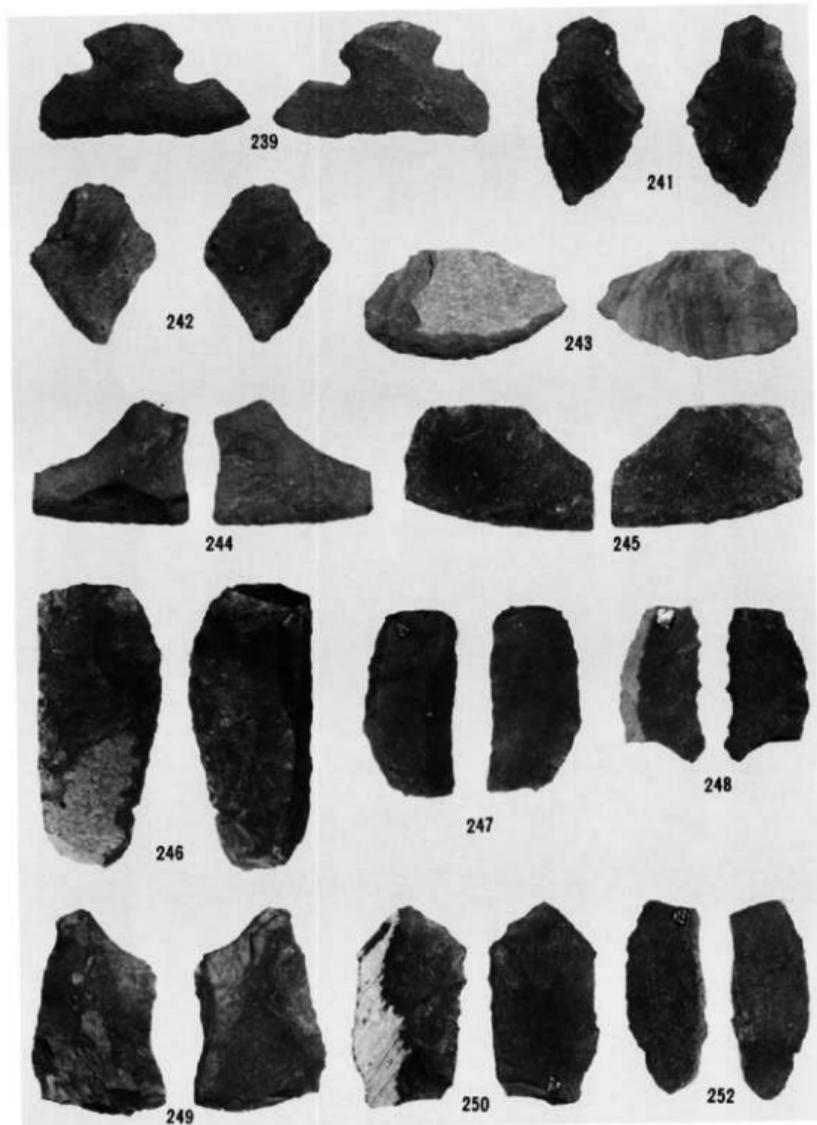


刃器一1

(縮尺2/3)

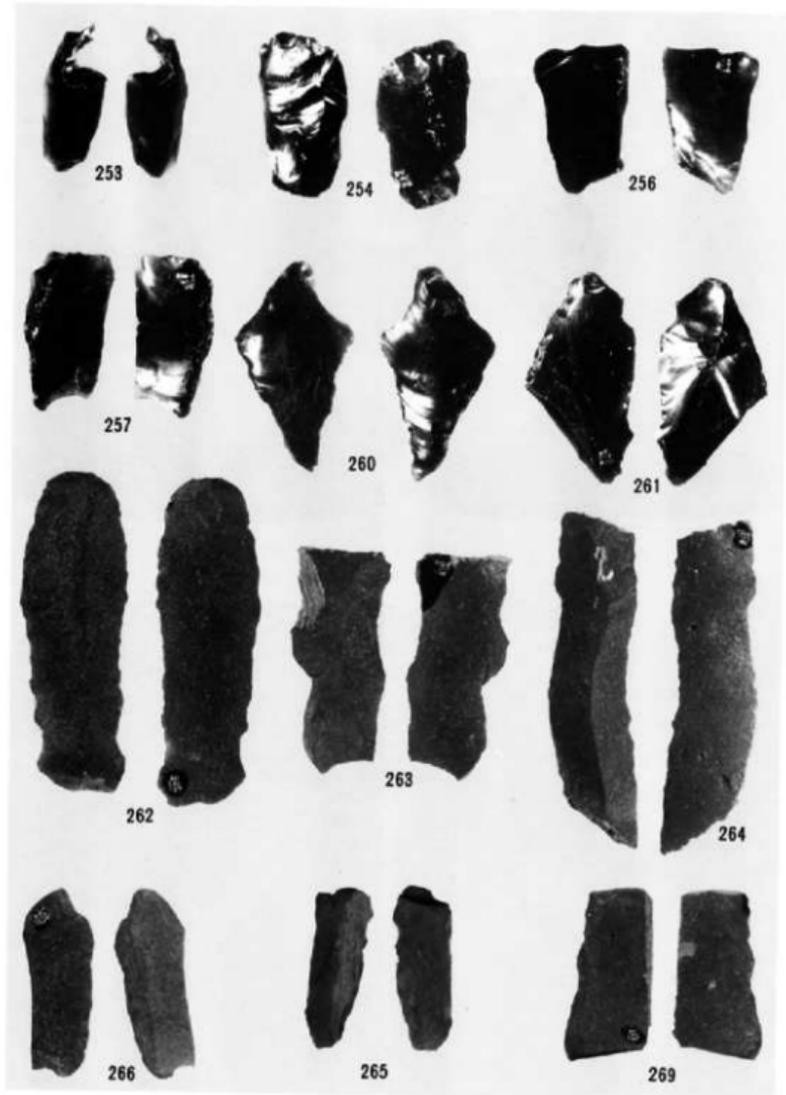






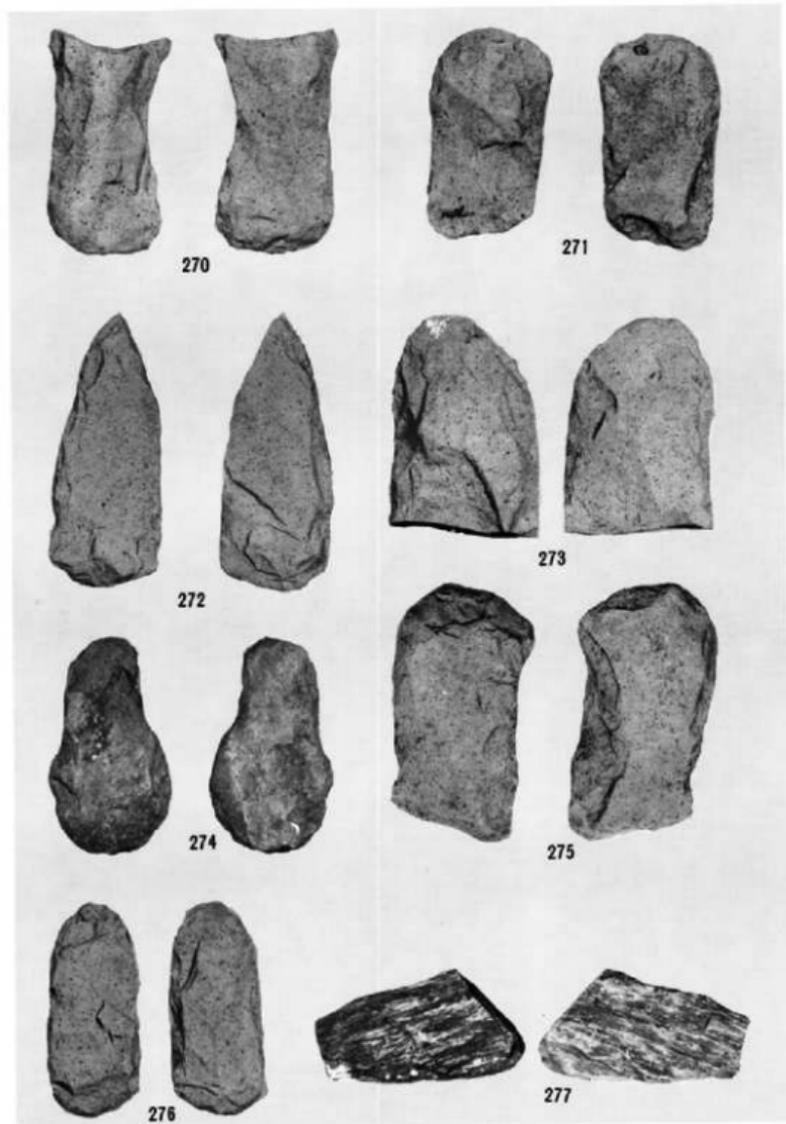
削器・掻器-1

(縮尺1/2)



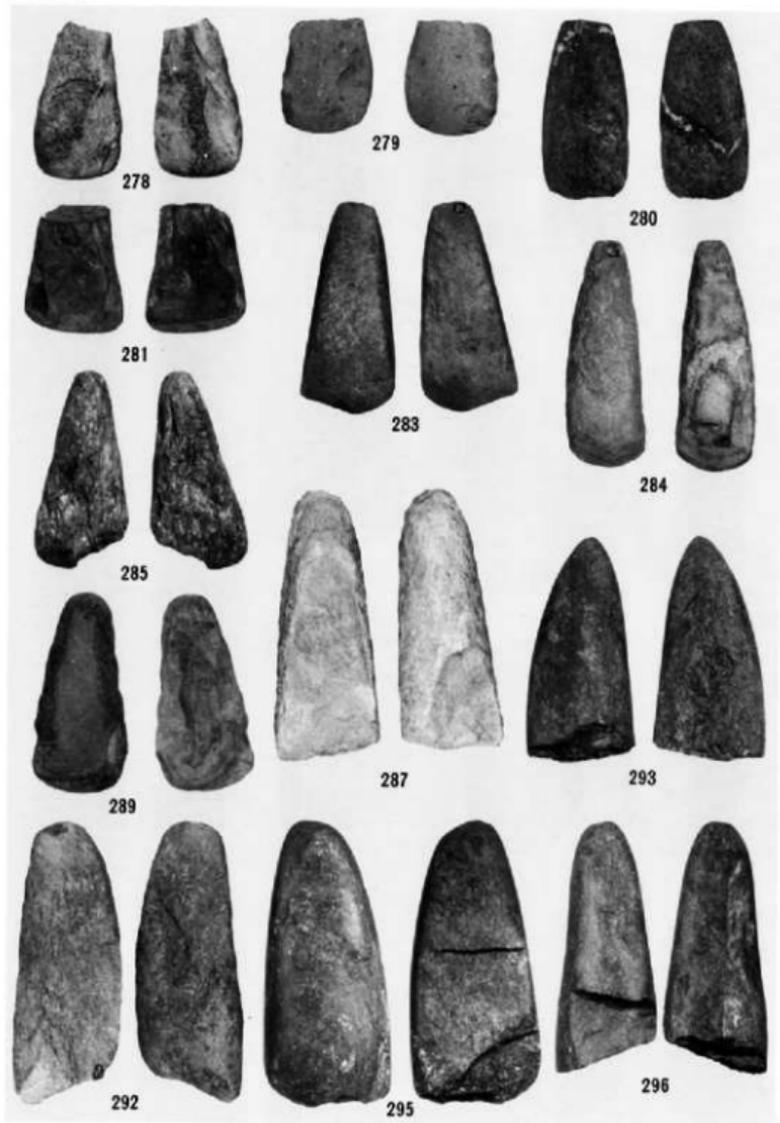
削器・掻器-2

(縮尺2/3・1/2)



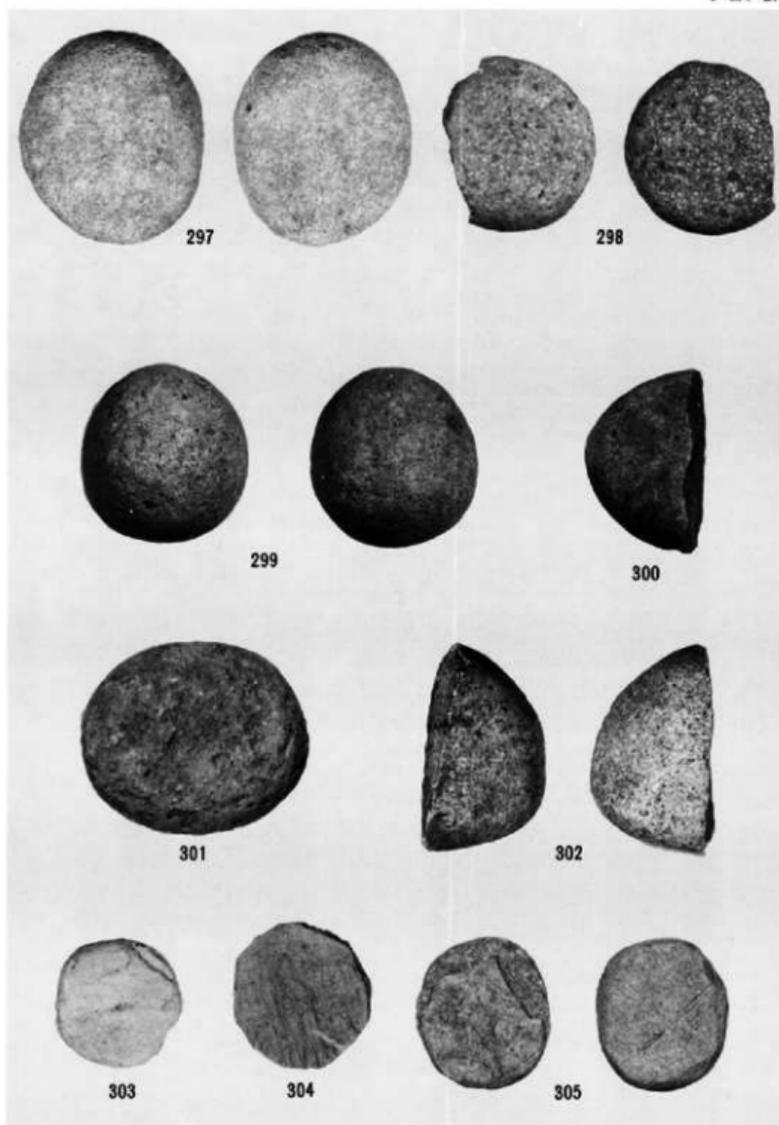
打製石器

(縮尺1/3)



磨製石斧

(續表1/3)



磨石・石製円盤

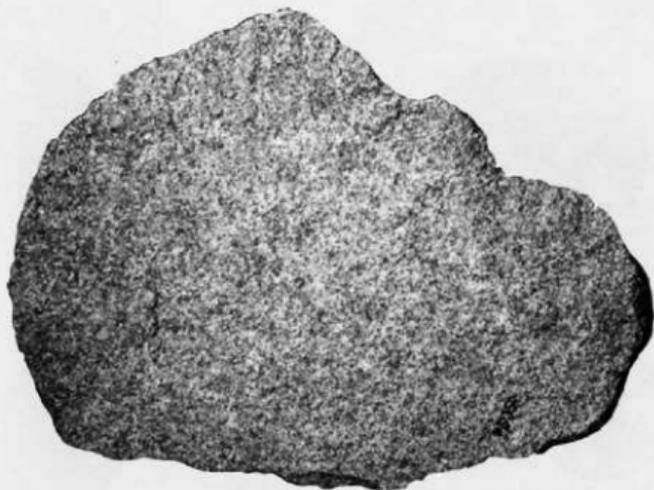
(縮尺1/3)



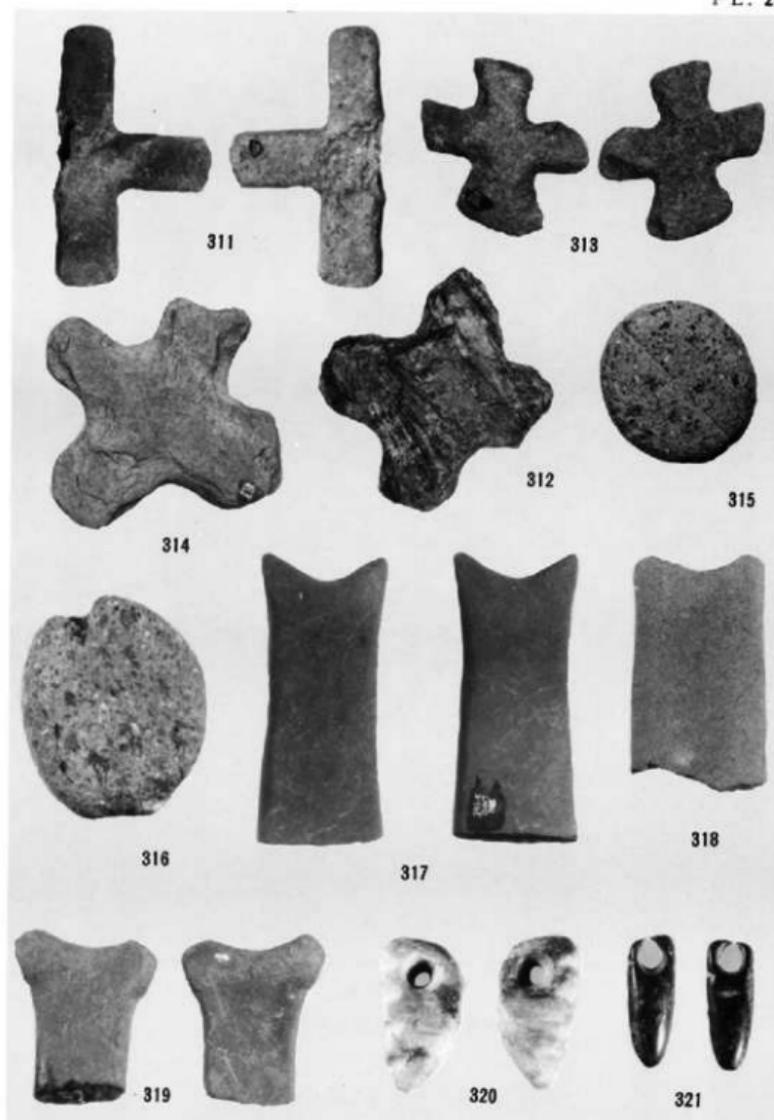
308



309



310



十字形石器・磨製石器・勾玉・石錘

(縮尺1/1)

---

福岡市早良区  
四箇周辺遺跡調査報告書

(5)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集

1983年(昭和58年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

印刷 株式会社川島弘文社

---

四箇周辺遺跡調査報告書 (5)

福岡市埋藏文化財調査報告書第100集

一九八三

福岡市教育委員会